
IS ~ 八咫鳥の導き ~

オラクル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS ～八咫鳥の導き～

【コード】

N0240T

【作者名】

オラクル

【あらすじ】

俺爆誕！社員の皆と共に会社を盛り上げるぜ！

……………すみません熱くなりました。

とりあえず二つの目標をクリアし、セシリアと幸せに暮らしたいなあ～

*この物語は、
オリジナル
原作前と原作沿いになっています。

一羽 く始まり(前書き)

自己解釈あります。

ダメな人はバツクで……

でも読んでくれると嬉しいです。

一羽く始まり

Side ????

暗い？

いや、静かだ

聴こえるのは

トクントクンと音を刻む……だけ

周りを覆う……が俺を暖かく包んでいる。

しかし、何かに押し出される感覚と共に息苦しさを感じる

俺の中にある……が吐き出され……が中に入る

堪らず俺は声を上げた

「オギアアアアア！……！」

「おめでとついでいます、雑賀さん。元気な男の子ですよ。」

「……よく頑張ったな百枝。俺達の子だ。」

「ええ、私達の子供。……よろしくね秋奈。」

ああ、俺は生まれたのか……

こうして俺の人生は始まった。

インフィニット・ストラトス
く八咫鳥の歩みく

Side 秋奈

年月は光の様に過ぎていく

俺がこの世に生を得てから五年。

えっ？飛びすぎだった？

……覚えてないんだよ。

あんな羞恥プレイなんて。

……。

……まあい。

とりあえず俺は、雑賀 秋奈と言う女子みたいな名を持って五年、つまり五歳になったのだが……

「なので、今後の対策を考え我社は……秋奈君？きいてますか？」

「大丈夫です。続けてください。」

「では……我社は海外進出と共に」

何処に子供を会議に参加させる親がいる！

絶賛会議中だよ！この野郎！

たく！……何故この様になったのだろう。

確かに俺は生まれ付き精神が何故か！大人だった。

俗に言う転生か？と思ったが、よくある神様がうんぬんや、特殊能力がどうだっと言う流れはなく純粹に物覚えが良い子供なだけ……

ある日、新聞を読んでいると父様が「……秋奈？何が書いてあるのかわかるのか？」と言うから一面事に説明していたら「明日から一緒に会社へ行くぞう」と……

俺も若かったもんだ。

父様と母様と一緒に掛けられるからと、意気揚々と発言しまくっていたらこんな事に……

普通なら子供を会社に連れていけば上司達に文句を言われるもんだが……

「以上になります。……いかがさいますか？ 雑賀社長？」

「おう！ 来月から俺と百枝で各地を周り生産ラインを確保してくる！ 留守中は頼むぞ！ 高梨、磯野。」

「はい。」

我が雑賀総合商社（以後 S S S）のトップだった……

更に専務達もクレイジーで「我社は男・女。そして子供の三視点から世の中を見れる企業だ！ 発展するぞ！ ガハハハハア！」

って感じで俺を認めてやがる！

「ハア……」

「ん？ どうした秋奈。何か策でもあるのか？」

「いえありません……」

アンタラを止める策なんかねえよ……

「以上で終わりにする。みんな宜しく頼むな！」

「「「「はい！」「」「」

「「………はい。」

本当にどうなるんだろうか……

o u t 秋奈

S i d e 奈祈

おう！俺は雑賀奈祈！

秋奈の親父だ！

そこで溜め息を吐いている我が自慢の息子が少し気掛かりだか！

本当に気掛かりだか！！

本当に気掛かりか r y ……

………

少し暴走してしまったな！
わりい！

んで我が息子の天才（奇才）ぷりを紹介するぜ！

俺が、家に帰ると秋奈が新聞と言う名の敵対企業の資料を読んでいた。

なぜ新聞形式なのかって？

百枝の趣味だ！

んな訳で秋奈に何書いてるかわかるか？って聞いてみたら……

『このかいしゃは、ぎょうせきからみるにこくないしえあよりかいがいしえあのほうがあっているとおもいます。なぜなら』

本当にビックリだぜ？

しかも俺と考えている事が同じときたもんだ！

次の日からsssに連れていったね！

おかげで業績右肩上がり！

本当に俺の子は天才（奇才）だよ！

将来が楽しみだ！

o u t 奈祈

青空↳ 青空↳

白い雲↳ 白い雲↳

小鳥達↳ 小鳥達↳

糞をした↳ 糞をした↳

.....

S i d e 秋奈

は〜い 不幸な秋奈君だよ！ハロー！..... 終わり。

.....。

..... いや、何が不幸かって？

それはな.....

「..... 気持ち悪い」

「まだ治らないのか？秋奈。」

「困ったものですねぇ。」

絶賛船酔い中だよ！この野郎！

「おいおい頼むぞ秋奈？今日の会談のメインは、お前なんだぞ？」

「わかってます、父様。」

そう今は、海外リゾート地開発の為、相手企業が待つ場所までクルーディング中です

うん。

こっから読んだ人は、わからないと思うが、6歳にして（誕生日を迎えました〜）仕事をし、世界を回っている俺がメインのIS小説だ！

……………なんか電波を感じたぞ？

っーかISって何？

世界にそんな物はありません！

……………。

現実逃避は、このぐらいにしとくか……………。

「…母様、今日の会談する企業の資料はありますか？」

「ええ、これよ。」

そういつて渡される広辞苑並に厚い資料。

母様？

調べたのは今朝からですよね？

なぜにこんな厚さになるのですか？

「禁則事項です」

さいですか……………。

何故、心が読めるのか？と言う謎をスルーし、資料を読みはじめるが……………

流石母様。怖いんですけど……………

あつちの企業のプロフィールから経歴など社員一人一人の経歴まで書いてあるわ〜。

「……………どう秋奈？大丈夫そう？」

「ええ、まあ……………」

「今回は、コチラに興味を持って貰えばOKだからな。……………無理はするなよ?」

興味を引かせる為の俺か……

確かに6歳児が会談に参加すれば、印象付けるだろうな。

しかし……

「無理をするつもりはありませんが……別にまとめて（契約）しまつても大丈夫ですよね？」

「「！！！！」」

これだけの資料と何故か頭の回転が速い我が頭脳があればいける！

………なぐんて締めてみたけど似合わないな

「ははは！おう！やっちまいな！」

「あらあら、本当に奈祈さんそっくりですね」

「そうだな！俺そっくりだ！」

両親が愉快に笑い会っている。

………ぶっちゃけると俺は、この光景を見たいが為に仕事をしているのだらう。

普通は小学校に通う所をこつして両親について行っている訳だし。

……まあ、仕事を楽しいと言つのもあるけどwww

とりあえず俺は、これ（笑い）を作る為にがんばりますか！

両親が笑い会っているのを見ながら俺もいつの間にか笑顔を作っていたのだ。

o u t 秋奈

S i d e 百枝

はあ〜い

今日の会談の立役者 秋奈の母。

秋山 百枝！改めて雑賀 百枝です〜

本当は今、奈祈さんの背中で寝ている秋奈を写真に撮りたいけど……

秋奈の事を教えるわ

……本当は今、奈祈さんの背中（ry

……

ごめんなさい。少しはっちゃけてしまったわ

秋奈の名前ですけど……

女の子みたいでしょ？

生まれてくるのが女の子だって思っていたから付けた名前じゃないわよ？

私が働いているsssのSymbolは八咫鳥。

実を言うと秋奈が出来たとわかった夜に夢に出て来たのよね

ビックリしたわ

鶴じゃないんですもの！

それで八咫鳥さん曰く……

『貴方達の子は世界を変える子になります。しかし、貴方達家族は、

長くはない。……なので貴方達の名をあの子に刻んで。そうすればあの子は助かるから！お願いします……。』

って言うのよ？

私はそれを聞いた時、八咫鳥さんに感謝したわ

秋奈が助かるのですから…

例えば私達が死んでも秋奈が生きれる方法がわかったのだから

それで私は奈祈さんにその事を話したわ。

最初は半信半疑だったけど、私の真剣が伝わったのか信じてくれて、その日は会社を休みにして一緒に名前を考えたわ。

そして、名前は『秋奈』になったわ。

え？女の子の名前だって？

男の子の名前も考えたのよ？

でも八咫鳥さんが

『男性の名前は、死を偽れない。女性の名前で！』

って夢の中で言うのよ？

だから秋奈……

そう私達の大切な秋奈。

あの子の成長が見れないのが悔しいけど、私達が生きているかぎり
精一杯の愛をあたえるわ。

そうきめたの……。

だから秋奈。

強く育ってね。

そして、私は秋奈を優しく撫でたのだ。

o u t 百枝

一羽　く始まり（後書き）

子（主人公）

雑賀　秋奈

父親

雑賀　奈祈

母親

雑賀　百枝

二羽く原作少女

え〜りん！え〜りん！助けてえ〜りん！

え〜りん！え〜りん！助けてえ〜りん！

……

Side 秋奈

ハロー！秋奈だよ〜！

ただ今、9歳の誕生日の真っ最中だよ〜！

え？7、8歳の空白期はどうしたかって？

仕事だよ！この野郎！

……。

ごめん、みんなごめん。

今は母様の友人のローズ・オルコットさん夫妻が、俺の為に誕生日会を開いてくれると言うからイギリスまで来たんだが……

…実を言うと俺、現在進行形で困ってるんだよ？

何故か？つて……

俺が聞きたい。

ごめん、わかりやすく言っしょ。

今の状態。

俺 (。 。 ;) エエ！？

少女 (* 。 *)

両親 (| |) ニヤニヤ

ローズさん (| |) ニヤ

周りの人 (| |) ニヤニヤ

わからないかな？

周りが、俺と少女を暖かくそれは暖かく見てるんだよ？

…どっしりよっしょっこれ？

「どっしりなんですか！？」

俺が聞きたい……。

10分前

俺は誕生日会の料理を食べていたら、金髪の女性と少女が近付いてきた。

「君が、秋奈君か……。本当に奈祈にそっくりだ。」

「……あの〜どちら様で？」

「ふ、私は百枝の親友のロー。まあ！なんて失礼な方なの！」
「こらセシリア、初対面の子に言う言葉じゃないぞ？」

「でもお母様！私達が話しかけてるのに、この方は！」

……シザース。

少女よ、俺は何かしたか？

「すまないな秋奈君。この子は私の娘だ。セシリア挨拶しなさい。」

「……セシリア・オルコットですわ。」

「一様、スカートをちよんかつまみお辞儀をしているが、顔が嫌がつているぞ？」

「俺は雑賀 秋奈です。」

「ふん！品がない挨拶ですわね！」

……………。

「これセシリア。彼は5歳の頃からビジネスを始め、各分野で成功している天才だぞ？」

「いや、天才なん 「偶然ですわ！」 ……………。」

「偶然も実力の内だ。」

「……………極東の猿は単純ですわ。」

……………。

おいおい？

少女よ？俺もキレル時はキレルぞ？

「……………言い過ぎだセシリア。謝りなさい。」

「猿に何故謝る必要が？」

……………プチ。

「セシリ 「オルコットさん」 ……どうした、秋奈君？」

「いえ、セシリアさんとお話が……」

「……うむ、わかった私は席を外そう。」

そう言うとローズさんは、両親の方に歩いて行った。

「……なんですか？」

警戒心バリバリだな。

「なに、極東……日本人は猿と言う言葉を撤回してほしくてね。」

「そのような必要はありません」「君の尊敬する母は日本人と親友関係らしいが？」　「ッ!!」

「君の考えだと君の母は、猿と友達になれる様だな。」

「なっ！貴方はお母様を侮辱しているんですの!？」

「そしたら君は俺の両親を侮辱しているな?……俺は両親を尊敬している。今君が味わった気持ちは、俺も抱いているんだよ!」

「……だからなんですか？」

「はあ〜此处まで言ってもわからないのか？」

「君の価値観だけで人を判断するな！君の格が落ちるぞ!」

「……え?」

Out 秋奈

Side セシリア

「……………え？」

な、なんですか？いきなり。

「いいか？君も何時かは社会に出る身だ。そんな偏見だけで生きていたら何時か自分の首を絞める事になる。」

「……………。」

「直接会いに行き、人を見るそれが、雑賀のやり方だ。」

「……………。」

「俺は両親が侮辱された事は少しは怒っている。しかしな、まだ9歳の女性がそんなに歪んでいる方がもつと頭にきてるんだよ！」

……………すると、この方は私の為に怒ってくださっているのですか？

「だから前言撤回を求める、そして、君は君の”眼”を育てろ！」

ッ！！！

……………父とは違う。

誰にも媚びることない。

まっすぐな強い眼差し……

なんですよ!?

この胸の高まり……

「そして君は「……撤回しますわ。すみませんでした。」……わかつてくれたか。」

知りたい……

この高まりを……

知りたい……

貴方の事を……

「先に社会に出た先輩からの言葉だ。ちゃんとした”眼”を育てるよ? 力になるかわからないが俺も協力する。」

ッ!!!!

……協力する。

……。

「でしたら、社会勉強の一環として、この後のダンスに付き合ってくださいらない?」

「……………え？」

o u t セシリア

10分後

S i d e 秋奈

「どうなんです！」

少女よ。俺達はさっきまでいがみ合っていなかったかい？
それがいきなりダンスとは……………

「……………今の私では踊ってくださらないのですか？」
ぐはっ！

涙目の上目遣いは禁止ですよ！

「い、い、いや、そういう事は経験がなくて……………」

「でしたら私が教えて差し上げましてよ！」

へ、Help me〜！

神よ助けて〜！

……いや、八咫鳥よ！
俺を導いてくれ！

「あゝきゝな」

少女の後ろから母様が歩いてくる。
Yes！導いたのは母様か！

「レディーからのお誘いは断るものじゃないわよ」

……いや、満面の笑みを浮かべた母様よ。

楽しんでいるな？

俺は、助けを求め、父様に目を向けるが……

……そらされた。

……。

くそ！雑賀秋奈！腹をくくれ！

「……マドモアゼル、私の相手をしてくださいますか？」

「ええ！喜んで！」

俺は、照れながらも少女の手を 「セシリアと呼んでください。」

……

セシリアの手を引きながらダンスホールへとむかったのだ。

Out 秋奈

Side 百枝

「本当に、シャイな所まで奈祈さんに似ちゃったわね。」

「……そう言うな。俺は頑張ったぞ？」

ふふふ、私がどんだけ赤くなる奈祈さんで萌え……苦勞したことが

……

「百枝、奈祈。」

「どうしたの？ローズ？」

「いや、感謝してる。セシリアのあの考えは、治したかった所だ。」

「……流行り、ジールの影響か？」

「ああ、夫は婿だから遠慮がちだな。」

「……ローズ？大きなお世話かも知れないけどジルさんとは仲良

くね？」

「……………善処する。」

まったく、素直じゃないんだから。」

「しかし、秋奈君は凄いな。一人の経営者として素直に感じたよ。」

「「自慢の息子だ！／よ」「

「……………すると私からは彼は未来の義息子か。」

「ぶっ！」

ローズの言葉に奈祈さんは、吹き出した。

あらあら、ハンカチは何処かしら？

「……………ローズ、気が速くはないか？」

「なんだ？私の娘は気に入らないのか？」

「いえ！超気に入りました！だからネクタイを絞めるな！」

「ふん！わかればいい。」

「あらあら〜」

ローズ？奈祈さんで遊ぶのはいいけど程々にしなきゃ私が絞めるわよ？

o u t 百枝

二羽 〱 原作少女（後書き）

〱 秋奈の関係図 〱

セシリア 初対面 友達

に変化

三羽 く世界革新(前書き)

SSSについて

雑賀総合商社

・12年前に設立。

幅広く手をだしており、国内外共に有名な大企業。

特に変わった物が強い。

例：味が長く残るガム

例：飲食店『ざ・ピザ丼』

例：航空会社『アイキャンフライ』
など

技術力・経済力・発言力が強く国内の半数の企業を傘下に行っている。

政府も強く言えない企業。

構図

社長：雑賀奈祈(32)

副社長：雑賀百枝(31)

副社長：雑賀秋奈(9)

専務：冬月正(52)

専務：碓元道(40)

専務：舵亮太（31）

秘書：赤城律子（30）

執事：磯野海舟（24）

三羽　く世界革新

Side　秋奈

イギリスで行われた誕生日会から数日、俺は生まれ故郷の日本に帰ってきていた。

「……今度は日本に来て下さい。っと送信！」

そして今、セシリアにメールを送った所だ。

あの後、メルアドと電話番号を交換したんだよな。

「秋奈　お昼ご飯よ」

「はい　く　く　く……セシリア返信速いな。」

女子ってこんなにも速いのか？

携帯を開け、受信Boxを開きメールを見る。

『ええ！ぜひ行ってみたいですね　その時はエスコートしてくださいね？』

ははは……

ダンスの後はエスコートか……

少しは勉強した方が良さそうだな。

返信は飯の後にするとして、俺は割り振られた席についた。

「セシリアちゃんからメール？」

「ああ、今度日本でエスコートしてくれただって。」

「ふふふ 良かったわね？」

……母様よ、何故そんなに笑顔なんだい？

「秋奈、大切にしろよ？」

「ああ、わかっているさ父様。」

何せ初めて出来た同世代の友達だからな。

父様と話をしている中、美味しそうな匂いが漂ってきた。

「さあ奈祈さん。食べましょう？久しぶりの三人でのお昼ご飯を」

昼飯はスパゲティーか

「そうだな！よし！」

「『『いただき』」

『『『』』』』

シザース！

タイミング良すぎだろ！

.....。

でも珍しいな？

父様のプライベートの携帯に連絡がくるなんて？

「悪いな百枝、秋奈。ちょっと待ってくれ。」

「構わないよ。父様。」

「冷めないうちにね？」

「ああ。……俺だ。どうしたんだ？」

会社の事は仕事様に掛かるのに、プライベートに掛かるなんて……

急ぎの用件なのかな？

「なんだって！百枝！急いでテレビをつけてくれ！」

「ええ！」

母様は直ぐにテレビを付けた。

そして聞こえてくるのは……

『日本国民のみなさん！安心してください！今、政府の要請により自衛隊がミサイルの追撃に向かっている所です！』

必死に叫んでるキャスターだった。

な、なんだこれ？

「奈祈さん！これは！？」

「磯野の話だと日本を射程範囲内とするミサイル基地のミサイルが
一斉に発射されたそうだ！くそ！」

おいおい、何の冗談だよ！

『ただ今、自衛隊の戦闘機が発進しました！』

うるさい！黙れ！

どんな優秀なパイロットや機体でもタイムラグ無く届くミサイルを
全て追撃できるか！

「百枝！秋奈！SSSに行くぞ！社員の安全を確保する！」

「はい！／ええ！」

くそ！何なんだ！いきなり！

日本に戦争でも吹っ掛けるつもりな『あ　　！何でしょうか！あれ
は！？』……………うるさい。

俺は今後の対策を考えつつ、テレビを消そうとしたが、テレビに写
っているのは、ミサイルを撃墜する白い騎士だった。

「あれはISS！？」

「母様！何かしているの？」

「ええ、あれは一ヶ月前に発表があった篠之乃博士が作ったマルチフォーム・スーツ。通称ISよ！」

「……マルチフォーム・スーツって空を飛ぶものなの？」

「本来の目的は宇宙空間での活動を想定とされているし、IS自体が女性しか反応しないっと言う理由からあまり評価されなかった物よ。」

「……………」

高速で接近してくるミサイルを撃墜出来る性能。

単独での空中浮遊。

そしてあの起動力。

しかし、女性しか反応しない。

！

これはまさか！？

「「マルチポンプだ！」」

「奈祈さん？秋奈？」

「だとわかれば話は速い！百枝はその博士と至急交渉しろ！秋奈は新たな人事異動の準備だ！」

「え、ええ。」

「はい！」

やっぱり、父様も同じ考えか！

これは、世界にISの関心、価値を高める茶番だ！

携帯が頻繁に鳴っている。

……たぶんセシリアだろう。

でもゴメン。

返信は今日中には返せそうにない。

俺はテレビを消し家を出たのだ。

o u t 秋奈

S i d e 三人称

日本を射程範囲内とするミサイル基地のコンピュータが一斉にハッ

キングされ、2341発以上のミサイルが発射された。

……しかし約半数をISと呼ばれるマルチフォーム・スーツが迎撃した上、それを見て捕獲もくしくは撃破しようと各国が送り込んだ軍事兵器の大半を撃破した事件。のちに『白い騎士事件』で世界はISの価値を、そして危険性を認めたのだった。

……そして世界は変わっていく。

Out

Side 東

「ちーちゃんお疲れ様」

「ああ、……それよりどうだ？」

「うん！スツゴい量のアクセス数だよ！速いのでちーちゃんがミサイルを迎撃開始した時から（……）メールが来たもん」

「……………速いな」

「私もいくらなんでも速過ぎだなんて思って読んで見たら 『篠ノ之博士、操縦士の方、お疲れ様です。これで世界は変わりますね。今後は我社との取引の程よろしくお願いします。』 だって……………」

「ッ！これは……………」

「調べる事なく私の元に贈られて来てるし、私がやったって核心を得て書いてある。……………束さん並の『天才』がいるかもね」

「……………何処の企業だ？」

「SSS……………雑賀総合商社。」

「SSSだと！」

「本当にビックリだよ」

ふふふ、本当に面白い会社だよ……………

三羽 く世界革新(後書き)

セシリア 友達 親友

に変化。

束 興味外 微妙

に変化

千冬 変な企業 やはり変な企業

に変化

四羽 へ革死（前書き）

秋奈 10さいへ

四羽く革死

Side 秋奈

IS……

正式名称

インフィニット・ストラトス

核となるコアと腕や脚などの部分的な装甲であるISアーマーから形成される、究極の起動兵器。

もはやISが、各国の抑止力の要に移っていた。

その為、この一年でアラスカ条約やISを監視する委員会の設置、更にはIS操縦者育成用特殊学校を設置など世界がIS中心に動いていた。

そんな話題なISを……

作って見ました

いや〜

アポ取るのが速かったおかげで、コアを回して貰ったから解析したけど、ブラックボックスで何が何だかわからん状態に……

でも折角コアがあるんだからって、sss選抜技術班の下、俺が主任兼技術者で作ってみました。

あれだよ？

政府からの要請とか戦力補充じゃなくて純粹にって感じ……

け、決してガ○ダムを作りたい！って理由じゃないんだからね！この野郎！

……。

取り合えず、幾多の試行錯誤の末、俺と技術班の努力の結晶！

第2世代型『オイルフェイク全ては嘘』試作機は完成した！

……第2世代って？

ああ……、ガ○ダムは色々と装備が出来るから忠実に再現しようとした結果、『戦闘における用途の多様化が可能な機体。』として、第2世代型とされた。

……誰にって？

国際IS委員会っていう、IS条約に基づいて設置された国際機関

に。

……試作機って？

その国際機関様が『実用的かつ低コストで作りやがれ！』って行っ
てきやがったのさ……

それを聞いた瞬間、俺達技術班のテンションは約一名を除いて急降
下……

俺達はロマンで作ったんだよ！

偉い人には、わからないんです！

そんなに言うなら自分達でつ 「主任！」 ……出たよ約一名。

「主任！何故開発を中止にするんですか！」

「…俺達、SSSは基本的に兵器は作らないからだ。」

そう創立してから今まで、兵器と言う兵器は作ったり商品として扱
っていないのだ。

なのに、この男は……

「SSSの更なる発展にはISの開発は必須です！……それに世界

(委員会) は納得しませんよ!」

「世界(委員会) に流されたら、それこそsssの終わりだ。……でも確かに勿体ないのでIS商品はISスーツを中心に開発をする。」

うん、あれは男女共に使える、素晴らしい防御服だからな!

「……納得できません。」

「お前以外はみんな納得してるけどな……。」

……… たつく。

国に嫁さん残してるから、速く実績をあげたいってのは、わかるけど……

一人の為にsssを危惧に合わせる訳にはいかない。

……… 戦争という危惧に。

………。

「……… 納得出来なくてもいい。取り合えず今後の対策を考える為に本社に向かう。……… お前もついて来い。」

「……… はい。」

はあ……… 先が思いやられる。

気を重くしながらも俺達は、SSSに向かったのだ。

o u t 秋奈

S i d e ?

何故、主任は理解しないんだ……

流行り10歳のガキには、世界という物が理解出来ていない……

かくなる上は……

アソコに依頼し……

この私が……

o u t ?

Side 秋奈

SSS本社第三会議室。

ここで、先程の事について社長・副社長・専務・技術班班長を含め、
『オイルフェイク全ては嘘』と機体のデータを参照にしながら会議が行われていた。

「……と言つ訳で、SSSは、今後ISに関してはISスーツの良
作、改善、能力向上を考えて行動します。……よろしいですか？ 雑
賀社長。」

「……ああ、頑張ってくれ。」

父様の了解を得て、俺達技術班の方針は納得いく内容で会議は終わ
ったのだ。

……約一名を除いて。

まだ納得してくれないか……

……仕方ない。

俺は、直接説得させる為、行動にでた。

「……まだ納得してくれないか？」

「……主任。」

「そんなにISの開発がしたいのなら、知り合いの業者を紹介す
……主任。」

「もう大丈夫ですよ。ここが私に相応しく無かったただけですから……」

？

「……どういう意味だ？」

「貴方には……10歳のガキにはわかりませんよ。」

「おい！テメエなんて事言うんだ！」

俺に対する暴言に技術班班長が怒鳴り掴みかかろうとするが……

「……さようなら。」

別れの挨拶の方が速かった。

「……どういう意味だ！デユノア！」

そして会議は停電し、爆発音と共に炎が舞い上がったのだった。

o u t 秋奈

S i d e 三人称

雑賀社爆発テロ

このニュースは、世界各国で放送された。

世界的大企業 s s s 本社の会議室で爆発物が爆発し、s s s 社が爆発から10分後に崩壊したのだ。

世間では、

何故テロの標的にされたか？

今後 s s s はどうなるのか？

など色々問われていたが……

ビルが崩壊したのに関わらず、

死者2名
重傷者1名

と言う奇跡の結果になった事が話題を呼んだ。

何故この奇跡が起きたのか、各メディアはSSS社員にインタビューをしたが、

社員はみな口を揃えて

『社長達が助けてくれました。』

と答えるのであった。

……………そして、社員達の英雄となった社長達。

雑賀奈祈。

雑賀百枝。

は、ビルの中から発見され、この世を後にし……………

雑賀秋奈は……………

重傷を負い更には、意識不明だが生きて、ISのコア(……)と共に発見されたのであった。

o u t

四羽 く革死（後書き）

今更ですが作者は文作がありません。

シリアスが苦手です。

さらに国語が苦手なので脱字誤字があると思います。

許してください。

五羽く志

Side 秋奈

暗い？

いや、静かだ……

聴こえるのは、俺の心臓の音だけ……

うつすらと瞼をあげるが……

やはり、見えるのは暗闇だけ……

ハハハ……死んだのか。

地獄にも天国にも見えぬ暗闇が広がっている。

俺は『死』を受け入れ、体の力を抜くが……

ありえない事に……

……神々しい一筋の光が近付いて来たのだ。

『……貴方は死んでないわ。眠っているだけ。』

俺は知っていた。

この光を放つ生き物を…

……八咫鳥。

両親に教えられた、sssのSymbolMarkにして、守り神。

そして……

……太陽の化身。

『貴方は本来は、『裏切り』『拒絶』『憎悪』が一斉にうごめいて、死ぬ筈だった。でも……

……私は認めたく無かった。』

……どういう事だ？

『貴方の両親に頼んで、『死』からの螺旋に対抗する手段を教えた。そして貴方は生き残った。』

……俺だけが？

『『死』の螺旋は、貴方達3人を飲み込む。……一人一人が持つ力だと対抗出来ないけど、貴方は二人に力を……貰えた。』

……。

『そして貴方は生き残った。』

……何が起きたんだ？

『……知れば悲しいですよ？』

……知らない方が悲しい。

『……そうですか。なら』

八咫鳥が大きく翼を広げると、翼から光が漏れ俺の頭に流れてくる。

ぐっ！！！！

激しい頭痛が俺を襲う。

そして、映画の様に映像が流れ出す……

……

『……どういう事だ！デユノア！』

激しく燃え上がる炎。

『し、知らない！お、俺は知らない！コンナになるなんて！』

走り逃げ出す男。

『秋奈！逃げろ！』

『父様は！？』

『俺は社員達を避難させる！』

『俺も手伝う！』

父様と共に扉をこじ開ける。

『キヤー！！！！』

『『百枝！／母様！』』

母様に崩れ落ちてくる瓦礫。

それを……

『俺は守る！だから動いてくれ！』

ISを装備した俺が破壊した。

『ISの武器を俺に！』

『私も手伝うわ！』

武器を両親に渡す俺。

『こつちよ！速く避難して！』

誘導する母様。

『ハアアア！』

瓦礫を切り捨てる父様。

『こちらから逃げろ！』

武器を駆使し、避難路を作る俺。

流れゆく、情報の中、

避難作業は順調だと思われたが……

『ヤバい！遮断シールドが降りる！』

分厚い二重遮断シールドが何故か発動していた。

このシールドは50m間隔に二つ連動して、閉じるシールド。

……つまり、一つ通れてももう一つが間に合わない。

なぜ？発動したんだ……

体験後は、幾らでも対処法が考えられる。

でも体験中の俺は……

……自身で閉まるシールドをこじ開けていた。

『っ！この隙間から速く逃げて！』

『秋奈くん!』

『磯野さん!速く誘導してください!』

『あ、ああ!任せてくれ!』

二重遮断シールドの隙間から続々と避難する社員達。

……でも。

『父様!母様!二人も速く!』

両親は俺と一緒に非力ながらシールドを支えていた。

『息子が頑張っているのに先に行く親がいるか!』

『秋奈!頑張りましたよ!』

3人のおかげで最後の社員が脱出するまで時間を稼げたが……

無情にもエネルギーが切れ、ISは解除された。

それを合図にシールドも降ろされたのだ。

……。

降ろされたシールドに背を預けながら

『ゲームオーバー、か……』

『奈祈さんたら……』

『父様、人生はゲームじゃないですよ？』

最後の会話をしていた。

『ハハハ！秋奈は現実主義か？楽しく生きなきゃな！』

『父様……。でも俺達はもう生きられませんね。』

『いいえ、違うわ。』

『……母様？』

『貴方は生き残るわ……。必ずね。』

『……何を根拠に？』

『『八咫鳥が導くから！』』

『ッ！……や、た、からす？』

『そう！だから貴方は大丈夫。』

俺を抱きしめる母様。

『何があっても、強く生きる。』

母様ごと抱きしめる父様。

『『頑張つて秋奈。』』

……………その言葉を最後に三人は崩れ倒れ、爆発音が響き渡つたのだ。

再生されていた映画が終わり、俺の意識は、またこの暗闇に戻ってきた。

……………。

上映された映画の一つ一つを思い出しながら、思考する。

……………デュノアは、確かに『裏切つた』が、黒幕はデュノアではない。

あの慌てぶりから見ると、アイツにとっても予想外な出来事だった
と言ったこと……

そうしたら黒幕は……？

『……貴方はどうしますか？』

八咫鳥が話し掛ける。

『私が、導きます。貴方がしたい事を教えてください。』

……俺がしたい事。

……。

……。

……。

……。

……俺は

『俺は黒幕を潰し、同じ悲しみを起こさない為に戦いたい！』

俺の意志に反応するように暗闇にヒビが入り初め、光が漏れだす。

『 わかりました。私が貴方を導きます。世界の闇を無くせるように……』

『 ……世界の闇?』

そして光が強くなっていく

『 え……フ……ト……む……抗う……に』

八咫鳥と光が重なり視界が白くなっていく

『 ああ、頑張るさ 八咫だから……』

最後に聞こえるかわからないが、八咫鳥 八咫に

『 俺を導いてくれ……』

そう囁いたのだ……

o u t 秋奈

S i d e 八咫鳥（八咫）

あの子の体が粒子になり、消えていく……

心の深層から旅立ったのだから……

……本当ならあの二人も助けたかった。

でも、私は所詮神の使い……

運命を曲げる事は出来ない……

二人を助ける事が出来かった私を怨んでもかまわない……

でもどうか……

『我が子に幸せを……』

そして私は……に戻っていった。

o u t 八咫

S i d e 秋奈

「JJJJは……」

重く塞がった瞼を開けると、真っ白な天井が見えた……

「そうか…戻ったのか…」

普通は『起きた』と思うが、俺には『戻った』と言う感じの方が強かった。

……そう、死の淵から

どのくらい寝ていたのかわからないが、体を起こす作業が難しい……

やっとの思いで体を起こすと……

正面にある扉が開き……

「ッ！秋奈君！」

磯野さんが入ってきた。

「ああ、磯野さん。おはよう。」

「よかった！本当によかった！」

膝を付き必死に涙を拭く。

ああ、本当に迷惑をかけたな……

でも、俺はまだ迷惑をかけるかもしれない……

「磯野さん、感動している所で悪いが、今のSSSの状況を教えてください。」

「そんな！目覚めたばかりと言っの 「磯野！」 ……わかりまし
た。」

俺は止まる訳には行かないんだ……

世界の闇を無くす為に……

o u t 秋奈

六羽 く立直（前書き）

自己解積多数。

セシリアが精神的に弱い？

六羽く立直

Side 秋奈

一年間……

どうやら一年の間、俺は寝ていたそうさ。

一年と言つ時間は色々と世界を変える。

ISがスポーツとして、扱われる様になったり、SSSの傘下にあった企業が続々と独立していった。

中でも驚いたのは、フランスでデュノア社が設立した事だ。

なんでも第1世代型IS『ラファール』を量産し業績を伸ばしているそうさ。

……だがスペックを見ると『全ては嘘』のパクりだな。

むしろ、劣化している。

『全ては嘘』オールフェイクは試作機だが、第2世代型と言われていたが、『ラファール』は第1世代と言つ点からみるにな……

……。

……この事について、社員達、主に技術班達が色々言っていたが、

デュノア社をシカトする事にした。

理由は簡単。

SSSの技術班がデュノア社に移っていない点、『オイルフェイク全ては嘘』が劣化している点から見て、デュノア社は必ず技術・情報力不足で経営危機に陥るだろう。

だから、弱った所を喰らえばいい。

三日天下とは言わないが、後五年の猶予だな。

……だが、よく社長不在の中、社員達は辞めたり、移ったり、しなかったものだ。

その事を不思議に思い聞いてみたが……

技術班達

『デュノアの下で働くのはプライドが許さない!』

社員達

『助けてくれた、社長達に申し訳ない!』

幹部達

『秋奈君は必ず目覚めると信じていた!』

などなど……

本当に俺は、いい社員を持ったよ……

「社長！ たった今水着製造企業SwimmingがSSSにくだりました！」

「了解。引き続き他企業にもアプローチをかけてくれ。」

そして、俺自身も変わった。

社長不在ではまずいので社長に就任した。

それから、一年で右肩下がりの実績が右肩上がりになり、独立していった企業が戻ってくる様になった。

基本的に独立していった企業は『裏切り者』とは見ずに接している事が好印象だったらしく55%の企業が戻ってきた。

そして俺の身体だが……

髪の色素が抜け、白髪に。後遺症なのかわからないが、目が赤く染まり視力が下がったのだ。

父様と母様の遺伝であった茶髪黒目で無くなったのが悲しいが、セシリアが『よく似合ってますわ！ 気にしないでよ！』とやってくれたので、心が軽くなった。

そして1番の変化は、男性でISを動かせる様になった事だ。

世界初だが世間では、俺がISが使える事は流れていない。

なんでも社員達が口を揃えて隠蔽してくれたそうだ。

その行為は、とても嬉しかった。
sssを離れる事が出来ない身として今、政府に連行されるのはま
ずい。

遅かれ早かれはれる事だが、せめてsssが立ち直るまでは秘密に
しておきたい。

……まあ、バレたとしても世界的大企業の社長を強制的に連行する
政府は何処にもないだろう。

……sssからの援助金が貰えなくなるしなww

……。

……以上が目覚めてからのsssの状況だな。

つか、俺は誰に説明しているんだ？

電波を感じたが……。

気のせいか……。

それはそうと、ISの第一回IS世界大会モント・グロッシンが開催されるらしい。

そんな訳で俺にも招待状が届いた訳だが……。

優勝者は、もう決まったと言ってもいいだろう…。

……織斑千冬。

IS発足の地の代表にして、判断力・技術力・そしてISをよく理解している面から見て優勝者は確実だろう……。

何より俺の考えでは彼女が・・・であるからには負けないだろう。

優勝者が『　　』　ん？メール？

プライベート様のアドレスを知っているのは、ごく僅かだから、だぶんセシリアだろう。

携帯を取り出し、メールを確認すると、そこには、信じられない事が書いてあった。

「磯野！至急イギリスに向かうぞ！」

「秋奈君？第一回IS世界大会はどうするんだい？」

「しるか！親友が泣いている時に行かない親友なんているか！」

俺は急ぎ社長室を後にした。

.....。

『.....お母様とお父様が亡くなりました。.....忙しいのは承知ですが.....貴方に会いたくなりました。』

.....八咫は、いや違うな。

神は優しくはないようだ.....。

o u t 秋奈

S i d e セシリア

越境鉄道の横転事故。

死傷者は百人を越える大規模な事故だった.....

.....あの二人はいつも別々にいた。

でもそれは、4年前の話し.....

秋奈さんの誕生日を堺に父は変わった。

婿入りしたせいかもしれないも母の機嫌を窺っていた父が、自身の出来る事を必死に探し、母をサポートしていったのだ……

ISが発表され女尊男卑になっても変わらなかった……

そんな父を母も信頼し、昔では有り得なかった夫婦間が戻りつつあった……

なのに……

莫大な遺産と私一人を置き去りにして、二人はいなくなってしまうた。

「お母様……お父様……」

二人の墓標の前でただ立ち尽くす……

そんな中、数人の大人が近付いてきた。

「オルコットさん。以後、資産の管理は私達で管理しようと思うのだが？」

「……え？」

な、なにをいきなり……

「君はまだ子供だ。大人の私達が管理する方がご両親の為だと思う

のだが？」

「……………」

「なにより、私達は君には、何も考えずに過ごしてほしい。……君も平和的に一生を過ごしたいだろ？」

お母様とお父様の遺産を他の人に預ける？

そんなの！

「わ、私は！」「いいから私達に任せろ！」　ッ！

「君は無知過ぎる！だから私達が管理すると言っているんだ！」

「変な考えを持たずに『はい』と言えればいい！」

目の前で、ニヤつく大人が憎いのに言い返せない。

……………でも私では、お母様とお父様の遺産も守れない。

……………

「……………わかりました。以後はオルコット家の遺産は、あな　「目を覚ませ！セシリア！」　え！？」

いつの間にか、私を囲っていた集団が二つに割れ、とても会いたかった人が現れた。

「……………秋奈さん。」

「セシリア。回りに流されるな！無知が悔しいのなら学べ！ローズさん達の遺産は君が守るんだ！」

「……………」

「何よりご両親は、それを望んでいる。」

わ、私にも……………」

「……………私にも守れるのですか？秋奈さんみたいに？」

「出来る！……………君は、その才能を持っている。」

秋奈さん……………」

「わかりましたわ。私が遺産を全て管理します！」

今は、まだ拙いですが、必ず守ってみせますわ！

だから……………」

秋奈さん？

見守ってくださいね？

o u t セシリア

S i d e 秋奈

……危なかった。

やはり、急いで正解だった……

目のハイライトが消えていたからな、セシリアは。

しかし、何処にもいる者だな。

こんな 「ちよつと君？何を勝手に決めているんだい？」 ……。

「君もそうだが、お金の管理は子供が 「黙れ！屑ども！」 な、何ッ！」

「その子の将来を潰す事は、俺が許さない。この金の亡者どもめ！」

「か、金の亡者！？人聞きの悪い事を 「黙れ！つと言った筈だが？」 き、君は何を権利に言っているんだ！」

……。

「俺は……幼なじみとして！親友として言っているんだ！以後、オ
ルコット家に不正を行うのなら……」

S S S 二代目社長 雑賀秋奈が相手になろう！」

「え、SSSッ！」

使いたく無かったが、社名を使ってしまった。

こんな屑どもの為に！

「直ぐに立ち去れ！死者が眠るこの地に貴様らは不要だ！」

「ひ、ひいいい！」

二つに別れていた人が一斉に散っていった……

ははは、まるで虫のよう ゲフン！ゲフン！

……いかな。テンションが上がりすぎた。

……。

「……セシリア。わからない事があつたら直ぐに、俺に、聞け。…

…俺でよければ力になる。」

「……あの時と同じですわね？貴方の力、頼りにさせてもらいまし
すわ。」

そして二人は、笑いながら握手をし、俺はこの地を後にしたのだ。
イギリス

Out 秋奈

六羽 〽立直(後書き)

秋奈10-11歳 寝てる

秋奈11-12歳 立て直し

セシリア12歳 両親他界。

七羽 く銃女(前書き)

秋奈13歳

一夏誘拐された

シャル、デュノア社に来た

七羽 く銃女

Side 秋奈

春つらら……

sssの立ち直しが、成功しsssにも採用シーズンを迎え終わり、
新入社員が意気揚々と働き始めた、五月……

暖かな風と共に彼女は現れた……

「ノエル・ヴァーミリオン？」

「はい、いきなりですよね？」

「……本当だな。」

何がいきなりだ！っだって？

採用シーズンが終了したのに、いきなりsssに入りたい！っって駆け込んで来たんだよ。

……アポ無しで。

「……俺の所に連絡が来るって厄介者なのか？」

普通は、社長の所まで来ないで、受付で『さようなら』的に追
い返す筈だが……？

「はい、詳しくはこちらに。」

磯野から書類を受けとって見てみると……。

ノエル・ヴァーミリオン

21歳 女性

出身地： スイス

ヴァーミリオン家

長女

免許： 四輪自動車

経歴： IS操縦経験有り

………ヴァーミリオン家は、確かISの武装関係を製造しているけど、弱小貴族であり発展はしていないよな？

それでも特に気にする事でもないしな……。

入社志望理由：

時間がないんです！

……………切羽詰まっているな

自己アピール：

モント・グロツン
第一回IS世界大会射撃部門優勝。

ん？

ど、どうやら俺は疲れている様だ……

目を擦りもう一度見てみる。

自己アピール：

モント・グロツン
第一回IS世界大会射撃部門優勝。

ははは……………。

……………なんだコイツ？

「……………磯野？」

「ええ、彼女は第一回IS世界大会の『ヴァルキリー』です。織斑千冬が総合優勝及び格闘部門優勝を達成させましたので、それ程大

々のに取り扱われていませんが……」

「……これが俺の所に来た理由か。」

「はい、……待合室で待たせていますが、会ってみます?」

「……ああ、直ぐに通してくれ。後、彼女の大会時のデータを至急調べてくれ。」

「調査済みです。」

「……流石だ。」

さて、この『ヴァルキリー』は何を考えているのかな?

磯野が退室してから、彼女のデータを見てみた。

ISは『ラファール』。

武装は、2丁の銃のみ。

……織斑千冬の正反対だな。

しかし、これは「ガン⇨カタ」か?

その系統の武術を屈し、格闘も行っている。

遠近距離とバランスの取れた戦闘を行っている。

……本当に何故うちに来たんだ？

彼女なら「失礼します。」……直接聞けばわかるか。

「どうぞ。」

扉が開き、磯野の後から金髪長髪、翡翠色の目をした女性が入って来た。

そして入るなり……

「わ、私雇って貰えますか!？」

と聞いてきた。

「……面接してから考えるよ。とりあえず座って。」

「あ、はい!」

慌ただしく座るノエルさん。

……少し落ち着こうよ？

「……面接の前に聞いていいかな？」

「えッ！は、はい！」

ははは…緊張感MAXだな。

「大会で『ガンIIカタ』みたいな武術を使っていたね？あれはなに？」

「は、はい！TRAチエーンリボルバーアクションと言って、ヴァーミリオン家に伝わる武術です。昔は警官一家だったらしく曾祖父が考えたそうです。」

ふん…TRAね。

「あの2丁の銃は？」

「ベルグヴェルクです。イギリスのIS企業に頼まれて作られていた銃です。」

「…作られていた？」

「製造費が高く、更に使い勝手が難しい事から…ドタキャンされました。」

「……………」

「……………」

…たぶん、イギリスの屑どもだな。

「……………最後にノエルさんみたいに優秀なIS操縦者は、引き手は

沢山いると思うけど……IS関係をあまり扱っていないSSSに志望した理由は？」

「ッ！……………」

あれ？だんまり？

「……………」

「……………」

いやいや、話してくれなきゃわからないですよ？

「……………笑いません？」

「笑う内容なの？」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………笑いません。」

こちらが折れた……………」

「わ！わたし！」

「は、はい……」

体を乗り出さないでください！

「ISに乗るのが嫌なんです！と言つか知らない人にあの格好を見られるのが！」

「……………は？」

「恥ずかしいじゃないですか！あんな水着みたいなスーツを来て大勢の人にみられるのが！」

「……………はあ〜。」

なに？ようするにあのスーツを着るのが嫌だからISとあまり関わりのない企業を探してSSSにつて事？

「……………『ヴェルキリー』の名誉を捨ててまでISと関わりたくない」と？」

「あ、あれはスイス政府がIS適正が高いから無理矢理出ろって！」

「……………時間がないつてのもスイス政府関係？」

「はい……………今週末までに決まらなかつたらスイスで新しくできる部隊の隊長になつちゃうんです！私が人に指示するなんてありえないです！」

……………今週って明日までじゃん。

苦労してるね、ノエルさん……。

「お願いします！雇ってください！」

うん……ノエルさんを雇う事に対するデメリットは……

・ I S 委員会がうるさい。

・ スイス政府がうるさい。

・ 第二回世界大会が出れない。（所属国が無くなる為）

か……。

しかし……

「…実際にもしろい。」

「え!？」

最初の二つは、s s s の名前を出せば押し通れる。

最後のは、本人が出たくないっていつてるしな……

そして、俺的にはメリットの方が高いしな!

「OK、雇うよ……磯野、そういつ訳だから。」

「はい、直ぐに手続きにはいります。」

「ほ、本当に雇って貰えるんですか!？」

「うん。……でも条件があるよ?。」

「……………条件?。」

「君を雇つと今後、SSSはIS委員会にIS製造をしらって言うてくるから、そのテストパイロットをやってもらつよ?。」

「……………え?。」

「大丈夫。ISスーツは改良するし、低活動で行つから乗つても一年に2、3回だよ。」

無理矢理乗せたつて効率悪いしな。

「はい、そのぐらいでしたら!。」

「次に……………俺にTRAを教えてくれ。」

これが最大のメリットだな。

「……………TRAですか?。」

「ああ、知ってると思うが、俺は命を狙われた時があつてね?。」

「ッ！」

「何か護身術を学びたかった所なんだよ。」

「……でも私が使うT R AはI Sでしか使えませんよ？」

「大丈夫だ。これは、極秘情報だが、俺はI Sに乗れる。」

「え？……えええええ！」

「そういう訳だから。………とりあえず今日は社内を案内するよ。」

「ちょっと待ってください！………どういう意味ですか！？」

「まず最初に、食堂だけど」

「質問に、あ！置いて行かないでください！」

喚くノエルを置いて、俺は社長室を出たのであった。

o u t 秋奈

七羽
↳ 銃女（後書き）

ノエル
秘書課へ配属

八羽（製造（前書き））

秋奈14さい

すみません更新遅れました。

八羽 く製造

Side 秋奈

ノエルさんがsssに入社してから一年、赤木さんの教育の下、見事に一流秘書になっていた。

仕事始めは、大変だった……

重要書類に珈琲をこぼすわ、アポを取り忘れるわ、休憩にっと出されたクツキーで死にかけるわと……

……でも今では俺の専属秘書として働いている。

そして案の定、ISの製造を委員会から通達された。

断るとうるさいので、とりあえず『オールフェイク全ては嘘』を改良した、第二世代量産式IS『フェイカー鷹作者』を作りあげた。

世界に第二世代型が多く、出回っている中、sssのIS製造は遅すぎるっと世間から言われたが、IS市場で世界四位の地位に着いた。

なぜなら、現在する第2世代型ISの中で最高峰の性能とアンチ・ロックを取っ払った他社の武器でも自由に使える機能、そして後付

け装備用拡張領域が他のISの二倍ある事が評価されたからだ！

……しかし、このISが、世界の主軸にならなかった理由が3つある。

1つ目は、高性能に比例して高コストと言う面。

2つ目に、世界が第三世代型ISの開発を進めている面。

そして最後に、デュノア社の新型ISの影響面。

……1、2は仕方がないが、3はどうなのよ？

デュノア社の新型第2世代IS『ラファール・リヴァイヴ』は、低コスト版『オールフェイク全ては嘘』だよ！

デュノアの奴、切羽詰まっているな？

パーツ代ケチったら上手くいったって感じだし…

それとも、情報にあった非公開のテストパイロットの影響か？

なんでも一年前に就任したそうだし……

偶然にしては、的確に低コストのパーツを使っている。

デュノア（馬鹿）が指示したとは、思えない……

……うん！きつとテストパイロットが優秀な奴なんだな！

……うち（SSS）に来ないかな？

……まあ、無い物ねだりしても仕方がない。

それで、万能型低コスト『ラファール・リヴァイヴ』と高性能高コスト万能型『贗作者』^{フェイカー}を比べると性能が落ちても低コストを！つと言う事で世界は、デユノア社を選んだらしい。

確かに、『贗作者』^{フェイカー}は『ラファール・リヴァイヴ』の五倍のコストがかかる。

俺でも『ラファール・リヴァイヴ』を選ぶよ……

……。

……しかし、『贗作者』の高コストは、世界の目、主に委員会の目を反らす為に、したことだ。

SSSにとって、『全ては嘘』も『贗作者』も実験機に過ぎない。

……本命は、俺専用機。
第三世代型IS『八咫鳥』を隠すための。

プロトタイプ第三世代型を下にノエルさんが搭乗し、データを集め、『八咫鳥』は七割形完成している。

後は、T R A。それに『初期化』『最適化』の三つ……

まあ半年あれば終わるだろう。

……

……

……

o u t 秋奈

S i d e 三人称

「でもチエルシー!？」

「今誘わなくていつ誘うんですか!約束もしたのでしょ?お嬢様。」

「それは口約束ですし、四年も前のはなしですわよ?」

「秋奈様は、紳士です。レディーとの約束は忘れません！」

「確かに秋奈さんは紳士ですが……わかりましたわ！このセシリア・オルコット！勝負に出ますわ！」

セシリアは意気込みながら携帯電話に手をかけた。

Out 三人称

Side 秋奈

「秋奈くん、セシリアちゃんからプライベート連絡きてるよ？」

「ん？わかった。コッチに回してくれ。」

俺は、『八咫鳥』の完成データを横に置き、端末を開いた。

『あ、秋奈さんお久しぶりです。』

「やあセシリア。久しぶり……一週間ぶりかな？」

『ええ……そうですね。』

「セシリアもイギリスの代表候補生になってから忙しかったからね？」

そう……セシリアは、IS適正が高く、両親の遺産を守る為に好条件を出したイギリスの代表候補生になっている。

『そ、それですね！わ、私も来年から日本に、IS学園に通うのですが…』

「セシリア、学校は友達を作る所だ。…楽しんでこいよ？」

『は、はい！…じゃなくて！』

「？……学校はいい所だぞ？」

『……義務教育を無視してます秋奈さんが学校を語りますか？』

「……………」

『…………』

た、確かに学校に一度も通ってないけどわかるもん！

『オッホン！……それで学園に通うにあたって明日から三日間、下見の為に日本に行くのですが…………』

「？」

『わ、私をエスコートしてくれます？』

…………… ああ！

四年前の約束か！

よく覚えていたな

しかし、明日から三日か……

一日目

水着製造企業Swimmingとの今期の新商品についての会議。

二日目

とあるショッピングモールの警備強化についての会議。

三日目

デュノア社抹殺計画についての会議。

ん〜見事に埋まっているな。

……仕方がない。

「セシリア悪いが」「セシリアちゃん？ノエルです。」　　ッ！ノエルさん？」

『…ノエルさん？どうかしまして？』

「秋奈さんは最終日は、お休みですから楽しんでください！」

「ちょっとノエルさん!？」

『まあ！本当ですよ!』

「ええ！最終日は私達が迎えに行きますのでホテルでお待ちください。」

『わかりましたわ！秋奈さん？楽しみにしてますわ』

……勝手に電話をジャックし、会話を終えるノエルさん。

シザース！

何やってるの？彼女！

「ノエルさん何勝手に決めているの？」

「……秋奈くん？」

「ん？なんですノエルさん？」

「レディーのお誘いは断るものでありません！」

「はあ？でも最終日はデュノア社抹殺計画が！」

「確かに三日全ては、お休みにできませんが……」

デュノア社ごとき小物、直ぐに潰せます！」

……あれ？

彼女そんな事言う人だったけ？

「これは、師匠命令です！」

社長に命令する社員……。

てかノエルさん？

貴女は命令するは嫌いでしたよね？

「さあ！三日目の時間を増やす為に頑張りましょう！」

何故か意気込み、俺のスケジュールを詰めるノエルさん。

彼女を止める猛者はいるのだろうか……。

o u t 秋奈

九羽 く来日（前書き）

作者の苦手なラブコメ風……

きついで！

九羽く来日

Side 秋奈

朝の9時……

とある高級ホテルの前……

真っ白なベンツの前で、缶珈琲を飲み……

サンサンと降り注ぐ陽射しを受けている

そう……俺だ。

「……秋奈君？何黄昏れているんだい？」

「磯野く俺仕事終わったの日の出の時だが？」

「私は寝ていません。」

「「はあ」……」「」

ノエルさんの無謀とも言えるスケジュールをクリアし、今お姫様をお待ちしている所だ。

「悪いな磯野？今日は休日なんだから？」

「ノエル女史に『私は大切な仕事がありますので！』」 っと言われ

まして…」

「「はあ」……」

一年目の社員に言い返せない社長と執事長ってなに？

「お、お待たせしましたわ！」

男二人で嘆いていたら、主役のお姫様が登場しました。

「おお、おはようセシ。」

「ど、どうかしまして？」

シザース！

彼女の服装が……

薄蒼色のワンピースに白のボレロを羽織っている。

いかにも清纯派お嬢様って感じだ！

まさに俺好み！

「……どうでしょうか？」

軽く服を摘み、その場で回って見せるセシリア。

ぐはあ！可愛い！

じゃなくて！

「ああ、とても似合っているよ。…見惚れるぐらいだ。」

「え！？」

おっと！本心を隠しきれなかったか！

セシリアの顔が真っ赤だ！

いかん！話を変えなくては！

「……セシリア、今日は色々和日本を見せてやるよ。」

「えッ！あ、はい！」

「ではお手を……マドモアゼル。」

「ええ………お願いしますジェントルマン。」

俺は車のドアを開け、セシリアの手を引いたのであった。

そう、誰かが……

「きゃー！セシリアちゃん可愛いー！」

見守っている？事を知らずに……

車に揺られる事、数時間……

俺達は都会で唯一見れる『日本庭園』に来ていた。

ここは、sssが作った。

……母様の趣味で作った場所だ。

もちろん貸し切り。

そんな中、俺とセシリアは、白砂を踏み締めながら歩いている。

「ここは、俺が疲れた時に良く来る場所なんだ。」

「そうですか？…確かに癒されますね。」

「ああ、都会のコンクリートジャングルに囲まれると気が滅入る。」

会話は少ないが、庭園から聞こえる鳥の鳴き声や水の音で心が安らいだ。

若者同士のデートで、日本庭園ってどうなのよ？

知るか！

俺が来たかったんだよ！

「……………どうかしまして？」

「いや、電波を感じて……………」

「……………電波？」

「いや、気にしないでくれ……………」

一通り、庭園を周り屋敷に入り昼食を取ることになった。

そんな中……………

「どうして、ここを？」

こんな事をセシリアは聞いてきた。

シザース！

若者同士のデートには渋過ぎたか！

……。

「……………」

「？」

「……………ここは、母様が作った場所で俺のお気に入りだとは話したよな？」

「はい。」

「ここは、一般入場も出来るが、ここ（屋敷）に入る事が許されているのは、ごく一部で……………」

俺は立ち上がり、襖を開けた。

「ここからの風景は、俺が認めた者しか見れないんだ。」

開けた襖の先には、先程の庭園が霞むぐらい美しい庭園が広がっていた。

「まあ……………」

「俺はセシリアには、この風景を見て欲しかったんだ。」

「私には……………私だけ特別……………」

ん？

顔を伏せているが、つまらなかつたか？

「……やっぱり気に入らなかつたか？」

「いいえ！そんな事ありませんわ！」

「そか……。よかつた。」

ふう〜よかつた。

つまらないって言われたらショックだもんな。

「雑賀様、お食事の用意が出来ました。」

「わかつた、運んでくれ。」

運ばれてくる料理の数々……

日本に来たのなら和食だよな！

「それじゃあ食べようか！」

「はい！」

「いただきます！」

刺身に少し山葵、醤油を付け口に運んだ。

……うん。

脂がのっついていて、うまい！

うん。

ここを解放するのは嫌だけど別館を解放して、料理を提供すれば利益が上がるか？

等とデートでは考えられない事を考えていると…

「あ、あの！」

セシリアが気まずそうに聞いてきた。

「は、箸が上手く持てなくて……」

「ああ…そうか。」

セシリアは箸が始めてだったな…

俺は立ち上がり、セシリアの後ろに回ると……

「いいか？こう持つんだ。」

母様が俺にやってくれた様にセシリアの手に俺の手を添えて使い方をレクチャーした。

「あ、秋奈さん！」

「どうかしたか？」

「／／／／／」

一通り教え、上手くなった場合に離れ食事を再開したが……

離れ際に「あ……」「ってなによ？

興奮するだろ？

……。

いかな、疲れているのか……。

その後、問題無く食事を終えてその場を後にした。

……しかし、隣の部屋では、

「きゃー！秋奈くんったら大胆！セシリアちゃんも可愛い〜！」

「ノエル女史よ……落ち着いて食事は出来ないのか？」

「磯野さんテンションが低いですよ？」

「はあ〜……」

なんてやり取りが行われているとは知らなかった。

何故かゲツソリした磯野の運転で午後は普通にショッピングを楽しんだ。

やはりセシリアも女の子だ。

生き生きとして、俺に試着した服の感想を求めてくる。

そう言うのは母様で慣れていたから大丈夫だが、磯野？

大丈夫か？

トイレに行く回数がハンパないが？

一方、ストーカーは……

「……ノエル女史、いい加減にしたらどうだ？」

「何を言っているんですか！？セシリアちゃんの色々な服装をカメラに収めるチャンスじゃないですか！」

「……うちの系列だから、見逃して貰っているが……説明しに行く

私の身にもなってくれ……」

「ああ！セシリアちゃん大胆〜！可愛い〜！」

「……聞いてくれ。」

ある程度、買い物をし、何故か先程より顔色が悪い磯野の運転のもと、夕食を取った。

今回は洋食にして、セシリアに負担をかけない様にした俺！グツジヨブ！

……だが

「……ナイフとフォークの使い方を教えてくれませんか？／＼／＼／」

とお願いしてきましたよ。

セシリア？

貴女は俺より上手く使えますよね？

……まあ、昼と同じ様に教えました。

終始、満面の笑みのまま食事が終わり、お別れの時間になってしまった……。

「秋奈さん今日はありがとうございました。」

「いや、俺も楽しかったよ。」

いや本当に、今日はいいい休日だった！

「来年からはIS学園に通いますので、休みの日にはお邪魔しますわね？」

「ああ、セシリアなら歓迎するよ。」

セシリアは、俺がISを使える事も専用機を持っている事も知らない。

親友に嘘を付くのは心が痛いが……

世界が動くまでは俺は動けない……

「そろそろ、時間ですわね……」

「ああ……」

「名残惜しいですが、また会いましょう？秋奈さん。」

「ああ……またな。」

「ええ……さようなら。」

セシリアは手を振りながらゲートを去っていった。

そしてセシリアを乗せた飛行機はイギリスへと帰っていったのだ。

帰りの車の中……

「……学園に通いたくなりましたか？」

「……少しな。」

「もうちよつと素直になれないんですか？」

「世界が動くまではな……」

「……ノエルさん何でいるの？」

「気にしたら負けです!」

「世界が動いたら秋奈君も動くか？」

「……ああ。」

「……私達も準備しませんとね。」

「頼りにしてるよ磯野。」

「……あの〜私は？」

「ノエルさんは罰を受けてから頼りさせてもらっよ。」

「……罰？」

「ふふふ、ノエル女史にはキツイのでわ？」

「………妥協案だ。」

そう、気付いてないとしても？

「まあ〜俺の準備は出来ている。後はsssと世界だな。」

「?………上手くわかりませんが、セシリアちゃんと同じクラスです
といいですね」

夜道をライトが照らす中、俺達三人はsssと帰っていったのだっ
た。

Out 秋奈

Side セシリア

祖国イギリスに帰還する飛行機の中……

今日の事を思い出す……

日本庭園と言う日本特有のガーデンでの事……

秋奈さんが私を特別として見ていてくれる事がわかり……

昼食で触れ合った時に感じたあの……

胸が熱くなる思い……

もう一度確かめたくて夕食に無理を言っただけ……

やはり胸が熱くなった……

そして、別れ際……

秋奈さんと別れると思うと胸が痛くなった……

……。

……。

「……私は、秋奈さんに恋をしていますのね？」

自分に問い掛けると、胸が熱くなり、顔もほてり始めた。

「／／／／／／」

は、恥ずかしい……

私は、小さくなっていく日本を見ながら自分の気持ちに気付いた。

「……秋奈さん、貴方が好きです。」

この想いはいつか……

貴方の前でお話しますか？

見えなくなった日本にいる貴方へ私は問うのでした。

……。

Out セシリア

Side 三人称

年が変わり、三月……

世界は動き始めた……

世界初男でISを動かす事の出来る人物『織斑一夏』の登場によつて……

八咫烏の導きなのか……

世界変動と共に八咫烏の子は動き始めた……

『世界の悪』を潰す為……

仲間を守る為……

愛する人を守る為……

「委員会め！いつ気づきよった！」

「……………落ち着け、碇。社長、手配書はこちらに。」

「秋奈君！委員会と日本政府がIS学園に通え！つと要請が酷いよ！」

「あ、秋奈くん〜！各メディアが取材したいって言って来てるよ！」

「社長！IS学園が入学を許可する代わりに『贋作者』を収納しろ！っだって！」

「う、うるさい！」

……………八咫鳥の子は動くだろう。

そして、世界に広まった。

世界で二番目にESが動かせる男がSSSと云う大企業に
いることが……。

九羽 く来日（後書き）

オマケ

セシリア来日から数日後。

SSSの掲示板には……

辞令

秘書課所属

ノエル・ヴァーミリオン

上記の者をSSS新作ISスーツのモデルとして、抜擢する。

抗議・デモ・エスケープは認めません。

SSS二代目社長

雑賀 秋奈

P.S.

反省しなさい。

……と張り出されていた。

「そ、そんな？」

彼女の叫びは悲しく響くのであった。

く関係図く

セシリア 気になる存在

に変化

十羽 く白と蒼…黒？（前書き）

難産だった。

グダグダだ……

十羽 く白と蒼…黒？

Side 秋奈

「 と言つ訳でよろしいですね？ 轡木学園長。」

「 はい。確かに受け入れました。」

俺と学園長は握手を交わし、扉を閉め、俺の転入手続きの随伴と一緒に来ていたノエルさんと学園長室を後にした。

そして、駐車場に向けて歩き始めたが……

「 ……やっぱり納得いきないうすうす！ 」

……ノエルさんが愚痴り始めた。

「 ……ノエルさん、そう言う事は、学園を出てから言おうよ？」

「 嵌めておいてあの請求ですよ！？ やっぱり納得いきないうす！ 」

……まああれだ。

俺が入学するにあたって色々あったんだよ。

日本政府から

『 IS学園に入学しなかったら、頑張つてSSSを潰すよ？ 』と出

来るモノならやってみる！って感じな脅しを言われたので、IS学園に入学しようとしたら、
『テメエの入学を認めて欲しかったら金とISよこせ！』って理不尽な脅しを喰らったんだわ。

別に二つ共、無視しても良かったが、一種の不安要素は社内全体を揺るがす。

つと言われるから、二つ共受け入れ、交渉した。

そのやり取りに時間が、かかって入学から転入になってしまったんだが……

結局、『^{フエイカー}贋作者』五機をIS学園に贈呈する事で終わった。

「コッチの条件を呑んでくれたからトントンだよ。」

「……そうですね。」

そう、俺がIS学園に入学する条件として日本政府（委員会も）と学園にある条件を吞ませた。

- ・俺の事は学園転入から一週間後の発表にする事
- ・在学中でも仕事ができる環境
- ・それに辺り、部活動の不参加

の三つだ。

最初の一つ以外は、SSSの総合責任者が三年も企業に関わる事が

出来ないのは、sssに不利益を産むつと言つ理由で吞ませた。

んで、最初の一つは……

「でも、これでセシリアちゃんのビックリした顔が見れますね？」

「ああ、楽しみだ。」

セシリアをビックリさせようと仕掛けた事だ。

事前にセシリアと同じクラスにさせる様に前以て言つてあつたんで、自己紹介の時にあんぐりとするセシリアが楽しみだ！

今後の学生生活を楽しみにしながら、校舎を出てアリーナの前を通つた時、地に響くような歓声があがつた。

「……なに？これ。」

その大歓声の全てが女性からつても驚きだ。

「え〜と……一年生がクラス代表を決める為にアリーナの使用許可を申請したつて書いてありますね。」

ノエルさんがIS学園極秘ファイルを見ながら教えてくれた。

極秘ファイル？

情報収集力でsssに並ぶ企業はないですよ？

「誰と誰が戦ってるかわかる？」

「ええ〜と……織斑一夏君と……セシリアちゃんですね。」

ふ〜ん。

世界初男性操縦者

VS

イギリス代表候補生

……か。

……うん。

「ちょっと覗いて見ようか？」

「ちょっと秋奈くん！この後の、予定が！」

「キャンセルで！」

「もう！仕方がないですね〜」

言葉と表情が全く違うぞ？

自分だって見たかった癖に……

俺達は幼なじみの勇姿を拝む為にアリーナへと足を進めたのだった。

Out 秋奈

Side 三人称

開始29分

モニターでは、赤を超えて白い、爆発が白式を包んでいた。

「一夏っ……………！」

モニターを見つめていた少女は、思わず声をあげ…

「ふん。」

黒のスーツを着た、女性は鼻を鳴らし、どこかその顔には安堵の色が見える。

「機体に救われたな、馬鹿者め」

「そうですね。タイミング良すぎだろ……………」

「狙ってますよね？」

「……………！！……………」

社長と秘書は、女性の意見に賛成しながら、残りの三人に驚きの目で見られるのであった。

Out 三人称

「あの〜？ここは、関係者以外立入禁止ですけど……？」

…うわ〜胸デカ！

……いやいや違くて、少しは警戒しようよ？

いきなり現れたんだから。

「……ッ！……山田先生、彼は関係者です。」

「えっ！？どういう意味ですか？」

「ごく一部には、知られていますが、彼が二番目にISを動かせる男です。」

「えっ！ええええええええ！」

いや、そんなに驚かれても……

「で、でも！その人はSSSの重役でIS学園には入学出来ない筈じゃあ？しかも、こんな子供がSSSの重役を！？」

「どうせ政府が脅したのだろう……そうだろ、雑賀社長、そしてヴァーミリオン？」

「脅しと恐喝の二つですけどね？……久しぶりです織斑さん。」

「ああ……」

……あゝそうか！

二人って面識あったよね。モンド・グロツソで！

「それで雑賀、今日は手続きだけと聞いていたが？」

うわあゝお！

後ろで騒いでるデカパイをシカトして、更に世界的大企業の社長を呼び捨てにする！そんな貴女に痺れ、憧れるゝ！

……はい、すみません。
そんなキツイ目で見ないください。

「そのつもりでしたが、幼なじみが戦っている事を知ったので、拝見にと……」

「オルコットか……」

「はい！ってセシリアちゃんが勝ったみたいですね？」

話しをしている最中に、試合は終わっていた。

「……山田先生、織斑は？」

「あ、はい！……えゝと、エネルギー残量が0になった様です。」

うわぁ〜……

貴様のせいで、試合が見れなかったじゃないか！
って睨まれた。

ノエルさんだって腰が引けてるよ……

……うん

モニターを見るに、織斑一夏は、不完全燃焼か……

………うむ。

「織斑さん、お願いが」

俺が燃焼させてやるよ！

o u t 秋奈

Side 三人称

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこの結果か、大馬鹿者。」

実の姉に、窘められる哀れな一夏。

「武器の特性を考えずに使うからだ。」

「……………はい。」

大見得切って負けた一夏には頷くしかなかった。

「次はよく考えて戦え。」

「はい……………次?」

千冬の言葉に疑問を感じる一夏。

「ああ、先程自薦した者がいてな、そいつともやってもらう。」

「オルコットが勝つたのに何で俺なんだ千冬姉?」

「織斑先生と呼べ。……………織斑、対戦者が言うにはオルコットは、クラス代表を辞退するらしい。」

「はあ?」

「だから戦えと……………よかったな織斑、今度は納得いく戦いをしろよ?」

「……わかったけど、なあ篤？対戦者ってどんな奴なんだ？」

「ああ、そいつは「篠ノ之」は、はい。」

「それは言うな。奴の入学条件で一週間は秘密らしい。……まあ明日にはわかるが。」

「秘密ってなんかあるのか？」

「そうだな。……奴はお前と同じ男だっただけ言っておこう。」

「えッ！これってSSSの」

「いいから行け。」

千冬がモニターを指差した瞬間、大歓声が聞こえ

「……………鳥？」

真っ黒なISがピットから出て来たのだ。

「奴が待ってるぞ？」

「ああ、行ってくる」

白式を展開する一夏。

「……………一夏！」

「ん、どうした篤？」

「今度こそ勝つてこい！」

「おう！」

そして、一夏は飛び立っていった。

o u t 三人称

S i d e セシリア

着替えが終わったら、Aピットに来るように言われたので来たのですが……

「……なんで一夏さんはアリーナにむかっているのですか？」

先程私と戦っていた、白い騎士はアリーナへと、また羽ばたいていったのだ。

「……オルコット、クラス代表を辞退するだろ？だから、織斑が自薦した奴と戦いに行っただけだ。」

「ッ！……私は辞退するとは言ってませんでしてよ？」

「なに、お前の事をよく知る奴がオルコットは絶対辞退つと言つてな。」

私の事をよく知っている人？

私は気になり、モニターを確認すると、白い騎士と黒い鳥の様なI
Sが対峙していた。

でも、あの形はまるで……

「……八咫鳥？」

「そうですね。セシリアちゃん」

「えッ！」

最近聞き慣れた声が聞こえ、振り返ると愛しき人の秘書を勤める人
がいた。

「ノエルさん！っていうことは！」

そんなありえませんか！
彼はISが使えない筈！

……でも本当に。

「秋奈さんですか？」

「はい」

私は心の底から歓喜した。

o u t
セシリア

十羽 く白と蒼…黒？（後書き）

セシリアは、一夏を馬鹿にせず、自薦で立候補しました。

……番外か本編で書くかも

十一羽　く銃と刀（前書き）

な、なんだと……

作者は今更原作を読み始めただと!?

な、なんだと……

シャルより先に鈴が先だと!?

十一羽　く銃と刀

Side　一夏

「待たせたな！」

俺は真つ黒なISに見を包み、両手に銃を構えた男に声をかけた。

「なに…急に呼び出したのは俺だ。　気にするな。」

黒いバイザーで、顔が見えないが俺に気遣いの言葉をかける男。

……………IS学園に来て始めて気遣ってもらえたな。

「何をしている？」

「少し目にゴミが入って……………」

「……………強く生きる。」

うん、わかった事がある。アイツは、いい奴だな

「ああ……………それより何故クラス代表に立候補したんだ？」

俺みたいに無責任な流れで流される奴じゃないだろ？

「……………クラス代表には、何の興味はない。」

「へえ？」

「ただ、お前が不完全燃焼だったんで解消させてやるつもりだと思ってな。」

確かにセシリアの時は釈然としなかったな。

「そうか、ありがとうよ！え〜と……」

「秋奈。…雑賀秋奈だ。」

雑賀秋奈？

聞いた事のある名前だな？

確か……

「俺について考えているのだから？ ……この場では不要な事だ。…

…構えな。」

そう言つて、秋奈は銃口を俺に向けた。

「……確かにそうだな！行くぜ秋奈！」

「ああ！来い！」

秋奈の掛け声と共に銃口から火が吹いた。

キューインツ！と耳をつんざく様な独特な音。

セシリアと同じレーザー系の銃か！

セシリアの経験もあつてか、バックステップする事で何とか回避出

来た。

「……今のを回避するか。ちゃんと学習しているんだな！」

「当たり前だ！」

褒めてくれるのは嬉しいが、この弾雨をやめてくれ！

セシリアとは違い二丁ある銃に、苦戦するが何とか距離を置くことが出来た。

今までの戦法は、セシリアと同じ中距離射撃型。

なら接近戦は疎い筈！

俺は一瞬にして加速し、まだ銃を手に持つ秋奈に雪片を振り下げたが……

ガキイーン！

「……考えが甘いぞ？」

両手に持った銃をクロスして雪片を止めやがった！

そして……

「行くぞ？フエオ！」

クロスを解く様にして、雪平を弾き……

「ウル！」

弾かれた事によって空いた俺の腹に蹴りを入れ…

「ソーン！」

流れる様にシヨルダータツクルをかまし…

「アンスール！」

俺の腹に銃口構え…

「式式・ブルームトリガー！」

蒼い光と共に強い衝撃が俺を襲った。

Out 一夏

Side ノエル

うん！ちゃんと流れにのれてる

「あれはTRATT！……ヴァーミリオンお前が教えたのか？」

織斑さんはすぐわかつちやうか……

「そうだよ？私以外に教える人はいないでしょ？」

「そうだったな……」

「織斑先生少しいいですか？」

「何だ山田先生？」

「TRAってなんですか？」

私の事知らないんだ。

取材とか逃げてたから仕方がないか……

「ああ…そこにいる秘書が世界大会で使っていた武術だ。」

「ノエルさん代表だったのですか!？」

セシリアちゃんも知らないか……

「そうだよ？スイス代表で世界大会射撃部門の『ヴルキリー』だよ

」

「『ええええええ!』」

「織斑先生が優勝したんでは？」

「篠ノ之、私は総合優勝と格闘部門では優勝したが、射撃部門では優勝していない。」

「それじゃノエルさんは第一回目が出た『ヴルキリー』でして？」

「ああ、そうだ。」

第一回は、織斑さんがほとんど持っていつちやったからね？

世界初『ヴルキリー』は私って事が……

そう考えると凄いね。

「じゃ、じゃあー！」

「山田先生落ち着いてください。」

「……はい。今戦っている二人は、初代ブリュンヒルデと初代ヴルキリーの再来と言ってもいいんですよね!？」

「織斑は、私の足元には及ばないが……」

「『雪片』と『ベルヴェルク』だけを見るとそう言ってもいいですね。」

私の発言にモニターに再度集中する三人。

確かに貴重な一戦だよな。

そんな中、織斑さんは、私だけに聞こえるように話しかけてきた。

「……………ノエル、実際に雑賀はどのくらいまでお前に近付いている?」

ノエルって事はプライベートか……………

「……私最近では秋奈くんに負け越しですよ？千冬さん。」

「……一夏には、まだ無理か。」

「『まだ』……ですか？」

「ああ……アイツは私の弟だからな。」

……。

「……………ソウデスネ。」

千冬さん変わらずブラコンなんだな……

Out ノエル

Side 一夏

バリアー貫通、ダメージ125。

シールドエネルギー残量、395。

実体ダメージ、レベル中。

白式のオートガードで、何とかもったが、思ったよりダメージが大
きい！

しかも距離を空けられてしまった！

「……接近戦出来るじゃね〜か。」

「出来ないとは言ってない。」

「普通は、射撃が得意な奴は接近戦は苦手な筈だけど？」

ゲームとかでは、よくある設定だしな。

「なら、俺は普通じゃないって事で……」

「……そうかよ。」

チートかッ！

「考え事はいいが、この距離は俺の得意分野だ。」

「ッー！」

秋奈の持つ銃が、粒子化し新たに先程の銃より三倍程デカイ銃が両手に形成された。

「……レントン84。このモデルはレミントンと呼ばれる実際にある銃だ。」

レミントンって言えば！

「……第二ラウンドだ！」

二つある銃口から、激しい両手の散弾が飛び出してきた。

回避する事は難しく、シールドエネルギーがどんどん減っていく！

……でもレミントンって確かポンプアクション式な筈！

両手に持っているんだ！

装填に時間がかかる！

読み通り、散弾の雨が止んだ。

今だッ！

「このラウンドは貰った！」

加速し、秋奈に接近する。

「だから甘いと言っている！」

「なにッ！」

秋奈は、両手に持ったレントン84を回転させ、弾を装填しやがった！

ドコゾのターミネーターだよ！

そして、再度降り懸かる弾雨の嵐。

距離が空いているからダメージが少ないが、それを補う量の攻撃だ！

攻撃を受けつづけ、エネルギー残量が100を切ってしまった。

……ここは、一か八かにかける！

零落白夜を発動し再度、急加速。

秋奈は、最初に使っていた銃で対応するだろう。

だから俺は、『雪片』を…

千冬姉が使っていた最強の剣を信じて……

全力で切り掛かるのみ！

行くぜ！

『雪片』にエネルギーが宿り、零落白夜が発動する。

「ッ！……あれは。」

白式の単一仕様能力が発動したのに対し秋奈は、銃を粒子化させ、武器を呼び出している。

ここまででは、読み通り！

俺は、三回目の接近戦を秋奈に仕掛けた！

「ハアアアア！！！！」

俺の接近より、秋奈の武器が形になる方が早いが無関係！

「……………そいつを喰らう訳にはいかないな！」

俺の間合いに入る直前、武器を俺目掛けて投げだしてきた！

「ッ！！」

銃じゃない！

秋奈が呼び出したのは、二つのブーメランだった。

一つを回避し、もう一つを叩き落とそうとしたが、『雪片』に触れた瞬間ブーメランが二つに割れ、ワイヤーみたいなのが俺を拘束した！

グルグルと周り俺は身動きが出来ない状態に……………

「何だこれ！かてえ！」

「……………对IS用の特殊ワイヤーだ。お前はもう逃げられない。」

秋奈の声が聞こえ、奴を見ると……………

機械じみた翼が光輝いていた。

「……光翼砲、充電完了。放熱システムオールグリーン。……チエツクメイトだ。」

……ここまでか。

負けちまうが、思っいきりやれたぜ。

ありがとうな！秋奈。

「……おう。こい！」

「光翼砲発射！」

そして黄色の閃光が俺に直撃した。

シールドエネルギー残量 0

Out 一夏

Side 秋奈

織斑との一戦を終えて、ピットに戻ってきたのはいいが……

「どづいつ事が説明してくださいませよね？」

「秋奈くんファイト！」

セシリアが鬼の面 「鬼ですって！」 ……………

…………… セシリアが可憐な笑顔で出迎えてくれた。

「…………… ノエルさんから聞いてないのか？」

「こう言う大切な事は本人から聞くものですわよ？」

「秋奈くんファイト」

確かに、大切な事は本人から聞くべきだな。

しかし…ノエルさん楽しんでない？この状況。

減給にするぞ？

「…………… 政府からの通達があったからここにいる。」

「それは、存じています。私が聞きたいのは違います！……………秋奈さん、sssでしたら政府からの通達なんか無視出来るでしょ？」

流石俺の幼なじみ…

嘘は言えないか……………

「…………… 半分は合っているが、もう半分は織斑一夏かな？」

「……一夏さん？」

「ああ…世界初ISを使える男に群がる虫（企業）の中に俺が探している虫が来るかもしれないからな。」

「……一夏さんは、餌……ですか？」

「言い方は悪いが……その通りだ。」

「……その考えは一夏さん達に嫌われますわよ？」

「ああ……」

例え皆から嫌われても、必ず『亡国』だけは、俺が潰す……。

そのためなんだ……

「……でも」

「？」

「私は、秋奈さんの味方ですわ。」

そう言ってセシリアは、微笑んでくれた。

「……………」

「……………」

「秋奈くん？ファイト〜？」

ははは……

「ははははははー！」

「な、なんですのいきなりー！」

「いやなに、ありがとうセシリア。……少し気が楽になったよ。」

「そ、そうでしたの。お役に立ててよかったですわ。」

「ああ……」

皆が離れてもセシリアは、俺の仲間か……

俺は、セシリアと友達に慣れてよかったよ。

本当に……。

「あッ！まだありましたよ？あのISについて」

「秋奈くんファイト〜」

「ああ……とりあえずピットから出よう。」

セシリアから質問攻めにされながらもこの場を後にしたのだ。

十一羽　く銃と刀（後書き）

く関係図く

セシリア　　気になる人？

に変化。

くその後く

ノエルさんの減給はリアルに実施された。

三日間減給

微妙く罰

十二羽　く新生活（前書き）

編集しました。

すみません。

十二羽 新生活

Side 秋奈

「クラス代表は織斑一夏。異存はないな。」

「……はい」「」

俺とセシリアが辞退した事によって自動的に一夏がクラス代表になったが、一夏よ……

態度に不満が出ているぞ？

約一名を除き、クラス全員が一丸となった瞬間だった。

……。
休み時間

机で伏せている一夏のもとに、慰めの言葉をかける為に俺とセシリアは向かった。

「はぁ……」

「諦めてクラス代表をまっとうしな、一夏。」

「そうですねよ一夏さん、私が認めたのですから、頑張ってもらい

ませんと……」

「でもよ……俺は秋奈にもセシリアにも負けてるんだぜ？なんかよ……」

確かに一夏は、負けたが驚きべき成長スピードだ。

セシリアと同じ様な戦法で攻めたが、起動時間数時間の奴の動きではなかった……

実戦は何よりの糧となる、か……

俺と違い後ろ盾がない一夏には強くなってもらわなくては……

「そう腐るな、お前にはIS操縦の才能がある。……経験を積んで強くなるんだ。」

「つよくなるつか……」

「ああ……家族を……姉の名を守るんだろ？」

「ッ！聞いてたのかよ……」

「……そうだな！俺は強くなるぞ！」

「それでこそ私と秋奈さんが認めただけの事がありますわ」

一夏の調子が戻ったようだな……

「……所で秋奈とセシリアって仲がいいよな？知り合いだったのか？」

知り合い、ね……

「六年前からだから……幼なじみ、かな？」

「そう、ですわね……」

世間一般から見ると『幼なじみ』なんだろうが……

なんか釈然としないな……

セシリアも納得していないみたいだし……

「幼なじみなら俺にもいるぜ！ 箒！ ちょっと来いよ！」

……俺らの雰囲気を読めないのか？

すげ〜なコイツ……

「大声で呼ぶな一夏！」

「秋奈、コイツが俺の幼なじみの篠ノ之箒だ！」

「自己紹介くらい私にやらせる！」

……篠ノ之とやら一夏のペースに乗せられているぞ？
ん？ 篠ノ之？

「……篠ノ之さんってもしかして……」

「ッ！ あ、あの人は関係 「剣道全国大会優勝者でしょ？」 ……

へ？」

「強さの中に芯の通った決意を感じたから覚えていたよ。」

「そ、そうか……」

「ああ……sssにスカウトしようとしたが、学園に入学したから手出しが出来なくなってな……」

「俺も優勝したのは知ってたけど、秋奈がそこまで言うのなら見てみたかったな……」

「一見の価値はあるぞ。そこまで篠ノ之さ」「箒でいいぞ！私も秋奈と呼ぶ。」「ああ……わかった。」「

その後、休み時間が終わるまで箒の試合について話し合っていた。

……………でも

「……………秋奈さん、随分と箒さんに熱心なんですかね？」

「ああ……逃がした魚はデカかったって感じた。」「

「そうですね……………」

……釣れている魚がいると言っのに。」

「どうしたセシリア？」

「なんでもありませんわ！」

セシリアが不機嫌になってしまった。

何故!?

……
放課後

「便所が職員用のしかないから気の付けろよ？」

「そうか」

「ああ……それと」

久しぶりに男と話せた一夏に乘せられて結構な時間まで話し込んでしまった。

まあ……仕方がない。

一ヶ月とは言え、一人だけ男だったんだからな……

俺だったら耐えられないかな？

「だからな。って聞いているか秋奈？」

「うん？あぁ…聞いているよ。」

聞いてなかったけどな。

「ならいいけど。それでな、このあと「雑賀君いますか？」
ん？山田先生？」

呼ばれて顔を向けると、副担任の山田先生が書類を片手に立っていた。

「どうかしましたか？」

「えつとですね、雑賀君の部屋が決まったので教えにきました。」

「え？秋奈は俺と同じ部屋じゃないんですか？」

「政府が色々と煩いんだ。今だけだから我慢しろ織斑。」

開けられたドアに体を預けながら織斑先生が教えてくれた。

確かにsss社長と世界初男性操縦者が一緒になると何かしら俺がアクションをかけると思っっているんだろうな。

「……そういう訳だ。わかったな雑賀？」

「わかりました。」

「……どういう訳だよ？」

「……一夏は知らなくていい事だ。」

そう、一夏にはまだ早いからな……

「それで、俺の部屋は？」

「はい、そのうち許可も下りると思うんで1024室、織斑君の隣にしました。」

「わかりました。」

「少しばかりの我慢だ織斑。」

「わかったよ、ちふゆね……織斑先生。」

「ふ〜…では私達は会議があるから失礼するぞ。」

たぶん俺の部屋割の件だな……

織斑先生と山田先生には苦勞をかけているなっと思いつながらも教室から出ていく二人を見送った。

「さて、俺は部屋を見に行くが一夏？お前は？」

「俺も帰るよ。あっ！後で飯誘いにいくからな？」

「ああ…待ってるよ。」

そして俺達も教室を出て部屋に向かったのだ。

……

……

部屋の前で一夏と別れ、いざ自分の部屋へと入ってみると……

「安っぽいビジネスホテルかよ……」

……一様、羽毛布団らしいが質が悪いな。

しかも枕が一つ、か…

とりあえず荷物を部屋の片隅に置き、携帯を取り出した。

『pppppp… どうしたんだい秋奈?』

「ああ…磯野、用意してもらいたい物がある。」

我社の執事長磯野にかけた。

「俺がいつも使っている布団に枕を3個……」

『羽毛のSランクに枕が3個……』

枕ってそんなに使うかい？」

「使つせ……」

頭に一つ、抱くのにも一つ、足に挟むのにも一つ。

俺は枕に囲まれたい！

「それとPCを一台欲しいな、ノートだけじゃ物足りない。」

『わかったよ……他に何かいるかい？』

「特にない」「ティーセット一式ですわ！」……ティーセットで。

『了解、明日までには届けるよ。』

「助かる、また連絡する。」

とりあえず欲している物を磯野に伝え、我が部屋に来た侵入者を迎える。

「……セシリア、せめてノックぐらいしろ？」

「細かい事は気にしなくてよ？」

気にするって……

「……誰から聞いた？」

「一夏さんですわ。」

殿方同士だと思って伺ったのですが、違ったみたいでしたので……」

「一夏も一人か？」

「いいえ、篠ノ之さんと一緒ですわ。」

「……筈と？」

男女別じゃないのかよ。

どうなってんだ、この学園？

「思春期真っ盛りの男女を一緒にするか？普通……」

「本当ですわ……」

……私ですって秋奈さんと一緒がいいですわよ。」

「なんか言っただかセシリア？」

「なんでもありませんわ。」

顔を赤くしながら、返事を返すセシリア。

昼といい、今といい、コロコロと表情が変わるな…

しかし、幼なじみと言う理由で同じ部屋と考えると俺の場合、セシリアか……

……

……

……

いかん！俺の理性がもたん！

セシリアとの同棲を想像してしまい自分の顔に血が昇っていくのがわかる。

「……どうかしまして？」

俺の変化に気付いたのか、下から見上げてくるセシリア。

いかん！り、理性が！

俺の理性が本能と言う荒波に吞まれそうになった瞬間……

「セシ 「秋奈」 飯食いに行こうぜ」 ……。」

救世主（唐変木）から鶴の一声が！

荒波が一気に引いていく。

「……セシリア、夕飯を食べに行こう。」

「え、ええ……」

……一夏さんの馬鹿。」

俺は、本能に打ち勝ち夕飯をいただいたのだった。

しかし……

食事中ずっとセシリアは、一夏を睨んでいた。

一夏には悪いがセシリアの色々な顔が見れて少し嬉しかった雑賀秋奈でした。

「……なあ、秋奈？俺セシリアに何かしたか？」

「……さうな。」

「何かって何をした一夏！」

「それがわからないって言うんだよ！竹刀を向けるな！」

「……うん。」

平和だ。

4月下旬、遅咲きの桜の花がちょうど全てなくなった頃……

「よし、飛べ」

……織斑先生の授業を受けている。

IS基本的飛行操縦を実戦する為に指名され、一夏、セシリア、俺はISを起動させ飛び立った。

俺が1番速く目標地点に到着しセシリア、一夏の順で到着した。

『何をやっている。スペック上の出力は八咫鳥には劣るが、ブルーティアーズよりは上だぞ』

八咫鳥は高速戦闘をコンセプトに作られているからな……

出力では他の機体には負けられませんよ。

……その他は、白式にまけるけどな。

「ええと……急上昇は確か『前方に角錐を展開するイメージ』……」

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的ですよ。」

「そう言われてもな……だいたいどうやって浮いてるんだ　これ？」

「……反重力力翼と流動波干渉の話になるぞ？」

「うっ……いや……いい説明はいい……」

「だろうな……」

一夏にはっと言うか高校生にする話ではないな……

「そう……残念ですわ。」

「セシリア、その話を理解出来るのは代表候補生だけだ。」

「そうですもの？ 秋奈さんは理解しているようですが？」

「セシリア… 俺と秋奈を一緒にするなよ。」

……失礼だな。

人を人外みたいに言い寄って！

俺だって最初から理解出来た訳ではないぞ？

ノエルさんの指導のもと、技術方面も教えられたからな！

……勉強中には甘い物！って言われて出されたクッキーには死にかけてけどな！

物体Xと呼べたな、あれは！

噛むとグニグニするんだよ！

断じてクッキーではなかったな……

ギュイイイイイ……

……ズドオアン！！

闇歴史を振り返っている中、一夏が自爆した。

「……何やっているんだあいつ？」

と言っかどんだけ考え込んでいたんだ 俺？

俺の短所が発見した事と一夏が自爆した事以外は順調に授業は進んだのであった。

……

……

「というわけでっ！織斑君クラス代表決定おめでとう！！！」

……………どう言う訳だよ。

いきなり拉致されたと思ったら就任パーティーかよ！
何なんだ！このクラス！

「……………磯野からの報告書読まなきゃならないんだけどな。」

「たまには休息も必要ですわよ？秋奈さん。」

俺の隣にナチュラルにいるセシリアに諭されながらもジュースを飲む。

「俺には騒ぐ理由が欲しいだけにしか感じられないがな……………」

「……………一理ありますわね。」

全く、織斑先生も大変だよな。

このクラスの担任で…

「あっ！いたいた〜 セシリアちゃんに雑賀く〜ん」

セシリアと話している中、メガネをかけた女がやって来た。

「代表候補生と社長さんのインタビュー件コメントが欲しいから協力してね？」

「これ名刺！よろしくね〜！」

名刺を受け取り、見てみる。

新聞部 副部長 黛薫子

ふ〜ん 新聞部ね〜

「まずセシリアちゃんから！……ズバリ織斑君にクラス代表を譲った理由は！？」

「わ…私ですか？」

直球だな〜

まあ〜グダグダするよりマシか……

「こう言うことはあまり好きではありませんが仕方ないですわね…
…まず、どうして私がクラス代表を辞退したのかというと…「ああ、
長くなりそうだからいいや」 ツ！聞いていてそれですか！？」

「織斑君に惚れたからって捏造するから」

「断じてありえませんか！！！！」

おい……その記者……

捏造するなよ……

っーかセシリア。

そんなに断固否定すると一夏が傷つくぞ？

「おゝ怖い怖い ……えゝと、次に社長さんいいかな？」

「……どうぞ。」

「ありがとうゝ……ズバリ織斑君に戦いを挑んだ理由は！？」

「俺の中にある闘争心に火が宿ったからだ。」

「わぁお 読者向けのコメントありがとう」

……捏造されたら困るからな。

「次に、今後のSSSの方針は？」

「？……企業の拡大とIS部門の積極的進出。」

「ふむふむ……SSSは、世界各国と同様に第三世代を作ると？」

……。

「……俺のISは、SSS製造の第三世代型だ。」

「なるほど。SSSは、第三世代の製造に成功している。……第三世代の製造は、日本政府からの要請で？」

「……これは？」

「企業秘密だ、つとて言うか生徒の俺じゃなく、社長の俺に対する質問だな？」

「いや。大企業の社長さんにインタビュー出来る機会なんて滅多に無いもんだから……つい。」

「はあ……」

この後も、根掘り葉掘り聞かれたが、SSSに対する質問は企業秘密にして答えなかったがな。

最後に写真を撮ると言われた時、何故かセシリアが俺とのツーショットを希望していた。

俺も欲しいから撮ってくれ！って言ったらセシリアが顔を赤くした。

「……なぜ？」

「どつやらオルコットは、敵では無いらしいな。」

「セシリアで構いません。私も尊さんと呼びますわ。」

「ああ、わかったよセシリア。……お互い頑張ろう。」

「ええ、頑張りましょう。」

就任パーティー中に、不思議なタックが結成されていたのは、一夏だけが知らない。

十二羽（新生活（後書き））

関係図

セシリア 篇

中立だが支援

篇 セシリア

支援。

十三羽 (25d) (前書き)

漫画を参照

十三羽 2nd

Side 秋奈

「……………いきなりだな。」

『そうだね。中国政府も焦ってたみたいだし……』

磯野からの定時報告を受けている中、気になる情報を耳にした。

中国代表候補生のIS学園への転校が決まっていたらしい。

「目的は、一夏か俺か…SSSか…まだわからないな。」

『目的は、わかっているよ。』

「……………仕事が速くて助かる。」

『目的は、一樣、織斑君だね。』

「……………一樣？」

『中国政府からIS学園への転校要請が織斑君が公表されてから出ている。更に秋奈君が公表されてから更に強く出ている。』

「なるほど…最初は興味本位、次に政府関連を絡ます為……か。」

『そうだと思うけど…気になる事があってね？』

「気になる事？」

『軍のお偉いさんが、代表候補生に脅されたって……』

「……………はあ？」

おいおい！軍人脅す高校生って何だよ！

ちよ～やべ～！

『とりあえず今わかるのはそれぐらいかな？

明日から学園に通うらしいから聞いてみたらどうだい？』

「……………了解、アクションをかけてみるわ。」

『「健闘を……………それじゃまた。」』

「あぁ……………」

磯野からの電話を切り、ベランダへと出る。

季節は春だが、風がまだ冷たい。

「はぁ～……………山男みたいな女だったら嫌だな～。」

今の時期に転校……………

中国政府……………

世界初男性操縦者……………

SSS……

今回の事には、『亡国』は関わっていないようだな。

「はあ〜… そんなに速く尻尾を出さないか……」

学園生活は、まだ一ヶ月しか経っていないんだ。

焦りすぎだな……

俺の心境を現す様に、冷風が骨身に突き刺さる。

「うゝ寒い!… 戻る」「何しやがる!?!」…。

「そ、それはこちらの台詞だ!」

はあ〜……

……どうやら隣は絶賛痴話喧嘩中らしいな。

近隣に迷惑かけるなよ…

「… 案外、一夏の知り合いだったりしてな。」

冗談もさせておき、俺は部屋に戻っていった。

そして翌日……

「鈴……？お前、鈴か？」

どうやら俺の冗談は実現してしまった様だ。

一夏の関係者には、普通な人はいないのか？と激しく思いながらも、その場を織斑先生が鎮圧していた。

そして食堂……

「待ってたわよ、一夏！」

俺達の前に立ち塞がった噂の転校生。

どうでもいいが……

ラーメン伸びるぞ？

見ただけでも、あからさまに麺がふにゃけてる。

おばちゃんから食事をいただき、テーブルへと席ついた。

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？おばさんは元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。アンタこそ、なにIS使ってるのよ。ニユースで見た時びっくりしたじゃない。」

随分ひたしく話すな…

つか、一夏よく質問するな。

はあ…

黙ってたって仕方ない…

「……一夏、そいつとはどういう関係だ？」

「そつだ！一夏そいつと、つ、付き合っているのか!?!」

疎外感を感じてか、筈はやけに突っ掛かるな。

後どうでもいいが、俺最近ため息増えてるような…

「べ、べべ、別に私は付き合ってる訳じゃ……」

「そつだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼なじみだよ。」

「……………」

睨まれてるぞ一夏？

「まあ！一夏さんには、もう一人幼なじみがいらして？」

「……………もう一人？」

「ああ、こつちの筈。ほら、前に話したろ？小学校からの幼なじみで、俺の通ってた剣術道場の娘。」

「ふうん、そうなんだ。……………てか、その二人は誰よ？一人は、男だし……」

「わ、私達を知らない！？ありえせんわ！」

「うん。あたし他の国とか興味ないし。」

……………おい、中国人。

俺はともかく、他国の代表候補生ぐらい把握しとけよ。

「私は、イギリス代表候補生、セシリア・オルコットですわ！」

「……………雑賀秋奈だ。」

「雑賀秋奈？どつかで聞いた事があるような……………」

「秋奈さんは、SSSの社長でしてよ？」

「鈴、そのぐらいは、俺でも知ってるぞ？」

はい、ダウト。

俺が言うまでわからなかった癖に……………

「し、知ってるわよ！確か、六歳の頃から仕事をして、十歳の時ぐらいに社長になって、SSSを更に大企業に昇り上がらせたって資料に書いてあった気がするわ。……………なん
でそんな人が、ここにいるのよ。」

……俺も知りたいよ。

てか、資料か……

中国政府は、俺の事も気にかけてたか。

……そして、何故セシリアは、誇らしげにしている!?

まるで、自分が褒められてる様だな。

……まあ、セシリアの違う一面が見れたから、気にしないけどな。

その後も、一夏を特訓させるのは私だ! って感じに話しが進み、
箒と凰の間に火花が走っていた、と言っておこつ。

俺?

俺は、傍観しセシリアの嬉しそうな顔を眺めながら飯食ってたよ。

……… ストーカーじゃないぞ?

時は流れ夕方

俺、雑賀秋奈は、幼なじみ？のセシリアとティータイム中である…

……

「しかし、一夏の訓練を第一人に任せてよかったのか？」

「ライバルも出現しましたし、箒さんに機会を差し上げませんとダメですからね。」

「二人つきりにしたって、あの唐変木には意味ないぞ？」

「……………確かに。」

クラス代表戦後、俺達は一夏の訓練を見ている。

専門的な事をセシリア、

模擬戦相手を俺、

剣術については、箒

と各自、一夏の為を思って訓練している訳だ。

「箒も素直じゃないからな。奴らを」「ふざけるな！何故私がそのような事をしなくてはならない！」……………この寮って壁薄いやな？」

「……………また一夏さん絡みの厄介事ですか。……………少し様子を見て来ますわね？」

「…………紅茶入れ直しとくよ。後、厄介事をこっちまで持ってくるなよ?。」

「わかりましたわ。」

そう言い残しセシリアは、一夏の部屋へと向かっていった。

…………とりあえず疲れて戻ってくるだろうセシリアの為にポットに水を入れ、お湯を沸かす。

壁の薄い為、隣からは、セシリア参入により更に喧しくなっていく声が聞こえる。

「はあ…………近隣の迷惑を…………pppppp…………pppppp…………。」

…………電話だ。

しかも、この番号は…………

電話に集中出来る様にベランダへと出る。

「……………………こちらs。」

『こちらvです。定時報告です。』

「了解、首尾は?。」

『うまく潜入出来ました!……………と言つか初日からお尻触られました。』

『

「労災は出しとく。……何か掴めたか？」

『真つ黒ですよ？そのうち、動きだしますね。デユ』

「Vッ！……盗聴の可能性を考えコードネームで言え！」

『す、すみません！秋奈くん！』

言った側から、この人は……

「……もういいから、報告を。」

『え〜と、デユ……狸は、そろそろ大きく化けます。それは、巣が崩れるぐらいに……』

「了解、ならソコを狙い鳥は、狸を狩る。」

『わかりました。……後、私的なんです……』

「何だ？」

『狸の息子が、動きますが、この子って犬の子なんですよ。……な
んとかありません？』

……ふむ。

俺達の目的は、狸狩りであって犬ではない。

「わかった、考えてみるが、親が狸だ。……犬でも狸になっていた
ら遠慮なく潰す。」

『……了解です。引き続き探りを入れます。』

「……………悟られるなよ。」

『大丈夫です、ではまた……………』

「ああ、頑張れ。」

春先だと言うのに、冷たい風が……………このくだりは、二回目か。

とりあえず部屋へと戻り、白い湯気を上げるポットの火を止めた。

「……………確実に前へと進めている。八咫鳥の加護を裏切った者を狩る為に……………」

……………いかな。
暗くなり過ぎた。

セシリアが戻る前にもとに戻しとかないとな。

顔を軽く摘み、ストレッチさせ、ほぐしていく。

うん、いい感じにほぐれ

「……………秋奈さん何しているのですか?」

ッ！見られた！

「いや！セシリアこれには、訳が………お前こそ何連れて来てるんだよ？」

「いえ、つい………」

セシリアの後ろには目を赤くした噂の転校生……

中国代表候補生 凰 鈴音が立ち尽くしていた。

「とりあえず、紅茶飲むか？」

「……………うん。」

……………全く。

怨むぞ？一夏。

o u t 秋奈

十三羽 ｼ 2nd (後書き)

クダグダだ

profile (前書き)

プロフィールだよ？

profile

名前：雑賀 秋奈

(サイガ アキナ)

身体：176cm 60kg

細筋肉質

白髪 赤眼

肩にかかる程度の髪

モデルは、渚力〇ル

性格：冷静だが内は熱い

好物：お茶会・和風

嫌物：敵対企業

経歴：

雑賀総合産業（以後SSS）の社長、サイガ雑賀 ナキ奈祈と秋山 アキヤマ百枝の間
に産まれる。

幼い頃から世界を渡り歩く生活をしていた為、セシリアとは知り合
い？の関係。

10歳の時に、テロにあい、両親が他界。本人も意識不明になるが
一年後目を覚ます。

その後、SSSの社長に就任。SSSの復興に力を入れ立ち直した。

また、s s sのIS部門進出に伴い自ら技術者としてISスーツを開発。

その後、s s sのISスーツは世界的高級品に……

テロの際、男だがISが使用出来る事が判明。

政府は、身体調査と言う名の実験を行いたいと思っていたが、相手は日本経済を握っていると言っても過言ではないので、IS学園の入学を進める。

その後、入学し、原作突入。

他項目：

・s s sのSymbol markは八咫鳥。

・制服の背には黒で八咫鳥が彫られている。

・眼鏡装備。

・執事の名は磯野ww

・護身術としてTRAAチエーンリボルバーアクションや、銃器の扱いをノエルから習う。

機体：八咫烏^{やたがらす}

詳細：

テロの際、発見された『全ては嘘』のコアを元にSSSが秋奈専用機として開発した第三世代IS。

機械的な黒い翼、黒いバイザー、二刀一対（二銃一対）の武器が特徴。

高速戦闘を考え、ブースター、スラスタを多く搭載。燃費は甲龍>八咫>蒼い雫。

武装：

1（：ベルヴェルク

主武器の双銃。ノエルの愛銃の後継機。

TRAに必要な武器。

近々中距離で使用。

カートリッジによつては実弾・ビーム弾と変更可。

モデルは、ない人の銃。

2（：レントン84

実弾式ポンプアクション型の双散弾銃。近距離では威力が強すぎる為、中距離で主に使用。

一弾で5発撃てる特殊な弾を使っている。

モデルは、レミントン

3（：鳥巻

対IS用特殊ワイヤー内蔵式ブーメラン。

攻撃力は低いですが、相手を絡め取る為に開発、搭載された武装。

4（：光翼砲

攻撃力が低い『八咫鳥』の決め手として開発。

プラズマ砲である。

プラズマの性質上、物体に触れると急速にそのエネルギーを周囲に与えてプラズマ状態で無くなってしまふ為、兵器としては実現しないと言われていたが、八咫鳥のコアと何故かリンクしエネルギーを発散させずに射程100メートルの兵器になった。

また性質上、極めて多くの熱エネルギーを持っている為、機体に異常な高熱が発生してしまう。

対策として翼部に放熱システムを搭載。

放熱時に翼が光輝くので、名前の由来になった。

モデルは、GXとEVAF型

十四羽 く禁忌(前書き)

前半 〓 原作通り

後半 〓 オリジナル

オリジナルテイーがほしい……

十四羽 く 禁忌

Side 秋奈

「 って感じだったのよ! 」

「 まあ! 一夏さんったら乙女心をわかっていませんわね。 」

「 そうなのよ! 全く一夏は、昔から唐変木なんだから! 」

「 ……紅茶のおかわりいるか? 」

「 「いただきますわ! / いるわ! 」 「 」

Way? 神よ……

なぜこうなった?

セシリアが鈴を連れてきたのは、百歩譲って良しとして、なぜ鈴の愚痴を一時間も聞かなければならない!

その間、俺はお茶くみだよ!

「 ……興奮も治められる様にハーブティーにしたから、そろそろお開きにしろ。消灯時間も近い、織斑先生に注意されるのはキツイだろ? 」

「 そうね、そうするわ。 」

礼儀や作法を無視し、ズズズッと飲む鈴。

一度注意したんだが、彼女いわく『女々しいからイヤ』っだそうだ。
この時に、呼び名についても言われたな。

「しかし、秋奈って気配りや気遣いが上手いわね？……一夏に爪の垢でも飲ませてやりたいわよ。」

「長年企業のトップをしているんだ、そのぐらい出来なければ社員達は付いて来てくれないよ。」

「……セシリアもそうなの？」

「社交界のマナーと言えばいいでしょうか？……一夏さんも経験を積みば出来る様になりますわよ。」

「どうだか……あいつには、無縁の話しよ。」

確かに、一夏には難しいとは思うが、レディーの扱い方は覚えるだろう。

「……結局、どうするんだ？一夏が、その約束を正しく思い出すまで許さないのか？」

「思い出すだけじゃダメ！謝るまで許さないんだから！」

「そこまで怒るって、そんなに大切な約束なのか？」

「うっ！そ、それは……」

「秋奈さん？人の大切な約束を無理に聞くのはNGですよ？」

「それもそうか……」「待つて！」……どうした？」

「秋奈達は、私の愚痴に付き合ってくれたし言うわ！……」
「私が料理出来る様になったら毎日酢豚をつくってあげる」って約束したのよ。」

これは……

「『みそ汁を作る』中華版、か……」

「乙女の一世一代の告白を忘れるなんて……」

これは、一夏に代弁の価値はないな……

「……だから謝るまで許してあげない！許すもんか！」

……一夏だと期待出来ないなあ

これは……

「……長い戦いになるとは思うが頑張れ。」

「私達も応援してますわ！」

俺は、こっち側なのね。

まあ、今回は、一夏が悪いし仕方ないか……

「ありがとう二人共！」

その後も軽く話した後、お開きになった。

はあ、一夏よ……

なんで、こんな大切な事忘れるかな……

しかし、鈴の思いは叶わず数日が経ってしまったのだ。

Out 秋奈

Side 一夏

鈴の件から数日が経った。

あれからずっと鈴には避けられてるし、こっちは怒ってる理由すらわからない。

秋奈とセシリアは、何か知っているみたいだけど、『自分で気づけ！』の一点張り。

どうしろって言うんだ……

「こら！聞いているか 一夏！」

「明日からアリーナが使えないって言うのに随分余裕だな 一夏？」

「代表候補生を舐めない方がよろしくてよ？ 一夏さん。」

「……………ああ、わかってる。」

いつものメンツの筈、秋奈、セシリアにせかされるが、鈴の事が気になる。

「……………なあ秋奈？ 鈴が怒っている理由を教えてくださいませんか？」

「こればかりは、無理だ。」

「一夏さんが悪いですわよ？」

「はあ……………」

やっぱりダメか……………

「一夏！今は対抗戦に集中するんだ！」

……………約束が違うのか？

「聞いているのか一夏！」

いや、あれであっている筈だ。

「おい無視するな！」

じゃあ、なんで避けられているんだ？

「だから無視するな！聞け！一夏！！」

「俺は聞いてるって！」

といつかなんで俺が怒られてるんだ！

何か理不尽なものを感じつつ、ドアセンサーに触れた。

どうでもいいが、ドアがバシュツと音を立てて開く音って格好いいな。

ドアが開くと……

「待ってたわよ、一夏！」

ピットに鈴がいた。

怒り心頭だったのに、どういう変化だ？

「強行手段にでたか！」

「どういっつもりで？ 鈴さん。」

なんか秋奈とセシリアが言ってるな？

「貴様、どっやってここに」

「篝さん！ここは、私の顔に免じて許してください！」

「せ、セシリア！」

セシリアが鈴を援護してる！？

なんか二人共頷きあってるし！

「ありがとうセシリア、……で一夏……反省した？」

「へ？なにが？」

「だ、か、らっ！あたしを怒らせて申し訳なかったな〜とか、仲直りしたいな〜とか、あるでしょうか！」

「いや、そう言われても……鈴が避けてたんじゃねえか」

「あんだねえ、女の子が放っておいてって言ったなら何もせずに放っておく訳？」

「おう！」

そりゃそうだろう。

放っておいて欲しいんなら、放っておいてやるのがいいだろ。

「……一夏、マイナス一点。」

「なんだよ秋奈？変な事言ったか？」

……なんかため息つかれた。

幸せが逃げるぞ？

「あんたって……いいからとにかく謝りなさいよ！」

「なんでだよ！ちゃんと約束覚えてたじゃねえか！」

「約束の意味が違うのよ、意味が！」

「意味ってなんだよ！俺は納得出来ないまま謝るつもりは無い！」

一度啖呵を切った以上、引き下がれるか！

「……一夏さんマイナス2点ですわ。」

今度はセシリアかよ！

「わかったわよ……じゃあこう言うのはどう？」

来週のクラス対抗戦で負けた方は勝った方の言う事を何でも一つだけ聞く事！」

「おう！いいぜ！俺が勝ったら約束の意味を教えて貰うからな！」

約束の意味が鈴を怒らせているんだ！

教えて貰うぜ！

「えっ！あ……だから……意味は、その……」

鈴は焦りながら、赤くなった。
屈辱的な事なのか？

「「……………マイナス2点。」」

今度はダブルかよ！

……………合計マイナス5点？

「……………なんだ？やめるならやめてもいいぞ？」

「誰がやめるか！あんたこそ謝る練習しておきなさいよ！」

なっ！親切に聞いているのに！

「なんでだよ馬鹿！」

「馬鹿とは何よ！この朴念仁！間抜け！アホ！馬鹿はアンタよ！」

……………むかつ。

「うるさい！貧乳！」

一瞬俯いた顔が上がり、目をキリッとさせた鈴が俺を睨んだ。

あ。やばい。

ガギイイイイイン！

金属と金属が激しくぶつかり合う音が響いた。

一瞬の事で、わからなかったが、ISを展開した鈴の右腕で振り下ろされた拳を秋奈が同じくISを展開させ、双銃の片方で防いだ音だった……

どうやら俺は秋奈に守られたらしい……

……でもよ、

「……秋奈さん、どうして銃口がコチラにムイテいるのでショウカ？」

俺の警戒音がビンビンになっているぞ！

IS無しでー！

「……一夏、レディーに対する禁忌その一。身体的特徴の暴言。……今のはマイナス100点だ。」

「い、いや、悪い。今のは俺が悪かった！すまん！」

「今の『も』だ。……前にマイナス5点貯めている。……それに謝るのは、俺じゃない。」

「鈴！悪かった！だから秋奈をとめ　人に頼るな！」　う……」

「威力は落としてある。……………逝ってきな。」

「字が違うッ！グアアア、く！」

俺は、薄れていく意識の中、勝敗がどうあれ鈴に謝らないといけな
いっと思ひ、また秋奈には逆らわない様にすると誓って意識を手放
したのであった。

Out 一夏

Side 秋奈

「てな訳だったんですよ？だから見逃してください。」

「愚弟の失態だ。見逃してやりたいが、教師としては見逃す訳には
いかない。」

……………はい、秋奈です。

只今、生徒指導室にて説教中です。

あの後、山田先生に一夏制裁を見つかり、連行されました。

「ISの無断展開、一般生徒に暴行……………何か言い訳は、あるか？」

「……………ありません。」

鈴も展開していたが、俺が逃がした。

傷付いた乙女には、この説教を受けるのはキツイからな。

「よろしい、処罰は二週間の自室謹慎だ。」

「……………それだけですか？」

処罰にしては優しいな。

「……………sss社長の暴力行為、これ程までにマスコミが食いつくネタはないだろう。」

なるほど……………

SSSから援助を受けているIS学園は、この事を表沙汰に出したく無い訳か……………

「了解です。……………クラスのみんなには？」

「お前の場合は、仕事が忙しくなったで通じるだろう。」

「二週間は苦しいが……………妥当だな。」

「わかりました。」

「では、もういいぞ。」

「はい。」

用も終わり、生徒指導室から出る。

自室謹慎だからな……

対抗戦の応援には行けないか……

あ……

マジで暇になるな、これは……

本当に仕事するか？

などと全く反省の色を見せずに寮に向かっていくと……

「秋奈……」

「秋奈さん……」

鈴とセシリアが、寮門で待ち合わせていた。

「セシリアに鈴……どうしたんだ？」

「秋奈さんが、連れていかれてしまっていて心配で待っていましたわ。」

「……どうだったのよ？」

かなりの時間を待っていたんだな。

二人の足元には、飲み終わった空き缶が置いてある。

「……………二週間の自室謹慎だ。」

「そう、ですか……………」

「ごめん…あたしのせいで……………」

明らかに鈴は、落ち込んでいるな。

つたく……………」

「そう落ち込むな、織斑先生も理解してくれているし、カタチだけの処罰だ。」

……………それより一夏は何か言っていたか？」

説教中でも、そればかり気になっていた。

「一夏さんは、『秋奈は俺の為を思ってやったんだ。怒るはずない。』

』って言うてましたわ。」

「そうか……………」

一夏って本当にイイ奴だな。

普通怒るぞ？

あんな事したら……………」

「……………鈴、応援に行けなくなったが、頑張れよ？」

応援してるかなら。」

「秋奈……」

「お前らしくないぞ？」

別に謹慎だからと言って遊びにくる奴を追い返せ！っとは言っていないんだ。………何時でも遊びに来い。」

「………うん！わかったわ！絶対に謝らせてやるわよ！」

「その意気だ。………そろそろ自室謹慎の身なんでね？失礼する。」

「うん！遊びに行くから！」

「おう！待ってるぞ。」

二人に見送られながら、俺は自室に戻っていった。

………のだが、

「………いくらなんでも早過ぎではないか？セシリア……」

「あら？追い返しますか？」

「そんな事する筈ないだろ？」

ざれ言を一言一言交わし、紅茶をいれる。

「一夏の周りは素直じゃない奴ばかりだな。筈に鈴……………もしかしたら織斑先生もか？」

「これは素直ではなく、照れ隠しですわよ？」

「……………俺もまだレディーを理解していないようだな。」

二人で苦笑しつつ、紅茶をすする。

まえに一夏に言われたが、二人が、こうしてお茶をしていると別世界になるらしい……………

なんだよそれ？

「……………秋奈さん、少しよろしくて？」

ん？

少し考え込んでいたか…

「……………なんだ？」

「秋奈さんは、お友達の鈴さんの為に嫌われるかも知れないのに夏さんを撃ちました。もし……」

「……鈴さんではなく、私でしたらどうしてましたか？」

ふむ……。

「夏に暴言されるセシリアか……」

「……社会的抹殺する。」

「なっ！例えでも行き過ぎではありませんか？」

「そうか？」

セシリアは、俺の……

八咫鳥の守護に入っている。

守護下の元にいる者に対する敵対行動は全力で排除するものだ。

「……でも、守護うんぬんとは違う感情もあるな。」

これは……

「大切な人が馬鹿にされるのが許せない……からか？」

「えっ！今なんと？」

おっと、口に出てたか…

「いや、何でもない。……………忘れてくれ。」

「……………納得出来ませんが、わかりましたわ。」

そう言っつて紅茶を飲むセシリア。

セシリアか……

一度、セシリアに対する気持ちを見つめ治す必要があるな。

考え込まないよう注意しながら、セシリアとのティータイムを時間が許す限り楽しんだのであった。

o u t 秋奈

S i d e 三人称

秋奈がセシリアと鈴と別れた後に……

「秋奈って優しんだね？セシリア。」

「ええ…本当に……」

「そんな秋奈にセシリアは惚れたんだね？」

「そうですね。……って何を言っているのですか！」

「照れない照れない」

「うう…わ、私もう行きますわね！」

「秋奈の所に？」

「鈴さん！」

と言つて会話が成り立っていた事を秋奈は知らない。

十四羽 く禁忌(後書き)

くあきなのかんけいずく

鈴 ほつとけない友達

セシリア 大切な存在？

一夏 イイ友達。

く逆かんけいずく

鈴 優しい奴+セシリアの思い人

セシリア らぶう

一夏 理解者

十五羽 く変化（前書き）

遅れて申し訳ありません。

色々トリアルが片付きました。

頑張ってシャルを出そう！

……と考える作者。

頑張ります。

今回は、久しぶりなので内容が……

すみません。

十五羽　く変化

Side　秋奈

雲一つない晴天の中、クラス対抗戦が今日行われる。

「　　」と言う訳だ。十分に気をつけるよ?」

『OK、秋奈。』

そして、俺は自室とピットで離れているが、通信で鈴と対一夏の最終注意事項を話し合っていた。

なぜ一夏ではないのか?だと……?」

鈴と同じ事を……

『秋奈は一夏に協力してると思っていただけ……』

何で、あたしに協力してくれるの?』

そう質問されたのは、謹慎を受けて翌日のことかな?

確かに俺は一組で、鈴は二組。

クラスを裏切っているが、俺の中では些細な事。

むしろ二人に最高の試合をやってほしい気持ちの方が強い。

なので、対抗戦までは、IS素人な一夏にセシリアが助力し（ほとんど篤が訓練してたが…）、代表候補生の鈴に自称経済解析者 兼 自称戦闘解析者の俺が助力し、最高な試合を行う為に力を貸している訳だ。

『 奈、秋奈！ちょっと聞いているの！？ 』

つと考え込んでいたか…

「 ああ…、大丈夫だ。 」

『 時間だから行くわ。 ……モニターでシツカリとあたしの勝つ所を見てるのよ！ 』

「 了解、楽しみにしてる。 」

「 ええ！じゃあ行くわ！ 」

プツンと通信が切れて、画面が黒くなる。

俺は素早く手を動かし、黒画面に新しい光を入れる。

「 ……満員御礼だな。 」

左上にLIVEと書かれた画面

アリーナが映し出された。

そして5分も待たずに、颯爽と現れる白と……茶？いや紫？

……とりあえず両者が揃い多くのギャラリーがいる中、試合は開始された。

………うむ。

「………防戦だな。攻めなければ勝てないぞ　一夏？」

第との訓練の成果なのか、鈴の初撃を防いだのは、評価するが……

第三世代型兵器『衝撃砲』に苦戦しているのが直ぐにわかる。

やはり、砲弾・砲身が見えないのがキツイのか？

………俺だったら。

肉を切らせて骨を断つ、か……

急接近し、衝撃砲使用時に出るタイムラグを狙い、式式……いや、『三本目の足』を使うか……

でも『アレ等』は全て威力が高すぎて、シールドエネルギーを突破してしまう。

やはり式式か……？

衝撃砲対策を考えながらも、モニターを見るが…

「……ははは。」

一夏の目つきが変わっていた。

この試合は、どうなるか……

お互いが構え直し、一夏が動いた瞬間……

ズドオオオオン!!!

激しい音と砂煙が舞い上がった。

「……………っ!!!」

砂煙が晴れ、乱入者がモニターに映った瞬間、俺はアリーナへと走り出していた。

……………ようやくだ。

ようやく、餌に虫が食いついた!

遮断シールドを貫通するだけの攻撃を放てる全身装甲の機体。

一夏へ対する公共の場での強行襲撃。

そして何より……

無人機を製造できる技術力！

SSSの情報収集力を過信している訳ではないが……

全世界で無人機の製造・開発に成功・隠蔽している企業があるっちはあがつていない！

ただ気掛かりがあるとすれば……

……コアナンバー。

存在するナンバーであるところの襲撃は虫の可能性が高い。

逆に存在しないナンバーなら……

……いや、やめよう。

やっと掴んだチャンスだ、『if』を考えるより、今は目の前の事に集中するべきだ。

考えをまとめ、スタジアムに入り階段を駆け登る。

ステージに1番近く通じる扉は……

「秋奈さん！！！！」

「っ！セシリアか！」

扉に向かう途中でセシリアに呼び止められた。

ちよつどいい！

「秋奈さん、どうして「状況はどうなっている！」っ！……ス
テージに通じる扉は全てロックされ、遮断シールドがレベル4に設
定されています。」

「なにつ！」

あの機体の仕業か！

……上等だ！

俺も覚悟を決めるぞ！

「……セシリア観客席に行くぞ。」

「ですが！遮断シールドがレベル4に！」

「俺に考えがある。」

「……わかりましたわ。」

観客席に走りながらも、セシリアに作戦を伝える。

「やる事は簡単だ。俺が遮断シールドを破壊し、セシリアがあの機体を容赦なく狙い撃て。」

「っ！あれには人が乗ってますわよ！」

「あれは無人機だ。」

「……………えっ！」

「あのスラスターの量は、人が乗る事を前提に考えていない。……………同じ高機動型を乗る俺にはわかる。」

いくらISが優れていたって、あのスラスターの量が生み出すGは、次の行動に支障を生む。

例え有人機であっても『亡国』の連中だし、セシリアが人殺しになるうとも……………

俺が全力で守る！！！！

「でもどうやって遮断シールドを！？」

……………。

「……………SSSの八咫鳥は二本足だった。」

「えっ！？何の事ですか？」

「……………聞いてくれ……………数多の文献の中でも八咫鳥は二本足で語られて

いる。……しかしそんな幻想的な足では欲しい物は掴めない……と考
えたらしい。」

「……なら何故三本足に？」

「先代……父様が幻でも何でも掴める物が多い方がいいって言うて
な？」

「……………」

「以来、SSSの八咫鳥の三本目は隠された足と言われている。」

「二本は見えるのに、三本目は見えない……」

「……でもSSSの八咫鳥は三本目が、ちゃんとありますわよ？」

「……俺のIS『八咫鳥』はSSSの意志を受けて生まれている。」

「……このISは、二刀一対の武器を一つにした時、幻を掴む三
本目の足が現れる。」

「っ！この武器がシールドを破壊する程の威力をお持ちで！ ……」

「……それなら遮断シールドを破った後に秋奈さんも参戦すれば一夏さ
ん達の負担も減りますわよ？」

「……………」

「確かにそうだが……………無理だ。」

……三本目は、まだ調整中で威力制御が出来ない。……だから使用時に『八咫鳥』のエネルギーを全て絶対防御に回す。」

「えっ!?!」

「……破った後、俺はエネルギー切れで動けないだろうな。」

レベル4のシールドを貫通させる程の威力を防ぐ為にはこのぐらいはしなくてはな……

「……安全面は、いかがなのですか?」

「……計算上では絶対に安全だと表示された。」

「……わかりましたわ。」

セシリアに渋々承諾を貰い、観客席へと歩みを速めた。

そして、観客席にたどり着くと、アリーナには一夏達と不明機が対峙し、互いに様子を伺っている様に見えた。

「よし!行くぞ!セシリア!」

「はい!」

俺達は、ISを展開し《ベルヴェルク》と《スターライトMK?》を構えた。

「コード・銃神………封印解除、《ベルヴェルク》解放!」

《ベルヴェルク》が粒子化し、一つになる。

「《フェンリル》展開！術式解放！弾丸トール、セット！」

一つになった《ベルヴェルク》……今は《フェンリル》の銃中が割れ、一つの弾、トールが現れる。

「くっ！………続いて、エネルギー分配をシールドエネルギーに全て

「一夏あ！！！」　っ！箒か！」

中継室に箒が！！

「……危険だって言うのに、来ちまったのかよ。」

「恋する乙女は強いのですよ？秋奈さん。」

「………ふう。」

緊迫した雰囲気から一気に和んでしまった

………が

「ッ！セシリア！あいつ箒にロックしてやがる！」

「なんですって！」

イレギュラーな存在に興味をもったか！

くそ！

まだエネルギーが、不十分だが、やるしかない！

俺は構え直し、『八咫鳥』の翼は輝きだす。

「放熱システム起動！……零式・ネメシスライザー！！！」

《フェンリル》から発射された凶弾は、轟音と共に遮断シールドに衝突し爆発した。

「くっ！」

ネメシスライザーの余波と爆風がシールドエネルギーをガンガン削っていく。

だが、ボーダーラインギリギリで防ぎきり、視界が晴れ、遮断シールドが破壊出来ている事を確認する事が出来た。

「よし、行け！セシ」秋奈さん！！！！」 なっ！！」

あいつの腕が……

先程まで筭をロックしていた腕が……

俺に向いている……

「ッ！俺に構うな！行け！セシリア！」

鳴り響く警戒音の中、俺が最後に見た物は、光り輝く脅威と顔を青くした幼なじみだった。

O U T

十五羽 く変化（後書き）

SSSのマーク詳細

八咫鳥が三本の足で、地球と太陽と月を掴んで翼を広げている。

星には意味があり、

地球

今、私達が足っている星

今を生きる者の為に

月

地球から見上げる星

未来へと羽ばたく意志

太陽

星を照らす存在

八咫鳥の加護を受ける者に希望を

………と言つ意味。

十六羽　く前進（前書き）

短い……

いつもの半分……

頑張る……

十六羽　く前進

Side 秋奈

「二人共、体に致命的な損傷はないが全身に軽い打撲がある。数日は地獄だろうが……
まあ慣れる。」

「はあ……」

「情けないな、一夏。」

不明機の襲撃から数時間、俺と一夏は保健室のベットにいる。

「……雑賀、お前も人の事を言えたものではないぞ？」

「俺は、一夏みたいなヘマはしてませんよ？」

聞いた話しによると、一夏は絶対防御をカットした状態で衝撃砲を受けたらしい。

んで、俺は、遮断シールドを破壊するのにエネルギーを全て使った筈だが、奇跡的に絶対防御が発動し、不明機の攻撃が直撃したのに関わらず、打撲ですんだ。

「……無茶をするなっと言っことだ。」

「……わかりました。」

無茶をしたっと言う事で一夏と同じか……

「まあ、何せよ無事でよかった。生徒に死なれては目覚めが悪い。」
そう告げる織斑先生。

うん、いつもよりずっと柔らかい表情だが、その表情は二人にはなく、一夏に向けられているな。

はあ、俺はいない方がいいな。

「……織斑先生、俺は先に部屋に帰りますね？……… 謹慎中の身なので。」

「え？お、おい秋奈！」

「いらん気をまわすな、雑賀。」

「はいはい。」

二人の反応をスルーして、保健室を出た。

家族だけの会話も大切だからな。

心配してくれる家族がいる事に羨ましく思いながらも、足早に部屋へと向かった。

……向かったのだが、

「……………」

「……………」

サササ……

横に移動。

サササ……

相手も横に移動。

「……………」

「……………」

ヒョ〜イ〜。

軽く横に移動。

ヒョ〜イ〜。

相手も横に移動。

「……………」

なんだ？この状況？

「あ〜……セシリアさん？」

「……………なんですか？」

セシリアが行く手を阻んでいる。

「謹慎中なので、速く部屋に帰りたいのだが？」

「私は、秋奈さんにOHANASIがありましたよ?」

「……………」

……………怒っているな、凄く。

しかも、なのは式かよ。

……………。

当たり前か……………

絶対に安全だと言っておきながら、この有様だしな。

「はあ……………とりあえず部屋で話しを聞くよ。いいかい?」

「……………ええ。」

前にも仕事のやり過ぎで倒れた時に、説教なのは式を受けたな。

鬱になりそうだ……………。

あの時は、朝日を拝む事になったからな。

俺怪我人だよな?っと思いつつもセシリアの横を通り過ぎると、背中に重みを感じた。

「……………セシリア?」

重みの犯人はセシリアだ。

セシリアが、顔を隠す様に俺の背中にくっついている。

「……………心配でした。」

「……………。」

「秋奈さんが死んでしまうのかと思い、とても心配でした。」

「……………。」

「私はもう……………大切な人をこれ以上亡くしたくありません。」

「……………。」

大切な人が……………。

セシリアは、俺の事をそんなに思ってくれているのか。

俺にとってのセシリアは……………

俺は、振り返りセシリアの顔を見た。

透き通ったブルーの瞳には、うつすらと涙が伺える。

「っ！……………俺は大切な人の涙は見たくない。」

「え？ きゃあー！！」

俺は、そのまま強引にセシリアを抱きしめた。

「……俺は恐れていたのかも知れない。これ以上大切な人を亡くす事に。」

「……………」

「自身の心を欺けて、壁を作っていた。……でも耐えられない。」

セシリアの顔が見える様に少し放し、涙を指で拭いた。

「セシリア……俺はお前が好きだ。八咫鳥に誓おう、俺は何があってもセシリアを守ると……だから守らせてくれ……………」

俺の告白から数秒……

その数秒が何十分にも感じたが、セシリアは頬を朱く染めて……

「…………嫌ですわ。」

と言った。

「……………そうか。」

フラれたな、これかな……

「私は、守られてばかりは嫌ですわ。……私にも守らせてください。」

「

「……………え？」

言葉の意味を理解するのに、時間がかかったが理解した。

「ああ！俺の事を守ってくれ！」

「はい！守りますわ、どんな事があっても！」

「はははははー！」

「うふふふふ。」

お互いに笑いながら、俺は再度セシリアを抱きしめた。

セシリアも俺に応える様に背に手を回してくれた。

ちょっとした事だが、それだけで幸せになれていた。

……………そうなれていた。

「秋奈にセシリアく、なに笑っているっ！ご、ごめん！」

「……………」

……………鈴が来るまでは。

セシリアは、恥ずかしがり俺から放れた。

セシリアの抱き心地が名残惜しい……

「……鈴、空気読んでくれ。」

「……ごめん、秋奈。」

「ふう……もういいさ、何時でも抱けるし。」

「あ、秋奈さん／＼／＼」

「（キラーン！）……セシリア、後で話しを聞かせなさいよ？」

「り、鈴さん！」

そんなこんなで、出会いと奇襲、そして愛する人を見つけ、クラス対抗戦は幕を閉じた。

……まあ俺達は、部屋に着くまで根掘り葉掘り、鈴に聞かれたがな。

OUT 秋奈

Side 三人称

SSS極秘書類

不明機IS報告書

報告人 磯野

記

IS学園で行われたクラス対抗戦に乱入した機体について下記の事が判明。

- 1、各国家、不明機に関して情報なし。
- 2、無人機と判明。
- 3、コアナンバー、各国家にも登録されていない。

以上の事から今回の襲撃は、『虫』ではなく『マザー』の可能性が高い事を記載。

捜査を打ち切りとする。

受取人 雑賀秋奈

O U T 三人称

十六羽　　く前進（後書き）

脱字や間違えがあつたら感想お願いします。

作者は、国語、理科において絶望的です。

それ以外の感想もお待ちしてます。

十七羽　く休日（前書き）

弾と蘭を布石として出したかった……

この話は、読まなくても影響ないかも……

十七羽　く休日

Side 秋奈

六月頭、日曜日。

晴れてセシリアが恋人になってから数日後の休日。

折角の休日なので、セシリアと一緒に遊びに行こうかと思ったのだが……

「あちく……」

「秋奈君、次で最後だから頑張れ。」

…会社は許してくれない。

新しい企画の為、SSSの経営方針の下、社長自ら営業回りをして
いる。

くそ、初夏だっていうのに暑いな……。

「……次はどう?」

「ハツキ社に、今回の企画に伴うリスクを説明しに行くんだよ。」

「うわ…ハツキ社かよ。」

あそこってSSSの事をよく思っていないから説明が面倒臭いんだ

よな。

はあく……またグダグダと嫌味をネチネチ言われるのかよ……………。

……………。

……………。

……………。

「ああー！磯野！戦前の腹拵えだ！昼飯にしよう！」

「…………嫌な事を後回しにしたってやるんだよ？」

「わかってる！」

俺の我が儘で、社員達を路頭に迷わす事なんてするか！

辺りを見渡し、飲食店をさがす。

調度よく、目に入った一つの定食屋。

「…………磯野、アソコにしよう。」

「『五反田食堂』…………SSSの社長が定食屋って…………」

「分かっているいな、磯野。『旨い』は何処から出て来るか分から

ないんだぞ?」

と言うか、堅苦しい店に入りたくないだけだが…

「……わかりました。行きます。」

「素直になれ、お前も好きだろ? ああいう感じの。」

「……………」

俺の威厳やメンツを保つ為に、積極的に自営業の店に入らない様にしているのは、分かっている。

……でもたまには、な。

「行くぞ。」

「はい。」

内心楽しみにしている磯野を連れて暖簾をくぐったのだ。

OUT 秋奈

Side 一夏

六月頭、日曜日。

俺は久々にIS学園の外

中学からの友達、五反田弾の家に遊びに行き、昼飯をこ馳走になっていた。

「でよう一夏。鈴と、えくと、誰だっけ？ファースト幼なじみ？と再会したって？」

「ああ、筈な。」

「ハウキ……。誰ですか？」

「ん？俺のファースト幼なじみ。」

「ちなみにセカンドは鈴な。」

「ああ、あの……」

なんでたろうか、蘭は鈴の話になるとほんのわずかだけ表情が硬くなる。

あ！ついでに言うと蘭ってのは弾の妹な。

「そうそう、IS学園でスゲー有名人と友達になっただよ！」

「いや、お前の姉さんもスゲー有名人だと思うが？」

「いらっしやい！何にします？」

千冬姉は、身内だし、凄いとは思うが実感が湧かないんだよな。

「……女の人ですか？」

「いや、男だよ？」

「よかった……。」

「『業火野菜炒め』と『カボチャ煮定食』で……。」

「かしこまりました。」

よかった？

ああ、女性有名人だと気を使うから……

蘭は優しいな。

「んで誰なんだよ？」

「ああ、雑賀秋奈って言う「呼んだか？」
こんな声の……って！秋奈なんでいんだよ！？」

後を振り向くと、今話題の秋奈が水を飲んでいた。

「飯食い来てるだけだろ？」

「じゃなくて、なんでこんな所にいんだよ！」

SSSの社長だから、高級料理苑にいる筈だろ！

「こんな所で悪かったな！……と言うか一夏、その有名人ってコイツか？」

「わるい弾……、ああ、そうだ。」

「ふうん、見た時ないが……」

確かに、テレビによく出てる訳ではないが、違う方面で有名人だ。

「おい一夏、コイツらは？」

「俺の中学からの友達で、五反田弾と妹の蘭だ。」

「弾だ、よろしく有名人」

「雑賀秋奈だ……有名人と言う訳ではないがよろしく頼む。」

にこやかに握手を交わす弾と秋奈。

こういう所から友情って生まれるのか、っとシミジミ感じた一夏なのであった。

……って何言ってるんだ俺？

弾と手を離し、蘭にも手を伸ばしたが、蘭は応答せず、ただ顔を青くしていた。

「……雑賀、秋奈？」

「そつだが？」

「キヤア

！！！！！」

「「「!?!?!」」」

「雑賀秋奈ってあの!?!?」

「君が想像してる雑賀秋奈であっているが?」

弾と交わした『にこやか』とは、違う『にこやか』を浮かべる秋奈。

……コイツ、芸能界でもやっていけるんじゃないか?

「蘭は知ってるのか?」

「SSSの社長だよ!お兄の馬鹿!す、すみません!お兄が、ご無礼を!」

弾を殴る蘭。

もう少し優しくしてあげろよ。

「いてえな蘭!ってSSS社長!マジかよ!」

「嫌いぞ!弾、蘭!」

「「ゴ、ゴメン。」」

二人を叱る厳さん。

なんかドキュメンタリーを見てみたいだな。

「お待たせしました。『業火野菜炒め』と『カボチャ煮定食』です。

「
蔵さんは、そのまま料理を秋奈とお連れの人に渡して厨房へ戻って
いった。」

「そう言えば……」

「なあ秋奈、その人は誰だ？」

秋奈の隣でカボチャ煮定食を食べてる黒服の男性が目に入った。

「ん？ああ、執事兼臨時秘書の磯野だ。」

秋奈の紹介と共に頭を下げる磯野さん。

出来る大人と言う雰囲気が出てるよ……」

ん？臨時秘書？

「なあ秋奈？臨時秘書ってノエルさんの代わりか？」

「ああ、そうだ。」

「ノエルさんは、どうしたんだよ？」

セシリア戦の後に、千冬姉から紹介してもらっていたんだが……」

「ノエルさんは、今敵対企業のスパイ活動中。」

「ブフッ！！！！」

「社長！！！！」

秋奈の唐突な発言に吹き出てしまった。

「大丈夫だ、磯野。一夏や弾、蘭は信頼出来る。俺の人を見る目を信じる。」

「しかし！」

秋奈が俺達を信頼してくれるのは、嬉しいが……

知っていても何も出来ないとわかってるな？

証拠に目を合わせないし……

俺の目は欺けないぜ！

………すまん、あまり自信ない。

「…つと言う訳だ、納得しろ？磯野。」

「………わかりました。」

説得に成功した秋奈は、席を立ち上がりレジへと向かった。

……向かった？

「っておい！食うの早過ぎだろ！」

俺達の方が先に食べていた筈なのに！？

「タイムイズマネーだ、一夏。」

「何が『時は金なり』だ！」

すっかり噛んで食べなくちゃ体に悪いぞ！」

出口に向かいながら片手を上げ、秋奈達は出て行った。

あっ！すっかり会計はしていたぞ？

「……たつく、社長ってそんなに忙しいのかよ、なあ弾。」

同意を求める為に弾に問い掛けるが、五反田兄妹は顔を青くしている。

「……SSSに敵対してる所なんて数少ないよ、お兄。」

「あ、ああ……大変な事を聞いちゃったな。」

「それに、日本屈指の大企業の社長さんに臆さず話しかける一夏さんって……」

「……流石、鈍感……いや世界初ISを動かした男だな。」

ん？なんか馬鹿にされているのか褒められているのか分からないぞ？

弾達には、台風が通り過ぎたかのようにだったが、食事が終わる頃には、いつもの二人に戻り、弾と俺とでゲーセンに向かったのだった。

十八羽 〱王子（前書き）

シャルル・デュノアの登場！

今後のシャルルの立ち位置は何通りかありますが…

悩みますね？

十八羽　〜王子

Side 秋奈

……………ついにこの時が来た

一ヶ月間デユノア社に潜入させていたノエルさんの情報によると、今日デユノア社は、運命を賭けた博打にでる。

ベットは、自身の息子…

報酬は、デユノア社発展に繋がる貴重な情報…

……………まあ、デユノアにとってはベットは、無いに等しいがな

策を練って、自分だけ美味しい蜜を吸うつもりだろうが、そんな事は、させない……………

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名です！」

さあ、デユノアよ……………

お前の見せる策が、俺に効くか試してみるがいい！

それなりの見返りを覚悟するのならな！

OUT 秋奈

Side 一夏

クラスに入って来た二人の転校生を見て、ザワメキがぴたりと止まる。

方や『貴公子』方や『軍人』……
そんな印象を持つ二人だった。

しかし、クラスのザワメキが止まる理由は違った。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れな事も多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします。」

「お、男……？」

そう 片方が男だったんだから

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方々がいると聞いて本国より転入

「
「きゅ……」

「はい？」

「きゃあああああ　！」

ソニックウェーブと言う奴だろうか。

いや冗談じゃなくて。

窓が震えているぞ？

「男子！三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「ワイルドな織斑君！SSS社長の雑賀君！貴公子的なデュノア君！地球に産まれてよか　「SSS社長雑賀！」　あっ！………」

騒がしかった教室が、一斉に静まり返る

ん？どうかしたのか？

「あっ！デュノア君のご実家と雑賀君のご実家が敵対企業同士だからみなさん気を使っているんですね？学校の中ですし大丈夫ですよね、雑賀君？」

山田先生が問い掛けるが、沈黙の秋奈……

つーか、デュノアの実家って会社なのかよ

と言う事はデュノアは、次期社長？

……このクラスに社長的ポジションが二人

しかも、男……

俺は、社長でも次期社長でもないぞ！？

「さ、雑賀君？」

そしてオロオロし始める山田先生。

いい加減、応えなければ山田先生泣き始めるぞ？つと意味合いを込めて秋奈に視線を向ける。

……多分向けているのは、俺だけじゃない筈だ

「……仲良く……とは行きませんが、学校で騒ぎ立てるつもりはありません。」

立ち上がり、友達にはなりませんよ発言を言う秋奈……

表情が険しいのもあって、静かな教室がお通夜レベルまで上がった。

どうするんだよ、この空気……

勇者よ！このクラスを救ってくれ！

「……………雑賀その辺にしとけ、転校生はまだいる。」

おお！流石我が姉！

関羽も逃げ出す程の武勇伝だ！

ばしーん！

「織斑くだらない事を考えるな。」

「……………はい、すみません千冬ね……………織斑先生。」

「！」

我が姉は、弟の心を読むスキルを持っているようだ。

姉の理不尽なスキルを考えている中、輝くような銀髪のもう一人の転校生が、こっちにやって来た。

バシンッ！

「……………」

「っっっ」

いきなり、殴られた。

それも無駄のない平手打ち。　　は？

「テメエー！いきなり何しやがる！」

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ！………私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

そして、俺の前から立ち去り、空いている席に座ると腕を組んで目を閉じ、微動だにしなくなる。

……ドイツじゃ初対面の相手を殴るのが友好の意味なのか？

ナドと考えてる内に、HRが終っていた。

ヤバい！確か今日は、第二アリーナ更衣室しか空いていない！

急がなければ！

「おい！秋奈いそ　「待て織斑。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」　……秋奈は、いいんですか？」

「……雑賀は、既にいないぞ？」

「は！？」

教室を見渡すが、同じ銀髪のボーデヴィツヒはいるが、秋奈はいない。

「君が織斑君？初めまして。僕は　　」

「!」

そうか!

秋奈は、この展開を見通して先に行きやがったのか!

「一夏って呼んでくれ!」

「あ、うん。僕の事もシャルルでいいよ」

「わかった、シャルル。いきなりで悪いが、第二アリーナ更衣室
ってわかるか?」

「え?うん、入学前に確認したけど?」

「俺、少し秋奈と話があるから先に行く。悪いなシャルル!」

そう言い残し、全力で走り出す。

後から「え!ちよつと待ってよ一夏!」って聞こえたが、俺は振り
向かなかつた。

OUT 一夏

Side 秋奈

第二アリーナ更衣室

ドゴンッ!

俺は感情に任せ、思いつ切りロツカーを殴った。

殴った右手から伝わる『痛み』を感じながら、唇を噛んだ。

「……………何をやっているんだ！俺は！」

自分の器の小ささに苛立ちを覚える。

デュノアと『戸籍関係』がないシャルル・デュノアに『同じ境遇』
と言われ、冷たい言葉を吐いた自分に……………

その後、気まづくなり逃げるように教室を出た自分に……………

唇を噛み力が強まり、唇から血が滴れる。

冷静になれ！雑賀秋奈！

SSSの……………両親の教えを忘れるな！

相手の後ろ盾を気にせず、直接相手を見て判断しろ！

さっきの俺は、完全にシャルル・デュノアではなくデュノア社を見ていた。

俺らしくない……………

冷静になりつつも、まだ晴れない苛立ちと共に更衣室を出ようとした時、呼吸を切らした一夏が入って来た。

「どんだけ急いでいたんだ？」

「ハアハア…あ、秋奈よかった、まだいたか…って血が出てるぞ！」

「いや、少し口を切っただけ…で、どうしたんだ？」

「ちょっと話しがあってな……」

「話したと？」

「お節介かもしれないけど…秋奈、シャルルに対して壁作っていただろ？秋奈らしくないなって思っただけ……」

「ッ…」

……鈍感な一夏にもわかるぐらいデュノア社を意識していたか

「会社同士の柵なんだと思うけど……シャルルはシャルルだろ？お節介、この女だらけの学校で出会った男なんだし仲良くしようぜ？」

「……………」

……ははは、一夏の奴。

SSSの心得を、俺（SSS社長）に語るか……

さっきまで、渦巻いていた苛立ちがなくなっていった。

自然と、頬の筋肉が緩む……

「…本当にお節介だな。」

「なっ！」

ジャージを羽織り、更衣室の出口に向かう。

「……相手がどう思うが、知らないが、壁って奴を壊してみるわ。」

………ありがとう、一夏。」

「お、おう！頑張れな秋奈！」
照れ隠しなのか分からないが、足速にグラウンドにむかったのであつた。

……グラウンドに来たのはいいが、シャルル・デュノアの姿が見られない。

当たり前か……

同じ更衣室を使うのに、入ってこなかったんだからな……

普段ならやらないようなミスに自分が緊張していた事に気づく。

息を吐き、心を落ち着かせた……

「秋奈さん！」

「ん？どうしたセシリア？」

眼を閉じていたので、セシリアに声を掛けられるまで気付かなかった。

「いえ、教室での秋奈さんは、少し様子が　　ッ！血が出てますわよ！」

「ああ、拭き忘れていたな。」

「少し失礼しますわね。」

オロオロしながら、羽織つてあるジャージからハンカチを取り出し、口に着いた血を拭き取ってくれた。

「悪いな、セシリア。ハンカチが汚れてしまったな。」

「構いませんわ。ただ……」

「ただ？」

何かを言いかけ、俯いてしまったセシリア。

続きが気になるので、続きを促してみた。

「わ、私は！あ、秋奈さんのか、彼女ですから！……困った時は相談してください。」

俯いた顔をあげ、照れているのか、頬を赤く染めながら俺に笑いかけていた。

……。

……。

……抱いていいか？

彼女に対するひいき目もあるが……

今のセシリアの笑顔は、男心と言つか理性？を崩壊させるのには、十分な破壊力を持っていた。

「ね？」

「ッー」

……首を傾け、『ね?』を頂きました!

可愛さプラス100!

その結果……

「セシリア……」

「あ、秋奈さん!」

……我慢出来ませんでした。

今セシリアを抱きしめています。

近付いた事で、女特有の甘い臭いが鼻につく。

抱きしめた腕の力を更に強める。

「セシリア……」

「秋奈さん……」

セシリアも当然の様に腕を回し、俺のハグに答えてくれる。

「……セシリアの事は心から愛している。」

「はい……」

「今回の事は、SSSとデュノア社との因縁が原因だ……」

「はい……」

「SSSが……俺が、どんな決断をしても……俺の傍にいてくれ……」

「はい、私は秋奈の傍にいますわ……私も秋奈さんを愛していますから……」

「セシリア……」

「秋奈さん……」

二人の顔が近付いていく……

唇と唇が重なり会うまで、あと数センチの所で……

「秋奈にセシリア。続きは後にした方がいいわよ？」

「……!」

……またしても、鈴に邪魔された。

しかもニヤニヤしながら

……コイツ狙ってないか？

「狙ってないわよ!」

「コイツも心が読めるのか!？」

「……………口に出たわよ?」

「おっと!」

平然を保ちながら、口を抑える。

「はあ〜……………グランドの隅だし、人もあまり来ていないから、良いけど……………あと数分したら沢山くるわよ?」

「それはそれは……………」

確かに、多くの人(女)にチャホラされるのはキツイ

主にセシリアが……………

今だって……………

「////////」

顔を伏せながらも、頬を赤く染めている。

「気をつけた方がいいわよ?何処でも桃色雰囲気を出していたら注目的になるわよ?」

「ああ……………気をつけるさ」

注意はするけど自重は、しない。

「本当にわかっているのか……」

「そんな事より織斑先生が来たぞ？速く行こう。」

「わかったわよ！」

「はい／＼／＼」

織斑先生は遅刻に厳しいからな。

俺は、セシリアと鈴を連れてグラウンド中央に向かったのであった。

セシリアと手を繋ぎながら……

もちろん恋人繋ぎである。

O U T 秋奈

十八羽　く王子（後書き）

原作では、一夏とシャルルは教室を出た時、女子の群れに襲撃を受けて遅刻の原因になりましたが：

コッチは、先に出た秋奈の機嫌が悪い事にビビり、女子の群れが去っていったと言う事になっています。

なので、原作より時間が生まれ秋奈と話せました。

十九羽　く　贋作者（前書き）

なかなか話が進まない…

頑張ります。

それと、こんな駄文に感想、評価してくださる方々の為にも頑張ります！

十九羽 く鷹作者

Side 秋奈

「くだらない事を考えている暇があったらとっとと列に並べ！」

ばしゅん！

……うん。

一夏が織斑先生に叩かれている。

いつもの光景だ。

つーか一夏よ……

俺と話をしていた時間を差し引いても、時間に余裕があった筈だが？

……話し混んでいたな？

どうやら俺にアドバイスをくれた友人は、時間にルーズな様だ。

そんな事を考えている中、一夏達は、俺とセシリアの隣の列に加わった。

「随分とゆっくりでしたわね？」

「……何をやっているんだよ、お前は……」

「スーツを着るだけで、どうしてこんなに時間がかかるのかしら？」

次々と言われる罵声に顔を歪める一夏。

ちなみに俺のISSスーツは、SSS製特注の手首の所にアタッチメントが付いているタイプでアタッチメントを押すと自然と体にフィットするタイプだ。

分かりづらかったらプラグオーツを浮かべてくれ。

……誰に説明しているんだ、俺は……

何処からか飛んでくる電波に本気で対抗策を考えていると、待機状態の『八咫鳥』から警報が鳴り響く。

危険が迫っているのか？

授業中だと言っのに……

「……いったい何の警報だ？」

「それは、私が来た警報だ！」

ばしーん！

「雑賀、お前はしっかり者だと思っていたのにな……集中して話を

聞け！」

「……………はい。」

……………どうやって背後を取ったんだ？

これが、モンドグロツソ優勝者の実力が……………

と云うか、気づいていたなら教えろよ！

一夏！……！

「本日は、格闘及び射撃を含む実践訓練を開始する」

一組と二組の合同実習だから、みんな気合いがはいつてるな……………

その証拠にみんなの眼が輝いている。

まあ、俺は今更と言う感じだけだな。

「そこで、今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代もいることだしな。 オルコット！あとは、さい……………」

ん？
俺じゃないのか？

一瞬、織斑先生と目が合ったが何を考えてなのか目を逸らし……

「…… 凰！前に出ろ！」

「ッ！なんでアタシなのよ！」

ばしーん！

いきなりの指名と織斑先生に苦手意識があるためか、素で返した鈴に出席簿が振り下ろされた。

「敬語を使え凰！……専用機持ちは、すぐに始められるからだ。」

「うっ……」

痛みに唸る鈴にセシリアが近付く。

「鈴さん……少しはやる気を出しましょう。――夏さんにいいところを見せましょ？」

「セシリア……うん！実力の違いを見せてやりましょう！専用機持ちの……」

「ええ！私もサポートしますわ！」

ふ……恋する乙女は強い、か……

ここで、一夏にアピールするつもりか……

一夏の事をチラチラ見てるしな。

「それで、相手は誰？今のアタシ達ならどんな相手も返り討ちよ！」

「……慌てるなバカども。対戦相手は」

キイイーン……………。

ん？

この音は……

「なあ、秋奈？なんか聞こえないか？」

「……前方約300m、IS『ラファール・リヴァイヴ』を確認。
操作ミスか？減速していない。」

「ええ！？」

『八咫鳥』から送られて来た情報を整理し、腕だけ部分展開し、『鳥巻』を呼び出す。

「ッ！どうするんだよ秋奈！迎撃する」「絡め取る！」
「はあ！」

「減速させるから、お前が受け止める。」

「っておい！……わかったよ。いつでもいいぜ！」

一夏も『白式』を展開した。

「残り50m！目視確認！行くぞ！一夏！」

「ああ！」

俺は、『ラファール・リヴァイヴ』に向け、『鳥巻』を投げつける。

「ッーきゃー！」

見事命中し、『鳥巻』のワイヤーが『ラファール・リヴァイヴ』を絡め強制的に減速させる。

ブースターに上手く絡まったおかげか、PICが停止し、落下するが……

「OK秋奈！捕まえたぜ！って山田先生！？なんで……」

作戦通り、一夏が確保。

怪我人0で作戦終了……

即席のペアだったが、上手くいったか……

「あ、あのう、織斑君……ひゃんっ！そ、その、ですね？困ります……こんな場所で……しかも、こんな縛るなんて……え、SM？ッ！ダメです！こんな若い時からSMなんて！」

……山田先生が、騒いでいるが聞こえない。

そう、聞こえない。

ガシーン！ ビュッ！

鈴の武器、『双天牙月』が連結され投げられた。

……うん、見えない見えない。

きっと織斑先生が事大を解決してくれるだろう……

……案の定、織斑先生が事大を解決し、鈴&セシリア
S 山田先生が行われる結果になった。

しかし、山田先生が代表候補生だったとは……

……意外だな。

そして、暴走していた鈴も……

「この苛立ちの原因！山田には痛い目にあって貰うわよ！」

「ひい！」

「鈴さん……一応、山田先生も先生ですから……少しは、穏便に……。」

「一応って……」

意外にも怒りの矛先を、山田先生に向ける事で暴走が収まっていた。

鈴が他人に、牙を剥く、か……

意外でもないか？

転校当初は、一夏を取り巻く女子に牙を光らしていたし……

そしてセシリア……

フォローになっていないぞ？

なんだかんだしながらも、牙を剥き出しにしながら、セシリアと作戦を立てる鈴……

流石代表候補生、心は熱く、頭は冷静に、か……

これは、山田先生も厳しいな……

「……では、始めて貰うが……山田先生、こちらで戦ってくれ。」

「え？あ、はい！」

ん？

山田先生は、『ラファール・リヴァイヴ』を解除し、灰色のボディ、赤色の大型ブースターを装備したISを展開していた。

「ねえあれって！」

「流石IS学園！やっぱり持ってたんだ！」

「いいな〜！私も乗ってみたい！」

一組二組の視線が、俺に向けられる。

まあ、当たり前か……

あのISは、各国のエースや、特殊部隊に配属されている、エース機にして高級品。

……SSS製造の初めて世間に出されたIS。

「フェイカー 贗作者、か……」

セシリアと鈴も少なからず、動揺している。

「……エース機の登場って訳ね！2対1の理由もわかるわ！」

「……元代表候補生とエース機ですか……少し厳しくなるかもしれ
ませんね」

……『贗作者』は珍しく、乗り手を選ぶ機体だ。

しかし、乗り手次第では、第三世代、上手くいけば第四世代も圧倒
出来る筈だ。

そしてこの高性能な『贗作者』に足りないのは、第三世代特有の特
殊武器。

『ブルーティアーズ』の様なピット。

『甲龍』の衝撃砲。

『八咫鳥』の光翼砲。

など、コレラの特特殊武器が搭載されると『贗作者』は第三世代型に
分類される。

SSSは、ある武装『光の尾』の開発に成功しているが……

『贗作者』に搭載させる気はないな。

理由は簡単。

SSSは、表向きは積極的進出と言っているが、実際は全くやる気
0。

ISスーツのバリエーションに力を入れているからだ。

「もういいか？では、はじめ！」

おっと考え混んでいたか……

生徒の動揺が収まった頃合いを見計らい、織斑先生は号令を掛け、
三機のISは、飛翔した。

……………ふむ。

山田先生は、乗り手として選ばれた様だ。

多彩な武器を使い、セシリアと鈴の連携、追撃、奇襲を防いでいる。

「……………なかなか良いISだな、雑賀。」

生徒全員が、戦闘に見入っている中、織斑先生が話しかけてきた。

「……………社員全員の努力の賜物です。」

「謙虚を…、あのISの大部分の設計は、お前が行ったと聞いたぞ？」

「ッ！……何故それを？」

「なんで知っている？」

それは、俺だけに眼が行かない様に極秘扱いにした筈…

「私にも独自の情報提供者がいてな……」

織斑千冬の協力者……

SSSの情報を読み取る者…

ISに詳しい者……

……なるほど

「…『マザー』ですね？」

「『マザー』？」

「SSSの隠語です。なにしろ白騎士事件を起こした張本人ですから」

「…」

「……織斑先生、SSSを舐めない様にした方がいい。興味本位で

近付くと、捕まりますよ？『マザー』が」

「……世間話のつもりだったが、改めてSSSと言う物がわかった気がするよ」

「ハハハ……なんの事なら。」

いま『マザー』は、ギリシヤだっけ？

織斑先生も大変な人物と友達になったものだ。

そういえば……

「なら世間話のついでに、何故俺を呼ばなかったのですか？」

「なに、ヴァーミリオンから聞いてな。お前の実力だと山田先生が墜ちるからな。」

「……それだと、山田先生の敬意や威厳が保てない？」

「ああ、最近生徒が天狗になっていてな。私以外のIS学園教員の実力を知らせる為にもな。」

「なるほど……」

だから、各クラスの実力者を選択したのか……

「……それに、オルコットとお前を組ませると相乗効果が出そうだな。」

「……いつお知り？」

「……最近だ。」

「なるほど……」

別に隠している訳ではないが、流石モンドグロッソの優勝者。

観察力がある……

「世間話もここまでだ。………終わるぞ」

「了解。」

視線を上に向けると、山田先生のグレネードが爆発し、二人を撃墜していた。

「くっ、うう……。流石にお強い。」

「り、リヴァイヴならイケたのに……」

「あ、危なかったです。」

三者三答だが、山田先生？

せめて生徒がない所で、言ってください。

敬意が保てません。

「よし、今のを参考にしながら専用機持ちの織斑、オルコット、雑賀、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰を中心に八人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？では分かれる」

その後、班分けで一悶着あったが、円滑に授業が進み（ボーデヴィツヒ班以外）（時間ギリギリだったが…） 授業を終えた。

「ふう、秋奈、シャルル、着替えに行こうぜ。俺達はまたアリーナの更衣室までいかないといけないしよ」

「え、ええつと……僕はちよと機体の微調整をしてからいくから、先に行つて着替えててよ。時間がかかるかもしれないから、待つてなくていいからね」

……………ふむ。

シャルル・デュノアは残るのか……

ちよつどいい。

「ん？いや、別に待って」「一夏、悪いが先に行ってくれ」 秋奈
「？」

「少しシャルル・デュノアに話があつてな。……………壁につ
いてだ。」

最後の方は、一夏にしか聞こえない様に言った。

「壁？……………ああ！わかった先に行ってるぞ！……………頑張れよ秋
奈。」

「ああ……………」

そう言うと、一夏は足速に更衣室に向かつていった。

……………さてと

俺とお話しようか…

シャルル・デュノア……………

俺は、何故か警戒しているシャルル・デュノアに向き合ったのだ。

O U T 秋奈

二十羽 く嘘（前書き）

累計PV23万

累計ユニーク3万

皆様のおかげでここまで、いきました。

感謝の言葉しかできません。

ありがとうございます。

なのに話が中々進まない……

申し訳ないです

二十羽　く　嘘

六月頭の昼前

本来なら初夏と言う事で、気温が上がリ蒸し暑く感じる季節だが…

……

二人の間では、その暑さを感じられない…

「……………」

「……………」

お互いに口を閉ざし、二人揃って様子を伺っていた

「……………」

一方は警戒し……………

「……………」

もう一方は何かを考えて……………

しかし、その沈黙も直ぐに破られる事になる。

Side 秋奈

「……ふう、このままだと昼休みに入っちまうな？」

「う、うん……」

シャルル・デュノアは、吃りながら答える。

まだ警戒してるのか？

「そんなに気を張るな、俺が呼び止めたのは、別に喧嘩を売る為ではない。」

「そ、そうなんだ……」

「ああ……」

やはり、会社が敵対同士なのでソツチを考えていたか……

「呼び止めた理由は、二つだ。一つは……今朝はわるかったな。」

「……………え？」

「なに……俺のダチと女から『俺らしくない』と言われてな？反省したんだよ。」

「……………」

「とりあえず、その謝罪だ。」

そう言って頭を下げる。

トップ（社長）が個人に頭を下げるのはレアだぞ？

トップは常に、偉くなければならないからな……

「え？えええ！？だ、大丈夫だよ！僕は気にしてないから！」

手を慌ただしく振り、焦るシャルル・デュノア……

……ふむ、こういう仕草を見るとまだ年相応だな。

「そうか、ありがとう………で、もう一つだが……」

「なになかな？」

最初に比べ目に見える様に、緊張が解けていたが……

「……俺と友達にならないか？」

「………へ？」

直ぐに、顔が頬張った……

コロコロと表情が変わる奴だな……

「だから、会社の事を無しにして俺と友達にならないか？」

「え？えええ！？」

「そう騒ぐな、先生も言っていただろ？ここにいる間は生徒と生徒

だ。……仲良くしようじゃないか？」

「……………」

俺の言葉が、信じられないのか口を開け、ポカーンとしている。

本当に良く表情が変わるな……

このまま放っておくのもいいが、昼休みが無くなってしまっしな……

「……………やはりダメか？」

答えを聞いてみる。

するとシャルル・デュノアは目を輝かせ……

「ダメなんかじゃないよ！僕嬉しいんだ！まさか雑賀と友達になれると思っていなかったから！」

良く見てみると、笑顔の中につつすらと涙が伺えた。

輝いていたのは、涙の性か……

こんなに喜んでくれるなんて……

「秋奈だ。……友達なら名前で呼んでくれシャルル。」

「っ！うん！わかったよ秋奈！」

……………ふむ

無事仲直りもした事だし、そろそろ行くか……

「機体の整備があるんだろ？俺は先に行く。………って言っても一夏に昼メシ誘われているんだろ？」

「うん！屋上で食べようって！」

「そうか……俺も残念な事に誘われている。」

「…残念な事？」

「ああ、シャルルは知らないのか……人の恋路を邪魔したくないんだが、断れなくてな………」

心に思うは、篝の怒った顔……
本当にすまない、篝……

自分の無力さを感じながら、俺は購買で、昼メシを買いつうにも更衣室に足を向けたのだが……

「………ねえ、秋奈。」

「………なんだ？」

さっきの笑顔を消し、顔を伏せながら……

「本当にいいんだね？僕が友達になって？」

……と聞いてきた。

.....。

.....なるほどな。

「SSS社長は、相手の後ろ盾を見ない.....気にするな。」

「.....そっか、ありがとう。」

「ああ.....」

「元氣のない返事を意味合いを込めて返し、その場を後にしたのだ.....」

足元に購買で買った昼メシを置き、壁に寄り掛かりながらも俺は電話をかけていた。

SSSのデュノア社抹殺計画実行部に.....

『……………本当かい？秋奈くん？』

「俺を信じる磯野。」

もちろん部長は俺。

副部長は磯野。

書記はノエルさん。

……………どうでもいいか、

「……まさか初日から核心をつけるとは、思っていなかったが……………シャルル・デュノアはスパイだ。」

『デュノアの血は、争えない、か……………』

「ああ……………」

シャルルも爪が甘い。

『本当にいいんだね？僕が友達になって？』、か……………

裏を返せば……………

『僕はスパイで、君のIS情報を貰っちゃうけど本当にいいの？』
だよな。

「……………対象は、『白式』と『八咫鳥』だな。贋作者も調べたい所だが、今は学園が管理してるし、ノエルさんの情報ではシャルルは、

専用機持ちだから貸出申請は、通り難いだろう」

『なるほど……で今後は、どう動きます部長？』

声笑笑っているぞ磯野？

まあ、先代の頃から働いている磯野だ。

敵の失態を喜んで当たり前か…

しかし……

「……まだ、泳がせる」

『なッ！………』 『犬』ですか？』

「ああ……シャルルはデュノアの血縁関係だが、考え方は、まるで違う。……むしろ俺の心配をする程の」

『お人よしですか……。わかりました、コチラは引き続きノエル女史の情報をまとめます。』

「ああ……あと保険としてプランBも会議してくれ。」

『プランBですか？……会議しなくてもノエル女史に決まりそうですよ？本人の希望で……』

「一応だ……。」

『……わかりました、では失礼します』

「ああ……」

電話を切り、昼メシを持つ…

デュノア社の消滅はカウントダウンに入った。

後はシャルルの事だけか……

シャルルの出方によつては……

俺は、今後の事を考えながらも屋上へと繋がる扉を開く。

「遅いぞ、秋奈。先に食つてたぞ？」

「わるいな一夏。」

屋上には、他の生徒は、いなく、一夏、篝、鈴、セシリア、シャルルと言いつつもメンバーにシャルルを足して円になるように座つて食事をしていた。

俺は、セシリアの隣に座り円の中にまざつたのだが…

てつきり、篝から何か言われるものだと思つていたのに言われなかった。

むしろ上機嫌で頬を染めている。

一体どうしたんだ？

「一夏が口を付けた唐揚げを篠ノ之さんに『はい、あ〜ん』して
たんだよ。仲睦まじいね」

疑問に思っていた事をシャルルが答えてくれた。

……………なるほど

しかし……………

「……………間接通りこして、そこまでいったか、一夏」

「？……………ああ、秋奈も唐揚げ欲しかったのか？」

……………ダメだコイツ。

冗談抜きで、いつか刺されるぞ？

一夏に対する評価を改める必要があると感じる今日この頃……………

今まで視線に入れない様にしていたが……………

セシリアよ……………

その期待に満ちた目はなんですか？

その意味合いを込めてセシリアに視線を送ると…

「デユノアさんが、日本のカップルは『はい、あ〜ん』をす
うので『ゴーイング・ゴウ』と言う訳で！」

焦りながらも、説明してくれました。

別に日本人カップル全員がやっている訳ではないんだけどな……

しかし！

男として！

彼氏として！

断る理由はない……！！

「そうか、なら頼む。」

「は、はい！あ、あ〜ん」

「あ〜ん」

……うん、セシリア手作りタマゴサンドの味が口に広がる。

卵の白身をバニラエッセンス

卵の卵黄をマスタード

レタスを……キャベツか？

とりあえず口の中が、デンジャラス。

そんな危険な味でも愛があれば三ツ星レストランに並ぶ様な味になるのは、愛が故、か……

彼女の手料理に愛を感じていると、三人から同じ視線、一人からは違う視線が俺達に送られていた。

「……一夏、箒、シャルルは、同じ事を聞きたい様だな？それは、後回しにして……なんだ鈴？」

「……セシリアの手料理食べてなんとも思わないの？」

「……愛と言う調味料が入っていれば、それは、絶品料理へと変わる。」

「あ、秋奈さん／＼／＼」

「……惚気じゃない。」

俺の返答に照れるセシリア、呆れる鈴。

いいだろ！実際に上手いんだから！

ノエルさんと比べると！

「……………惚気て何が悪い。さて、三人の聞きたい事を答えよう。」

そう言い、三人に視線を向けると怖ず怖ずと一夏が手を挙げ、聞いてきた。

「『はい、あ〜ん』はカップルがやるものって言うっておきながら何でやってんだよ！おまえら幼なじみだろ？」

箒、シャルルは首が取れるのでは？っと言っぐぐらいに首を上下に降っている。

……………ふむ

一夏、お前も箒とやってんだろっが…………

「……………今は恋仲だ。やってもいいだろ？」

「「「はあ!?!」「」」

「いいい、何時からだ!」

三人は、唾然とし硬直していたが、箒が再起動しセシリアの肩を掴み再度問いかける。

「篝さん落ち着いてください！……クラス代表戦が終わった頃からですわ。」

「ちなみに、鈴は知ってたのか？」

「ええ……仲良く抱き合っている所を見たわ。」

「鈴さん／＼／＼／」

ああ……見られたな

いい雰囲気だったのにな……

あの時は恨んだぞ？

俺は鈴に、「なんでバラすんですか！」って抗議しているセシリアを横目に納めながら昼メシに手を伸ばそうとしていたら……

「秋奈ー！！！」

「なんだ、グフツ！」

……殴られた。

……一夏に殴られた。

余力が入っていなかったのを感じると……

……ノリか？

ノリでお前は、人を殴るのか！？

「公共の場でイチャつくな！」

「しるか！俺達の勝手だろ！」

「お父さんは、そんな子に育てた覚えはない！」

「お前に育てられた覚えはない！」

「お前の事信じてたのに！」

「……………何をだよ」

まったく！

お前だってその気になれば、直ぐに出来るだろうに！

ほぼ女子高なんだから！

俺は、理不尽思考な一夏をシカトしながら昼メシを食べ始めたのであった。

「……………流石、SSS社長だね。」

「う、うむ。流石と言っしかないな。」

シャルル、篝……………

……………何が『流石』なのか教えてくれ

O
U
T
秋
奈

二十一羽 く疾風・雨・鳥（前書き）

長くなりそうなので切りました。

流石、シャルルとラウラ

一巻分を使っただけの内容の多さだ。

二十一羽 く疾風・雨・鳥

Side 秋奈

今日は土曜日。

午後は自由時間になっている為、俺達は、いつもの通り一夏の訓練に付き合っているのだが、今日は一味違い……………

「ええとね、一夏が雑賀夫婦や凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

一夏の訓練に参加するようになったシャルルが先生役をしている。

……………うむ。

シャルルは、訓練に参加する事で『白式』と一夏、『八咫鳥』と俺のデータを収集しようとしている事は、直ぐに分かった。

なので、シャルルがいる時、俺は『八咫鳥』を動かさず、一夏にI Sの知識を教える様になっている。

……………まあ、シャルルもその事に気付いている様で積極的に『八咫鳥』について聞いてこない。

聞いてきたとしても、適当にごまかしているが…

だが、実際にシャルルが訓練に参加する事は、私的にはよろしくないが、一夏にとっては大きなプラスとなっている。

説明下手な篤

感覚的な鈴

理論的なセシリア

変則操縦中心な俺

に教えを問うより、とてもわかりやすいだろう…

バンツ！！

うん、今だって実際に銃を撃たせて射撃武器の特性を覚えさせている

人は、知識として教えられるより実践する方が覚えがいいしな

………と言っても影ではデータ収集、か…

しかし、近接戦闘オンリーの『白式』のデータは必要ないだろう？

たぶん、センサー・リンクは無いだろうな

そんな射撃武器使用可能性0の欠陥品機の射撃データなんてSSSにはいらないな

本当に製作者の考えを疑うよ……

「 …… だと思っよな？ 秋奈。」

「ああ、お前のISは欠陥機だな。」

「いやそうじゃなくて、いやそうだけど……」

「ん？」

いつの間にか、銃を撃つ手を止めて俺に話しかけていた一夏

「前に『贋作者』ってISについて教えてくれただろ？あれとシャルルの専用機って似てるなって思ってたな？」

似てるも何も、オリジナルは『贋作者』だよ……

「……確かシャルルのISは、拡張領域が広いんだよな？」

「う、うん……」

詰まる様に返事をするシャルル

ん？

その反応を見ると気付いているのか？

「『贋作者』のコンセプトは、あらゆる場面の対応を想定して作られているってのは、話したな？」

「ああ。」

「そこで、全ての武器に対応出来る様に調整した。その結果、拡張

領域が広がり全ての武器を有効に使えるスペックになった。……似ているのはコンセプトが同じなのだろうな。そうだよなシャルル？」

「うん、それに僕、`装備呼び出し`《以後コール》には自信があるんだよね。」

「なるほど、なら『ラファール・リヴァイヴ?』は、お前にピッタリだな。」

「……何がピッタリなんだ？」

「ん? ああ……武器が多様する際に生まれるタイムラグの問題だ。」

「タイムラグ?」

「ええとね……その場面に合った武器を探すのに時間がかかるでしょ? 探してから量子構成して照準、だと時間がかかるんだ。でも僕の場合その時間がほとんどないんだよね。」

「相手の装備を見てから自分の武器を変更出来るとは凄いな!」

「そうだな筈……まあ、そう言うタイムラグの話があつて『贗作者』は乗り手を選ぶんだよ。」

「なるほど」

代表候補生のセシリアと鈴は、わかってたらしく会話に参加してこなかったが……

一夏と筈はわかっていなかったようだな。

とりあえず一夏は謎が解決した為、またシャルル先生の指導の下、射撃を再開した。

……しかし、今までスルーしていたが……

雑賀夫婦って俺とセシリアの事か？

それが原因で、セシリアが顔を赤くしたままだし、鈴は、そんなセシリアを弄ってるし……

俺らの会話に参加しなかったのって『理解』してるんじゃないかって聞いてなかっただけか？

まったく、あの二人は……

ちなみに、俺は夫婦って呼ばれて嬉しかったぞ？

セシリアの事は本当に愛しているし……

まあ俺は、セシリアみたいに動揺しないかな……

「ねえ、ちょっとアレ……」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いたけど……」

ん？急にアリーナ内がざわつき始めたな？

俺は注目の的に視線を移した。

「……………」

そこにいたのは、俺と同じ銀髪の女……

……たしかボーデヴィツヒだったか？

しかし、おれと似ているな……

銀髪に赤眼、さらにはISの機体色……

違うのは性別と眼帯、あと身長か？

「おい」

うん、声質も違うな……

「……………なんだよ」

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話は早い。私と戦え！」

……模擬戦って事か？

しかし、醸し出している雰囲気は違うが……

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様になくても私にはある」

……因縁、か

なら、俺が口を挟むの事は出来ないな……

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしえただろう事は容易に想像できる。だから、私は貴様を　貴様の存在を認めない」

大会？ああ、モンド・グロツソか……

確かに、織斑千冬が決勝戦に出ていたら優勝していただろう……

しかし、あれはドイツ軍が織斑千冬を引き込む為に仕組んだ茶番だと報告があつたが……

コイツ、ドイツ軍だろ？

この言い方……

知らないのか？

「また今度な」

「ふん。ならば　戦わざるを得ないようにしてやる！」

っておい！コイツッ！

「！」

ゴガギンッ！

「……こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツ人は随分沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホットなのかな？」

「それは、知らないが……密集空間で戦闘するのは同意だな。……俺の女に当たったらどう落とし前つけるつもりだ？」

「貴様ら……」

俺は横合いから割り込んできたシャルルが実弾を処理するのを、予想し『八咫鳥』を起動させベルヴェルクの銃口をボーデヴィツヒに向けた。

……しかし、同時にアサルトカノン《ガルム》か？を向けるとは……

、コールに自信があるだけはあるな……

「フランスのアンティークごときで私の前に立ち塞がるとはな」

「未だ量産化の目処が立たないドイツのルーキーよりは動けるだろうからね」

……ふむ。

「二人でヒートアップするのはいいが……俺もいる事を忘れるな」

「クッ……………」

ん？

互いに睨み合っていたが、俺が参入の意志を見せるとボーデヴィッヒは、武器を下ろした。

「……………本国からお前とは、問題を起こすな！つと言われているんだ、ここは引かせてもらおう」

ボーデヴィッヒは、あっさりと戦闘態勢を解除してアリーナゲートへと去っていった。

『お前とは』か……………

ドイツ軍は、SSSの力を恐れているのか……………

だが、まだ裏があるような……………

「一夏、大丈夫？」

「あ、ああ。助かったよ、秋奈もありがとうな」

「いや、気にするな。……………しかし、流石だなシャルル。あの状況から反撃の態勢まで入るとは……………」

「秋奈こそ！IS展開スピードが早過ぎるよ！武器まで展開してるし！」

「お前には劣るが、俺も、コールには自信があるんでな」

と言うか、TRAより、コールの練習の方が先にやったな……

なんでも、コールはTRAの基礎らしいからな

「なあ、俺を仲間外れにしないでくれよ、アリーナの閉館時間も近いし、さっさと着替えに行こうぜ」

おっと、考え込んでいたか……

でも……

「わるい一夏、俺は少しコレと話があるんで先に行ってくれ」

コレを示す様に、小指を上げた。

「……リア充め、わかったよ。シャルル行こうぜ」

「えっと……ごめん、先に着替えて戻ってて」

「……シャルルもコレか？」

一夏は小指を上げ、シャルルに問いかける。

「ち、違うよーい、一夏の今日のデータをまとめようと思ったただけだよー」

焦り過ぎだろ……

別に隠す事でもなんだから

「そうだったか…悪いな、たぶん力になれないから先に行くよ」

「……俺も行くぞ?」

「うん!二人ともまたね」

笑顔で返事を返すシャルル、でもその笑顔の裏に焦りが見えるが…
…気のせいかな?

時間も時間なので解散になりゲートに向かう一夏、箒、鈴、『ラフ
アール・リヴァイヴ?』を展開させピットに向かうシャルルを見送
り、俺達は、規則を無視し無人となったアリーナに残り、ベンチへ
と座った。

夕日が優しくセシリアの金髪を照らし、セシリアの魅力を引き立て
ていた。

「………お話とはなんですか?」

俺の視線に気付いたのか、照れながらも尋ねてきた。
もう少し眺めていたかったが、本題に入らなければな……

「……シャルル・デュノアの事をどう思う?」

恋仲になった時から俺は、よくセシリアに意見を聞くようにしている
それは、セシリアを信頼している為であり、また違う方向の意見を
聞く事で新たな考えをまとめる為だ

「……そうですわね、あの様な殿方は、社交界や家の付き合いでお
会いになった時がありますが……少しおかしい所がありますわね。」

「……おかしい？」

「ええ、そんなに長く付き合っていませんが……行動や仕草がぎこ
ちない様に感じまして……」

「……………」

……………性別の偽装？

ありえない事ではないな

一夏や俺の様な特殊なパターンが次々に出る可能性は低い……

第一、IS開発許可が危ういデユノア社に男性操縦者が所属してい
たら、政府に売りIS開発の開発援助を貰う方が俺らのデータを集
めるより効率的だ。

一夏の……男性操縦者の可能性を利用した広告塔か？

「……シャルル・デュノアが女って可能性、か」

「ええ、私が今まで育てた『眼』で見てそう感じましたわ」

「その考えは思いつかなかったよ。女性セシリアだから考えられた可能性だな」

「お役に立てて良かったですわ」

「ああ……とタイムアップだ。名残惜しいけど、コレ以上アリーナにいたら織斑先生に怒られるな」

「……そうすわね」

時刻を見てみたら、かなりの時間が経っていた。

……そんなに長時間、セシリアを見てたのか？俺……

そりゃ〜照れるよな

ベンチから立ち上がりゲートへと足を向けたが……

「秋奈さん……」

セシリアに呼び止められた。

「ボーデヴィックさんから私を守ってくださいますありがとうございます」

……ふむ。

「礼を言われるまでもない。惚れた女を守るのは、男の役目だ」

「それでも……ありがとうございます」

そう言っただけ軽く頭を下げてから微笑むセシリア……

……あゝもう！可愛いな！畜生！

俺はセシリアに近付き、セシリアを抱きしめた。

「あ、秋奈さん／＼／＼」

「…俺を魅了するセシリアが悪いんだぞ？」

「……秋奈さん、最近大胆ですわ」

「嫌か？」

「大好きです／＼／」

力を少し緩め、セシリアの顔を伺えるスペースを作る……

そして、二人の顔が近付き……………

「不純異性交際は、控えて貰いたいものだな。」

「「!!!!!!」」

……………織斑先生に注意された。

「……………織斑先生、空気読んでください」

「個人的には見逃したいが、私も教師なんでな。許せ」

……………なんで毎回誰かしらに邪魔されるんだ？

SSSの力を使って調べるか？

でもノエルさんに頼むのもなあ……………

「何を考えているか知らないが、アリーナの閉館時間はとっくに過ぎていた。今回は見逃してやるからさっさと行け。……そしていつまで抱き合っているつもりだ！」

「おっと！。抱き心地がよかったもので……セシリア行こう」

「はい／＼／＼」

「では織斑先生失礼します」

「……………失礼します」

織斑先生に挨拶し、セシリアとゲートへと足を向けたのであった。

O U T 秋奈

二十一羽 く疾風・雨・鳥（後書き）

なんかうちのセシリアがおしとやかな感じが……

二十二羽 く覚悟（前書き）

すみません更新が遅れました……

ミラ様にはまりました。

すみません。

ついでに、携帯変えるので次の更新も遅れるかも……

二十二羽 く覚悟

side 秋奈

あの後、セシリアと共にアリーナを去り、夕食を取ってから自室に戻ってシャルル・デュノアが女である可能性を考え、デュノア社抹殺計画実行部に連絡を入れたのだが……

「……………マジかよ」

シャルル・デュノアが女である事が決定してしまった。

『情報に間違いは無いそうです。ノエル女史もタイムリーな情報を拾いましたね。』

「ああ……………」

パソコンの画面に写る映像写真を何回確認してもシャルル・デュノアが女装？をして映っている。

……………見合い写真に

『デュノア社の保険でしょうか？』

「そうだな。……………贈り先が第三世代型研究が進んでいる企業の幹部または、その息子になっているからな」

『酷いですね。……親が子の人生を決めるなんて』

「ああ……」

……しかし、俺達の業界では、政策結婚なんてよくある事だ。

恋愛結婚の方が珍しい……

「規則として、IS学園にいる間は手出し出来ない。……卒業式と同じタイミングで結婚式だな。」

『ええ……』

デユノアの奴、本当にどうしようもない奴だな。

と言うか、俺の所まで見合い写真が届いてるし……

舐めてるのか？

俺はセシリア一筋だ！

『しかし、世間にはあまり、この写真は広がっていませんね？ノエル女史も結構深くまでハッキングしたそうですから……』

うむ……

確かにそうだ。

見合い写真の前にシャルル・デュノアと言つ第三の男性操縦者が現れた事に対して世間が騒ぎ立てていないな……

「磯野、デュノアの家族構成つてあるか？」

『はい、あります。今送りますね』

送られたデータに目を通す……

スカット・デュノア……… 男性・父

マチルダ・デュノア……… 女性・母

シャルロット・デュノア……… 女性・養子

ん？

女性？

シャルロット？

ああ、なるほど……

「どつやら世間は、デュノア社の娘がIS学園に入学した事になっている様だ」

『……どついつ事ぞ？』

「IS学園に出す書類の偽造だ。IS委員会には女性として提出し、IS学園では男性として提出した」

『しかし、国立のIS学園ですよ？バレるのでは？』

「先入観だ。シャルルの容姿が中性的かつ自分から男性と名乗っているんだ。身体検査をしない限りわからんよ」

実際に、デュノアの子が来ると分かっていたSSSですら、ノエルさんの情報が無ければ女性と言う事が分からなかったのだからな。

『なるほど、シャルル・デュノアは、養子で女性。養子にした理由は……』

「愛人の子、だろうな」

SSSにいた頃から女癖が酷かったらしいからな……

少しは、親心が動いたのだろう

『はあ、まったくデュノアは……。それで今後どのように動きます？』

「プランBを行う。……シャルルには今から説得しに行く」

『プランBですか……。わかりました。決行は？』

「シャルルの了解を取ってからだ。あんなのも一応は親だろ？……それでプランBの責任者は？」

『案の定、ノエル女史です。ああ、それとノエル女史から伝言です。『早く彼女をデュノア社から解放してあげてください！』っだそうです』

「了解、ノエルさんに何時でも帰れる様に言っといてくれ」

『わかりました。それでは……』

「ああ……」

通信を切り、シャルルの見合い写真をプリントアウトしてから、部屋から出た。

一夏とシャルルの部屋は、隣だし時間はかからなかった

しかし、一夏の奴……

また女と同室か？

間違いが起き無ければいいが……

などと考えつつ、ドアをノックする

「一夏にシャルル、話があるのだがいいか？」

「ッ！あ、秋奈か！少し待ってくれ！」

ん？

いきなり慌ただしくなったな？

しかし、待てと言われて待つ様じゃ俺ではない！

「入るぞ！」

一夏の返事を待たずに部屋へと踏み込む

「「！！！！」」

そして俺の目に飛び込んできたのは……

「「ははははは……」」

ベッドに入ったシャルルを一夏が布団の上から襲っていた！

「遅かったか………避妊はしろよ？」

「「秋奈／＼／＼！！」」

「大丈夫、俺はお前達の味方だ。」

「なんでそうなるんだよー！」

「ん？シャルロット・デュノアじゃ不満か？」

「いやそうじゃなくてー！」

「シャルロット・デュノア、お前はどつだ？」

「えっ！いい、一夏が嫌いじゃなきゃ……………ってシャルロット!？」

「シャルルどうした？」

シャルルは驚愕した面持ちで俺を見ている

「……………さて、場も落ち着いた事だし俺とOHANASSIしようか？」

「……………」

とりあえず一夏にお茶を入れて貰い、SSSがシャルルが女だと突き止めた経緯と一夏がシャルルが女だと突き止めた経緯を教えるも
らった。

ふむ……………

「何と言つか……………ラッキースケベめ！」

「不慮の事故だ!……………しかし見合い写真か……………」

「お父さん……………」

二人は、デユノアが結婚まで仕組んでいた事に少なからずショックを受けているようだ。

「……………シャルル、今自分が置かれている立場は、わかったか？」

「うん……お父さんは、僕の事を道具としてしか見ていないんだね」

「そうだ。フランスの情勢は俺も理解している。シャルル、お前は、この事でデュノア社が潰れると思っていると思うが、現実が違う」

「……………」

「デュノア社は、シャルルが持ち込んだデータをフランス政府に売り、政府の傘下として生き残るだろう」

「なッ！じゃあシャルルはどうなるんだよ！」

「数年は、刑務所または牢屋。その後は政策結婚だな……………」

「……………」

「……………」

「……………」

二人に『重い現実』がのしかかる……………」

俺は、二人より早く社会に出たからそれ程ではないが、二人にとっては人生初の経験なんだろう……………」

「……………」それじゃあ、シャルルは利用されてるだけなのか？」

「ああ……」

「……この三年間で何とかしなきゃシャルルの人生は、決まってしまうのか？」

「ああ……」

「……裏で操っている奴だけが、生き残るのか？」

「ああ……」

「ッ！ふざけんな！勝手に生き方を決めるんじゃないよ！」

「……」

「俺は、他人に！勝手に！人生を決められる事なんかまっぴらごめんだ！」

シャルルの事柄を理解したのか、声をあげて否定する一夏

……

………純粹だ

一夏は、物事に対する考え方が純粹過ぎる

織斑先生の教育の賜物なのか、その純粹さが一夏にカリスマと言つモノを授けている……

俺とは違うカリスマ……

俺も一夏を自分の目的の為に利用していると知ったら軽蔑するだろうか……

いや、今は考えるのはよそう……

今は、ただ目の前の事に集中するべきだ

「秋奈！お前はSSSの社長なんだろ！シャルルを助ける事は出来ないのかよ！」

「落ち着け一夏！……俺を誰だと思っている。策は我にあり、だ」

「……え？」

「……シャルル、今までの人生を捨てる覚悟はあるか？」

「……眠い」

シャルルの覚悟を聞き入れ、急ピッチでデュノア社抹殺計画を進めること一日、デュノア社抹殺は、秒読みの所まで進んだ

……おかげで、日曜日にセシリアとデートする予定が潰れてしま
い、更には徹夜明けと言う二重苦

今日程、学校を休もうと思った事はない……

「……ごめんね秋奈。僕なんかの為に……」

「『僕なんか』って言うな。これはSSS社にとっても利益になる
ことだからな、気にするな……」

「仕事に生きてるな、無理せずに休めばよかつただろ？」

「いや、セシリアに会わなくては！……彼女の存在が俺を癒す！」

「セシリア充乙」「

くだらない事を話しながら三人で教室に向かうが、何やら教室が騒
がしい……

「本当？ に優勝出来たら織斑君達の誰かと って！」

「本当よ！頑張って 達と交 したいなあ」

騒がし過ぎてうまく聞き取れないが……

「っっっ？」

したい？

……………交尾か？

……………いかん、疲れているな……………

「俺達がなんだって？」

話の内容が気になるのか、教室に突入し詳細を聞こうとする一夏……………

そのストレートさは、素直に尊敬するよ

しかし、女子達は一夏が来た事に気づいた瞬間、ごまかしながら散って行った

ハハハ！まるで虫の様だ！

……………疲れているな、俺

やはり学校を休むべき 「秋奈さん！」 つ！

この声は！

声の正体がわかる俺にとって、振り向けば我が姫がそこにいるのがわかる！

我が姫にこんな顔を見せない為に、振り向く瞬間のコンマ何秒の間に最高の笑顔を用意する！

「おはよう、セシリア。どうしたんだ？」

「……実は、お願いがありました……」

「？」

「私達……一緒に道を行けなくなりましたの」

「えっ？」

「一緒に……行けない……？」

「鈴さんと一緒に望む事になりましたので……」

「ッー！」

鈴と一緒に……？

俺は女に負けたのか？

と言っかフラれた？

「放課後も一緒に『やる』ことになりましたので……」

……何を『やる』の？

まさか！ 二つづび？

「授業が始まりますわね。ではまた夕食後に伺いますわ」

「……………」

そう言い残し、教室に入っていったセシリア……

ハハハ……

「秋奈！お〜い秋奈？」

「どうしたんだシャルル？って秋奈どうした！？」

ハハハハハハ！

「……………もう無理」

バタン……

「「秋奈！！！」」

俺は、愛しいセシリアからの言葉に、精神的攻撃と言う名の究極殲

滅呪文を言われ、倒れ伏せたのであった……

その後、雑賀秋奈の姿を教室で見たものもない……

G O T O 保健室……

O U T 秋奈

二十二羽 く覚悟（後書き）

秋奈はフラれてませんよ？

それだけは言って置きたい！

二十三羽 く黒兎(前書き)

話が進まない

進まないぶん更新速度で補い たいです

スマホに替えてから書きづらくなった

二十三羽 く黒兎

side セシリア

時間は放課後。場所は第三アリーナ。
そこに、2人の女性が対峙していた

1人は、金髪の女性

もう1人は、茶髪の女性

2人が醸し出す雰囲気は、とても和やかだった

「秋奈も大袈裟よね、セシリアにフラれたと思って倒れるなんて」

「本当ですわ！私がどんなに心配したことか」

話題にあがるのは、今朝の事

秋奈さんに、鈴さんと学年別トーナメントのペアを組んだことを告げましたら、何を勘違いしたのか私が秋奈さんをつつたと言う誤解が生まれてしまい、秋奈さんが、倒れてしまいました

保険医さん曰わく、『疲労と寝不足による貧血』っだそうです

私と秋奈さんの交際が終わるなどありえませんか！

「アタシの予想だと、アンタがややこしく説明したんじゃないの？」

「わ、私はそんなつもりは」

ややこしくありませんわよね？

「でも本当によかったの？秋奈とペア組まなくて？」

「ええ、英国婦女子としてあの様な敗北はゆるされませんわ！」

そう許される事のない敗北

山田先生との模擬戦ですわ！

あの時は平然としていましたが、思い出すだけでもフツフツと沸いてくるものがあります。

秋奈さんの、あんなにカッコイイ姿を拝見したのに私ときたら

だから学生別トーナメントで活躍し秋奈さんに似合う女性にならないければ！

なおかつ、あの時と同じ状況でなければならぬのです！

「セシリアがそう言うのなら私は気にする必要はないわね。」

「鈴さんこそ、一夏さんとペアを組まなくてよかったのですか？」

「アタシも思う所があるのよ。それにセシリアには色々と協力してもらってるし、このぐらいイーブンよー！」

「私は中立ですわよ？」

「それは残念。　いくわよ？」

「ええ」

和やかな雰囲気が一転した。

2人ともメインウェポンを呼び出し、構え対峙した。

今まさに激突の時――

「！？」

――超音速の砲弾が飛来した。

いきなりなんですの！？

私は緊急回避を行い、鈴さんの方をみた。

鈴さんも緊急回避をしているので『甲龍』の新武装と言う訳ではありませんわね。

そもそも鈴さんは、奇襲などと言う姑息な事なんてしませんでしたね。

自分に考えの浅さに失笑しつつ飛来もとを見た。

そこには、欧州連合のトライアル相手、機体名『シユヴァルツエア・レーゲン』、登録操縦者――

「ラウラ・ボーデヴィツヒ」

先週転校して来たクラスメイトに私の表情が苦くこわばッ！

いけませんわ！！

秋奈さんの隣にいる者として、相手の後ろ盾で人を評価してしまうのは！

一度深呼吸し、気持ちを落ち着かせボーデヴィツヒさんに問い掛ける

「 どういうおつもりで？挨拶にしては些か危ない気がするのですが？」

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か。 ふん、データで見た時の方がまだ強そうではあったな」

なっ！

返答が何故挑発に！？

落ち着くのですわ！

セシリア・オルコット

「何？やるの？わざわざドイツくんんだりからやってきてボコられたいなんて大したマゾっぶりね。」

挑発に挑発で返す鈴さん

心なしか、衝撃砲が準戦闘状態へシフトしているような気が

「 落ち着いてください鈴さん。挑発で返しては何も始まりませんわ」

そう、落ち着くのですわ

「はっ。2人がかりで金ばかりかかる量産機に負ける程度の実力しか持たぬ者が専用機持ちとはな。よほど人材不足と見える。数くらいしか能のない国と、古いだけが取り柄の国はな」

なっ！ななななっ！

なんて事をおっしゃるのかしらこの人は！

我が母国の侮辱だけでなく、秋奈さん（SSS）の侮辱まで！

確かに『贋作者』は、コスト面で欧州連合のトライアルには、外れてましたが

とても良い機体ですね！

「ああ、ああ、わかった。わかったわよ。スクラップがお望みな訳ね。」

「『贋作者』は、とても良い機体ですわ！そんな事もわからないなんて。ドイツ人は、本当に頭がホットですわ」

挑発で返してしまいましたが、このぐらいはいいですよ？秋奈さん？

「はっ！口だけじゃなくかかって来たらどうだ？下らん種馬と親の七光りに媚びを売るメスに、この私が負けるものか」

ぶちっー！

この人と言う人は！

秋奈さんがどんな苦勞をして今の地位を獲たのか知らないのに！

それを親の七光りで済ませるなんて！

「ー今なんて言った？アタシの耳には『どうぞ好きなだけ殴ってください』って聞こえたけど？」

「場にはない人間だけでなく秋奈さんの事まで侮辱するとは、同じ欧州連合の候補生として恥ずかしい限りですわ。その軽口、二度と叩けぬようにここで叩いておきましょう」

自然と獲物を握りしめる手にきつく力が入る

秋奈さんは、こんな戦い認めないと思えますが

私にも引けない思いがありますわ！

「とつとと来い」

「「上等！」「」

2人の乙女が漆黒のISを纏う銀の操縦者に挑んだのであった

o u t セシリア

s i d e 秋奈

どうも秋奈です。

只今、勘違いから生まれた貧血の為、保険室で休息していましたが、暇な為情報収集してます

今までデュノア社ばかり気にし過ぎて周りが見えてなかった

だが、デュノア社以外にも気になる事が生まれた為、この時間を利用し調べたのだが

「『お前とは、問題を起こすな!』、か」

そう、気になる事

それは、ラウラ・ボーデヴィツヒの言った言葉

「どうもドイツは、俺とボーデヴィツヒの接触を避けているよ
うだな」

しかし、なんの意図があるんだ？

ドイツとは、良好な関係を築いている

となると、接触を避けているのは『国』ではなく『軍』だな

確か、ボーデヴィツヒはドイツ軍に所属している

SSSがドイツ軍に勝るもの

脅威になるもの

情報収集能力だな

ドイツ軍の機密または秘密事がボーデヴィツヒかISにあるため俺（SSS）に感づかれたくないのか

ボーデヴィツヒの様子を見ても本人には知らされていないようだがな

はあ

「シャルルにしるボーデヴィツヒにしる、どうして大人は子供を巻き込むのだろうな」

やるせない気持ちからベットに倒れ込んだ

目を閉じ脳裏に浮かぶのは自身の両親

父様と母様は俺に未来へと続く道を示してくれたのに、何故子供の道を塞ぐ親が現れるのだろうか

俺は 俺達はそうはなりたくない

本格的に休息を取ろうとし、まとめてある資料を退かそうとした時

――

ppppppp

――携帯が鳴り響いた

携帯を手にしてディスプレイを確認する

ん？シャルルか

「はい どうしたんだシャルル？」

『秋奈！よかった起きてたんだ！直ぐに来てほしんだ！オルコットさんと凰さんがボーデヴィツヒさんと模擬戦してるんだけど少し様子がおかしいんだ！』

「ッ！場所は！？」

『第三アリーナだよ！』

「わかった、直ぐに向かう！」

くそッ！やな感じがする！

俺は待機状態の『八咫鳥』を手に取り保健室を出たのであった

Out 秋奈

「その手を離せ!!!」

俺は感情に任せて刀を振り下ろした

『零落白夜』と『瞬時加速』の同時使用は、燃費の悪い白式にとっ
ては自殺行為だとわかつている！
でも！鈴とセシリアに暴虐を尽くすアイツを俺は許せない！

しかし振り下ろした刀は、
ラウラには届かなかった

「ふん。感情的で直線的、絵に描いたような愚図だな」

刃が届く寸前で俺の体が止まったからだ

「な、なんだ!? くそつ、体がっ」

状況が読み込めないまま、『零落白夜』のエネルギー刃は次第に小
さく消えていく

「やはり敵ではないな。この私とシュヴァルツエア・レーゲンの前
では、貴様も有象無象の一つでしかない。――消えろ」

肩の大型カノンが接続部から回転し、俺へと砲口が向けられた。

「――くそつ！」

「一夏つ、離れて!」

シャルルからの個人間秘匿通信が聞こえて、同時にアサルトライフル二丁での弾雨が降り注いだ

「……ナイス！シャルル！」

「ちっ……雑魚が」

それまで俺を拘束していたと思われる力が消えた！

俺は直ぐさま、ラウラが離れた鈴とセシリアの元へと飛び込み、2人を抱きかかえた。

頼む、白式！あと一回だけ瞬時加速を使わせてくれ！！

無茶な最大出力同時発動の弊害でエネルギーは、ほとんど残っていなかったが、俺の願いに叶えるかのように背部大型スラスタにエネルギーが集中する

「……しかし！」

「わざわざ逃がすとも思っているのか！」

シャルルと応戦してた筈のラウラが、コチラに照準を定めていたシャルルの方を見ると、アサルトライフルから煙が上がっている

「……ジャムつたか！？」

「もう一度言ってやる。――消えろ」

くそッ！

――バンッ！バンッ！

非情にも鳴り響く銃声

しかし、俺にダメージが無かった

その後に

「くっ！」

ラウラの声と

「何やってる！速く離脱しろ！」

頼もしい援軍の声が聞こえたのだ

Out 一夏

二十四羽 〱逆鱗(前書き)

更新が

卒論や研修がきつくてなかなか更新が

とらええずいきてます

二十四羽 く逆鱗

side 秋奈

「なッ！」

俺は、校則をガン無視しアリーナへと向かったのだが

目の前で行われている状況に全身の血が冷める

あからさまに操縦者生命危険域に到達しているセシリア達と一夏に
ボーデヴィツヒが追撃する寸前だった

「くそッ！」

即座に弾速の速いベルヴェルクで牽制を入れる

「クッ！」

2つの弾丸はうまい具合にシュヴァルツエア・レーゲンの砲身に当
たり弾き返した

その衝撃がボーデヴィツヒの体制を崩す

「……今だ！」

「何やってる！速く離脱しろ！」

俺の声に反応した一夏は、セシリアと鈴を連れてシャルルの元へと

離脱をはかった

遠目でうまく確認が取れないが、一夏とシャルルの様子を見るかぎりでは2人は無事だろう

流れる様に状況が変化したのであった。

――間に合った

しかし2人を救えた安堵感と共に違う感情が生まれくる

「雑賀秋奈！」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ」

この感情は、久し振りだ

そう、純粹なる『怒り』は

俺とボーデヴィツヒは、互いににらみ合い一挙即発の雰囲気醸し出している

落ち着け雑賀秋奈

『心』は、熱く『頭』は、冷静に、だ

「随分なまねをしてくれたな、ボーデヴィツヒ？」

「はっ！ただ単に売られた喧嘩をかったただけだ！」

「喧嘩にしては些か行き過ぎな感じがするが　イギリスと中国が黙っていないぞ？」

「自身の敗北を祖国に訴えるか！まるで親に縋るガキだな！」

ふむ、理解しているかわからないが

この事はIS学園によって隠されるだろう

IS学園の監督不届きで二国から抗議が届くのが目に浮かぶ

セシリア達も代表候補生のプライドからIS学園を訴える事はない

更に学園から口止め料が払われるだろう

この場合は、ISの修理費全額負担か？

しかし、ISの蓄積経験のデータを見れば直ぐにバレてしまう気がするが

口裏を合わせるのか？

まあ、ボーデヴィツヒはそこまで考えていないだろう

どっちにしろ俺がセシリアにやれる事は一つだ

「　構えな、俺が遊んでやるよ」

「...」

「「「「「！！！！」「」「」

俺はベルヴェルクの照準を漆黒のISSに向けた

セシリア達は、この出来事に対してSSSの介入を望んでいない

そうしたら俺は、彼女の為に友達の為に

仇をとる事のみ！！！！

一夏や箒、シャルルやセシリア、鈴は、俺が交戦の意志を見せた事に驚き、ボーデヴィツヒだけが苦い表情を見せた。

「 本国からお前とかかわるなと再度通知がきている」

だらうな

SSSがドイツに調べを入れた事は、政府は知らなくてもドイツ軍は知っている

ボーデヴィツヒもしくはISに秘密がある事を悟られたと知っているんだらう

だからと言って俺が引く理由にはならない！

「ボーデヴィツヒ 貴様も本国に申し出るか？『助けて雑賀にやられたよ』と」

「ッ！」

ボーディツヒの表情が変わった

あともう一押しかなら

「所詮、ドイツ軍は一企業のルーキーISに負ける様なISしか導入出来ないのだな、ドイツ軍の器がしれる」

「き、貴様！我が軍を侮辱するか！」

予想通り

冷静に考えればドイツ軍の凄さがわかる筈なのに

多くのISを軍に配置し技術力も申し分ない

これほどまで脅威な軍は世界でもそうない

コイツは、頭に血が昇ると冷静な判断が出来ないタイプなんだな

まあそれはさておいて

「さっさと来な！」

「舐めるな！羽根付きめ！」

怒気を醸し出しながら六つのワイヤーブレードが一齐に射出された。

しかし、その軌道は感情に任せて放たれたモノ 容易に『点』を

見つける事が出来る！

『点』を見つけ出し六つの弾丸を撃ち放った

「！！！！」

弾丸は決まっていたかのようにワイヤーブレードを撃ち落とした

予想外な事にボーデヴィツヒに隙が生まれる

「隙ありだ」

「くっ！」

体制が崩れたボーデヴィツヒに2つの弾丸を撃ち込むが、不可思議な力によって弾丸は当たる事はなかった

流石ドイツ軍のエースだ

隙を突いて狙ったのに直ぐに対象するとは

しかし、あれは

「A I C 慣性停止能力、か」

まったく厄介なモノを

「貴様、『停止結界』の事を」

「ああ、知っている」

そう答えるとボーデヴィッツは、俺との距離を開けた

　　どうやら判断力は高かったようだな

ISといい、操縦者といい、本当に厄介だな

「　私は、貴様を甘く見ていたようだな。　　雑賀秋奈、この私
とシュヴァルツェア・レーゲンに相応しい相手だ！」

「　お前じゃ役不足だ」

「　言ってる」

　　なんだかんだ言っても俺も『男』だな

今は『怒り』を忘れてこの『時』を楽しんでいるのだからな

強者との戦い　　実に心踊る

ボーデヴィッツ　　ラウラも当初の目的を忘れてるようだ

「　いくぞ・・・」

「　」

俺がベルヴェルクを構え直すと、同時にラウラも手刀の構えをとる

まさに2人が飛び出し、ぶつかり合う瞬間　　俺達の間影が割り
入ってきた

ガギンッ！

金属同士が激しくぶつかり合う音が響く

ラウラは、いち早くその影に気づき加速と手刀を中断したいた

止められたのは俺か

俺はその影に心当たりがあった

俺は、ラウラに対しTRAで仕掛け様としていた

変則的な初撃が出来るTRAを初見で防ぐ事の出来る人は、相当な強者かTRAを知る者

つまり

「お前は、大人だと思っていたが 所詮はガキ、か」

「 惚れた女が怪我して黙っている男はいませんよ、織斑先生」

何時までもこのままでは、いけないので銃を下げる

しかし、ISの補助なしでIS用近接ブレードを扱うとか、つくづく常人離れしているな

あれ？

父様も補助なしでIS用近接ブレードを扱っていたような

うん、触れてはいけない所だな

「模擬戦をやるのは構わん。イーが、アリーナのバリアーまで破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「し、しかし教官！」

どうやらラウラは、まだ気持ちが高ぶっているようだな

俺を睨みながら織斑先生に抗議している

が

「なんだボーデヴィツヒ？」

「ッ！ いえ、なんでもありません」

織斑先生の凄みがある視線に押し止まって、渋々頷き、ISの装着状態を解除しアリーナを去っていった

「ふう、織斑、デュノア、雑賀、お前たちもそれでいいな？」

「あ、ああ」

「教師には『はい』と答える。馬鹿者」

「は、はい！」

いきなりの事だから仕方がないが、何時までも惚けているなよ

「僕もそれで構いません」

「同じく」

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

パンツ！と織斑先生が強く手を叩く。

それはまるで銃声のように鋭く響いた

Out 秋奈

――

――

side 一夏

「……………」

「……………」

場所は保健室。

時間は第三アリーナの一件から一時間が経過していた。

ベッドの上では打撲の治療を受けて包帯の巻かれたセシリアと鈴が

むっすーとした顔で視線をあらぬ方向へと向けていた。

「別に助けなくてもよかったのに　あのまま続けていればか
つていたわ」

「
」

感謝するかと思えばこれかよ

別に感謝されたくて助けに入った訳でもないから、いいけどな

俺自身がムカついて乱入した訳だし

実際助けたのは秋奈だしな

「鈴お前なあ　　はあ、でもまあ、怪我がたいしたことなくて安心
したぜ、なあ秋奈」

「ん？ああ
」

？

なんか歯切れが悪いな

どうしたんだ秋奈？

どこことなくセシリアも気まずそうにしているし

「なあ、秋奈にセシリアどうしたんだ？なにか「わあ、！一夏少し
黙っていようか！」グッ！なんだよシャルル！」

いつの間にか飲み物を買って戻って来たシャルルに口を押さえられ
た！

といつか缶が口に当たって痛い！

俺達は蚊帳の外にされ、重々しく秋奈の口が開いた

「セシリアどうしてあんな事を？」

あんな事ってラウラとの模擬戦か？

最初からいた訳でもないしどうしてなんだ？

「」

「ラウラから挑発されたからと言って乗るような君ではないはずだ」

「」

「君も薄々気付いていた筈だ。ラウラは今年の一年の中で頭一つ抜けている、なのに「秋奈！」 どうした鈴？」

「セシリアわね！あ、あたしに付き合ってくれただけよ！だから！
なんというか」

鈴はセシリアを庇うかのように慌てながら秋奈に説明してるが

これって修羅場ってやつのか！？

どうなんだ！箒！シャルル！

「「一夏は黙っている／いようね」」

なんなんだよ！

「だからね！あれは、その 「鈴さんもういいのですわ」 セシリアあ」

セシリアは、秋奈と視線を合わせ一つ一つ丁寧に言葉を口にしながら

「最初は鈴さんと学年別トーナメントの為の特訓をしようとしてアリーナにありました。その時、ボーデヴィツヒさんが乱入して来て、その 私達に挑発し始めました。いつもの私でしたらあの様な事はおこしませんでしたわ。ですが、あの方は母国の侮辱では終わらず、秋奈さんの事も侮辱し始め、口論のすえ我慢出来なくなりあの様な事になりました。すみません秋奈さん」

なんだよそれ！

完全にあつちが悪いじゃないか！

「謝る必要なんてないぞセシリア！そんなコトなん」だくかくらく黙っていようね一夏？」またかよシャルル！」

俺が助け船を出してるのに！

というかまだ缶持ってるのかよ！

中身が入ってるから硬くては 痛い！

「いくら侮辱されたからと言って手を出すのは良くない」

「」

「その様な事をするようではまだまだ子供だ　　しかし」

「？」

「俺は嬉しいよ、セシリアが俺を大切に思ってくれていると知れて」

「秋奈さん　　」

「セシリア　　好きだ」

「私ですわ！秋奈さん／／／／」

どうした修羅場？

さつきと雰囲気が全く違うぞ？

なんというか　　桃色？

そんな雰囲気が漂ってるな

というか手を出すのが子供ならラウラと戦った秋奈も子供だよな？

千冬姉も言ってたし

そうだろ？箒？シャルル？

「　　羨ましい、いつか私も一夏と　　」

「　　秋奈はやっぱりセシリアなんだね」

羨ましいのか？ 恥ずかしいぞ？
というか俺がなんで出てくる！？

そしてシャルル
意味がわからん

場の雰囲気が一転し鈴達も落ち着いたので部屋へ戻ろうとしたが

あの2人に話しかけて良いものかどうか

ド
ド
ド
ド
ド
ド
ド
ド
ド
ド

かなり話しかけ難いが　このままでもいけないし

しかし、何の音だ？

地鳴りに聞こえるそれは、どうやら廊下から響いてきている。

しかもだんだんと近づいてきているように思うのだが、たぶん気の
せいではないだろー！ーう！？

ドカーン！ と保健室のドアが吹き飛ぶ。

いや、本気で吹き飛んだんだ。

俺は初めてドアが吹き飛ぶという光景を目にしたぞ。

「織斑君！」

「デュノア君！」

「雑賀君！」

「――『入ってきた』なんて生易しいものではない。文字通り『雪崩れ込んで』きたのは数十名の女子生徒だった。」

室内はあっという間に人で埋め尽くされ、しかも俺や秋奈、シャルルを見つけるなり一斉に取り囲み、まるで人に群がるゾンビのように手を伸ばしてきたのである。

うわぁ、軽いホラーだぞ、これ。

「な、な、なんだなんだ!？」

「ど、どうしたの、みんな　ちよ、ちよっと落ち着いて」

「　そして、邪魔をするな」

なんかセシリアとのイチャイチャを邪魔されたせいか、秋奈不機嫌だな。

よかった!話しかけないで!

「「「「これ!」「」」」」

状況が飲み込めない俺達に、バン!と女子生徒一同が出してきたのは学内の緊急告知文が書かれた申込書だった。

「な、なにになに　?」

「『今月開催する学年別トーナメントでは、実戦的な模擬戦闘を行う為、ふたり組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは――』」

「ああ、そこまでいいから！とにかく！」

ふたり組？ああ！秋奈が勘違いした発端か！

そう言えば、俺ってまだ組んでいなかったな

と言っことは

一度やんだ伸びてくる手がまた一斉に！

「私と組もう、織斑君！」

「私と組んで、デュノア君！」

「私と戦って！雑賀君！」

やはり、ペアの申し込みだったのか！

シャルルや秋奈はともかく俺と組んで勝率上がるのか！？

学園内で三人しかいない男子ととにかく組もうと、先手必勝とばかりに勇み迫ってきているのだろう。しかし――

「一夏はシャルルと組んでいるからペアには、なれないぞ?」

鶴の一言ならぬ秋奈の発言により女子生徒一同は動きを止める。

はて?

俺は、まだシャルルに学年別トーナメントのペアについて話していないぞ?

疑問に思い秋奈に視線を送ると

「シャルルの性別を考えると。今、シャルルの性別がバレたらマズい。――計画に支障がきたす」

俺にしか聞こえない声で教えてくれた

ああ、なるほど

今後ペア同士での特訓も行うだろうし、いつどこで正体がバレてしまつとも限らない。

なら、知ってる奴で! って事が

シャルルに確認の意味を込めて視線を送ると最初は驚いていたが、軽く頷いてくれた。

――よし

「悪いな、そういう事だから諦めてくれ!」

シーン　と女子生徒一同は沈黙したが、何を思ったのか目に輝き

を取り戻した。

「な、なら雑賀君！私と組もうよ！」

「残り一人の男子逃がすものか！」

女子生徒一同は、標的を一人に絞ったのか、一斉に手を伸ばし始めた。

その光景に秋奈は苦笑し、セシリアは不機嫌に

そりゃ、彼氏が他の女子と一緒にトーナメントに出るのは嫌だよな

あれ？

秋奈って女子生徒一同にセシリアと交際してるっていつてないのか？

不思議に思いながらも秋奈を見る

すると秋奈は

「俺はトーナメントには出ない。SSSの社長としては参加するが

。ーーそれに」

そつとセシリアに近づき

「彼女以外と組むつもりはない。」

優しく抱き寄せた。

このタイミングで言うか！

衝撃の発言に女子生徒ゾンビ一同は

「イヤアアア！玉の輿が！！！」

「先越されたー！！セシリアの馬鹿ー！」

「嘘だと言ってよー！！！」

各々の叫びをあげ崩れ倒れる女子生徒一同。

さながら、日差しを浴びたゾンビのように

そして足取り重く、一人また一人と保健室を去っていく。

しかし、どうでもいいが

そろそろセシリアを放してやれよ

茹でタコ状態だぞ？セシリア。

その後、いつまでも保健室に居たい訳でもないので、セシリアの介抱を秋奈に任せて鈴に肩を貸しながら鈴の部屋に送ったのだが、自分達の部屋でシャルルのお尻を事故で！そう事故で！驚掴みした後の記憶が途絶えた。

何が起きたのか

がくつ。

o u t
一夏

二十四羽 く逆鱗（後書き）

この小説での変更点

・学年別トーナメントがペアでの参加が決定したのはラウラ襲撃後ですが、変更しました

ついでに書くと、一夏はSSSの計画をしりません

知っているのは、SSSがシャルルを助けるために動いた事で

明確に計画をしっているのはSSSとシャルルだけです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0240t/>

IS ~ 八咫鳥の導き ~

2012年1月10日05時49分発行